



新型コロナウイルス感染症による
日本看護科学学会（JANS）会員の研究活動への影響と
学会に求める支援に関する調査

（調査期間：2020年7月1日から8月10日）

日本看護科学学会 COVID-19 看護研究等対策委員会
会員動向調査担当

吉永尚紀・仲上豪二郎・新福洋子・深堀浩樹・須釜淳子

調査報告

2020年9月11日 第1版
2021年2月 1日 第2版
2021年3月 8日 第3版
2021年5月31日 第4版
2021年6月21日 第5版
2023年12月18日 第6版

背景

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、2020年に入り世界的に大流行し、個人から社会全体へと多岐にわたり深刻な影響をもたらしている。本邦の科学研究者コミュニティにおいても、緊急事態宣言の発令を含むコロナ禍の影響により、徹底した行動制限、外出自粛・休業要請に伴う在宅勤務、遠隔授業、研究活動停止への対処などを余儀なくされた。ResearchGateが世界の科学研究者コミュニティを対象に行った調査[1]によると、コロナ禍以前と比較して、「文献の検索および閲覧に費やす時間が増えた人」が46%、「論文の執筆・投稿に費やす時間が増えた人」が46%、「教育に費やす時間が減った人」が61%、といった研究遂行上のポジティブな変化が報告された一方で、「実験や調査にかかる時間が減った人」が52%にのぼり、コミュニティ全体として「知の創出」にかかる実質的なエフォートが縮小している。本邦で実施された調査でも同様に、約50%の科学研究者が「研究に費やす時間が減った」と回答している[2]。

コロナ禍による影響は、同じ科学研究者コミュニティの中でも領域によって異なることが想定される。看護系の大学教員の場合、他領域と比較して学部学生の教育、特に実習等の教育負担が重いことや、女性の割合が高くライフイベントにより研究活動が阻害されやすいことが従来から指摘されてきた[3]。これらの研究活動の阻害要因は、コロナ禍の影響により、さらに深刻になっていることが考えられる。しかしながら、看護学研究者コミュニティにおいて、コロナ禍においてどのような影響や問題が生じているのか、その実態は明らかになっていない。また本邦では、全都道府県に緊急事態宣言が2020年4月17日に発令され同年5月25日に解除されたが、今後、状況によっては感染が再度拡大する等により、同様の状況が断続的に繰り返されることが懸念される。そのため、看護学研究者コミュニティが経験したコロナ禍による研究活動への影響を明らかにするとともに、必要とする研究活動等の支援策を構築することが喫緊の課題である。

そこで本研究では、本邦最大規模の看護学研究者コミュニティである「日本看護科学学会(JANS)」の会員を対象に、コロナ禍による活動への影響およびが学会に求める支援の内容を明らかにすることを目的に、ウェブ調査を実施した。

方法概要

研究デザイン:ウェブ調査による横断研究

対象:JANS 会員のうち、本調査への参加に同意した者

調査期間:2020 年 7 月 1 日から 8 月 10 日

倫理的配慮:宮崎大学医学部医の倫理委員会の承認のもと実施した(審査番号 O-0733[承認日 6/29])。

会員管理システムを用いて配信し、調査協力への同意にチェックした者を解析対象とした。

解析:速報として、すべての項目について記述統計を実施した。カテゴリー変数については、単一選択肢については各選択肢の積み上げ横棒グラフ、複数選択肢については「はい」「いいえ」の積み上げ横棒グラフを、連続変数については平均値を算出して提示した。自由記述については個人の特定につながる情報等がないことを複数の研究者で確認した上ですべて提示した。

調査主体:吉永尚紀(COVID-19 看護研究等対策委員会委員、若手研究者活動推進委員会委員:宮崎大学准教授)、仲上豪二郎:(COVID-19 看護研究等対策委員会委員、若手研究者活動推進委員会委員長:東京大学准教授)、新福洋子(COVID-19 看護研究等対策委員会委員、若手研究者活動推進委員会委員:広島大学教授)、深堀浩樹(COVID-19 看護研究等対策委員会委員、研究・学術推進委員会委員長:慶應義塾大学教授)、須釜淳子(COVID-19 看護研究等対策委員会委員長、副理事長:金沢大学教授)

結果

以下、質問項目の後に、集計結果をグラフ等にて提示する。

①本研究への参加に同意する方は、以下にチェックを入れた上で、質問項目にお進みください。同意されない方は、このまま本調査の WEB ページを閉じてください。

問 1_1

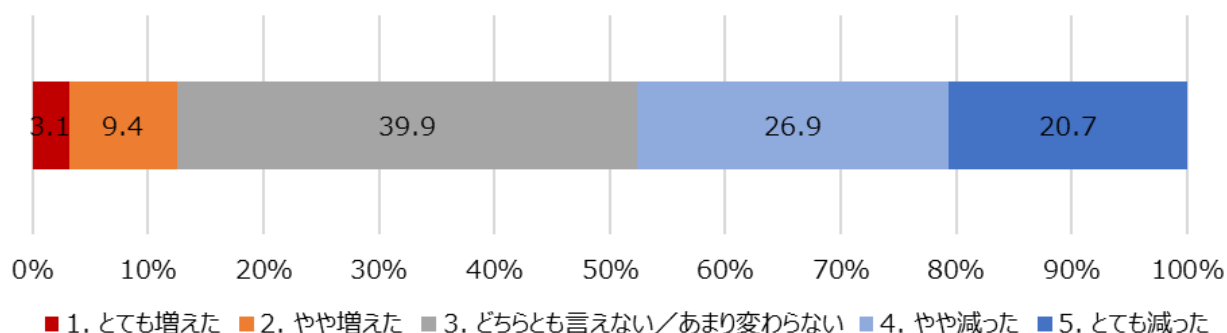
本研究への参加に同意します

正会員 9,524 名のうち 1,532 名より同意を取得した(回収率:16.1%) [調査期間中に学会 HP でのアナウンスならびにメールアドレス登録会員(9,447 名)へのメール配信により協力依頼を行った]

②直近 3 ヶ月間（2020 年 4～6 月）の、COVID-19 による社会的影響下(コロナ禍)における、あなたの研究活動の状況について伺います。

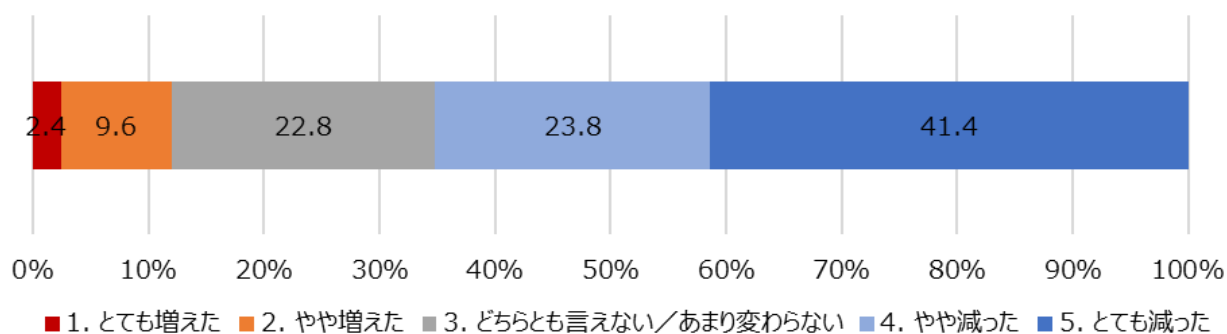
問 2_1

Q1. コロナ禍において、あなたの研究活動に対する意欲はどの程度変わりましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。(n=1,530)



問 2_2

Q2. コロナ禍において、あなたの全体の研究活動に費やす時間はどの程度変わりましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。(n=1,526)



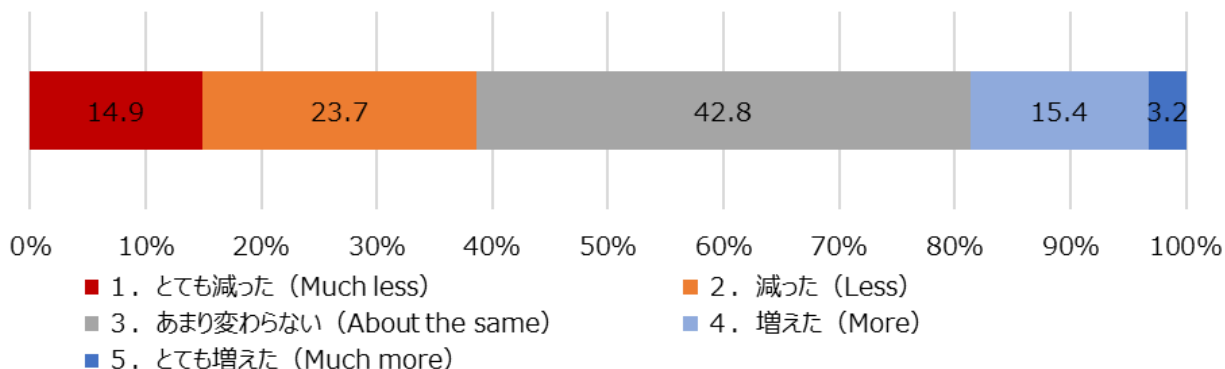
Q3. 以下は、研究者向けのソーシャル・ネットワーク・サービスである ResearchGate が実施した調査の質問項目になります。コロナ禍において、あなたが以下の活動に費やす時間はどの程度変わりましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。

(参考 [ResearchGate の調査内容] : https://www.researchgate.net/institution/ResearchGate/post/5e81f09ad785cf1ab1562183_Report_COVID-19_impact_on_global_scientific_community)

	1. とも減った (Much less)	2. 減った (Less)	3. あまり変わらな (About the same)	4. 増えた (More)	5. とも増えた (Much more)
1. 文献検索 (Literature search)	1	2	3	4	5
2. 論文執筆 (Writing papers)	1	2	3	4	5
3. 研究費申請書の執筆 (Writing grants)	1	2	3	4	5
4. キャリア開発に関する活動 (就職・転職・昇進に関する情報収集や書類作成など) (Career opportunities)	1	2	3	4	5
5. 実験や調査の実施 (Experiments)	1	2	3	4	5
6. 教育 (Teaching)	1	2	3	4	5
7. 研究室マネジメント (Lab management)	1	2	3	4	5
8. 他の研究者との連携・共同 (Collaborating with other scientists)	1	2	3	4	5
9. 研究関連物品 (器材・試料・事務物品・ソフトウェアなど) の購入に関する活動 (Purchasing lab equipment)	1	2	3	4	5
10. 研究関連の会議・会合 (学会や研究会など) への参加 (Attending conferences)	1	2	3	4	5

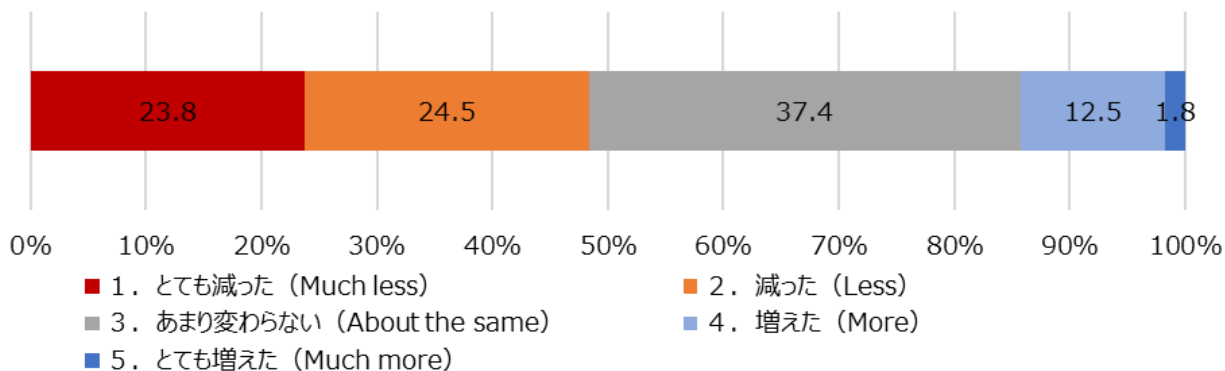
問 2_Q3-1

1. 文献検索(Literature search) (n=1,525)



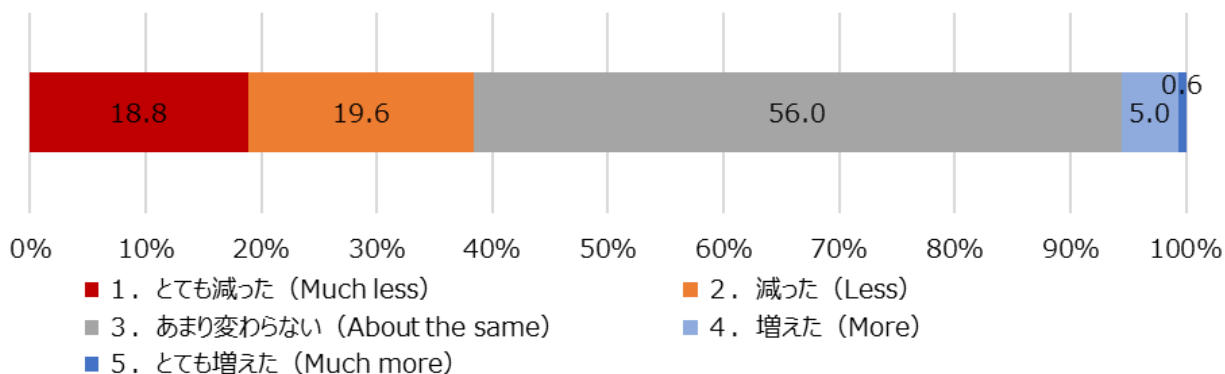
問 2_Q3-2

2. 論文執筆(Writing papers) (n=1,516)



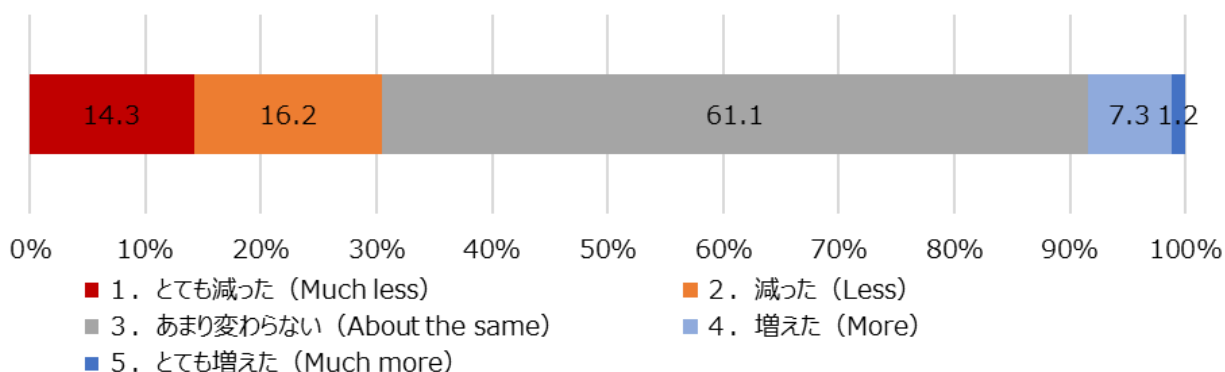
問 2_Q3-3

3. 研究費申請書の執筆(Writing grants) (n=1,502)



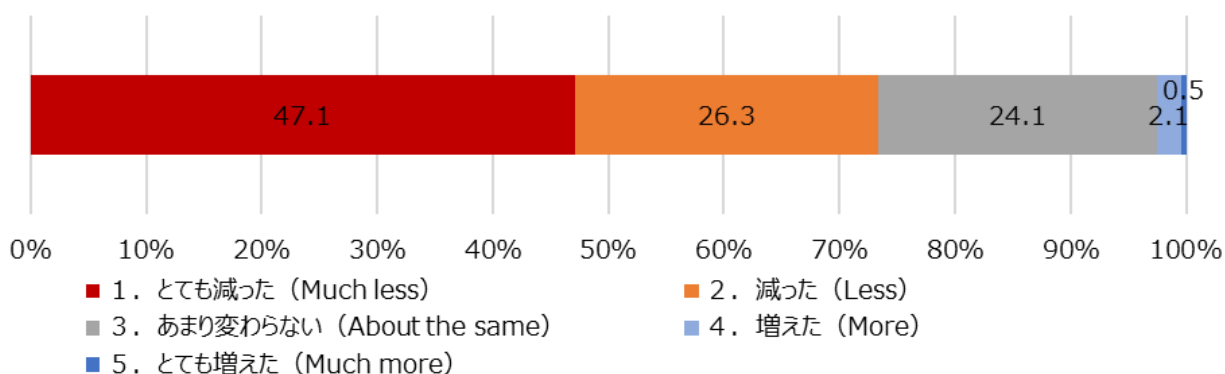
問 2_Q3-4

4. キャリア開発に関する活動(就職・転職・昇進に関する情報収集や書類作成など)(Career opportunities) (n=1,516)



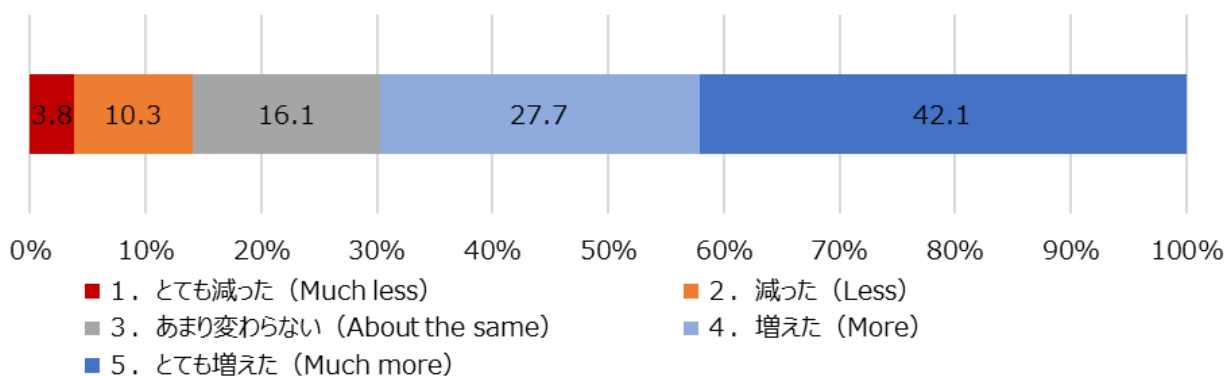
問 2_Q3-5

5. 実験や調査の実施(Experiments) (n=1,505)



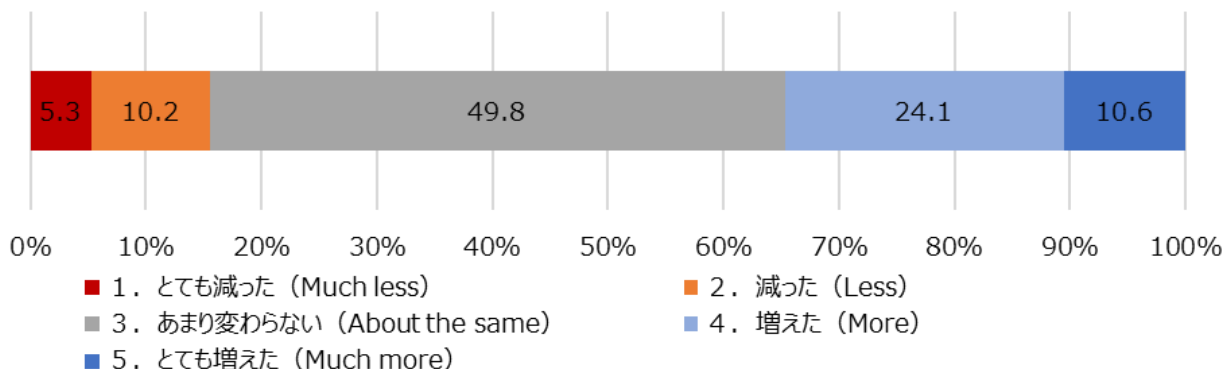
問 2_Q3-6

6. 教育(Teaching) (n=1,512)



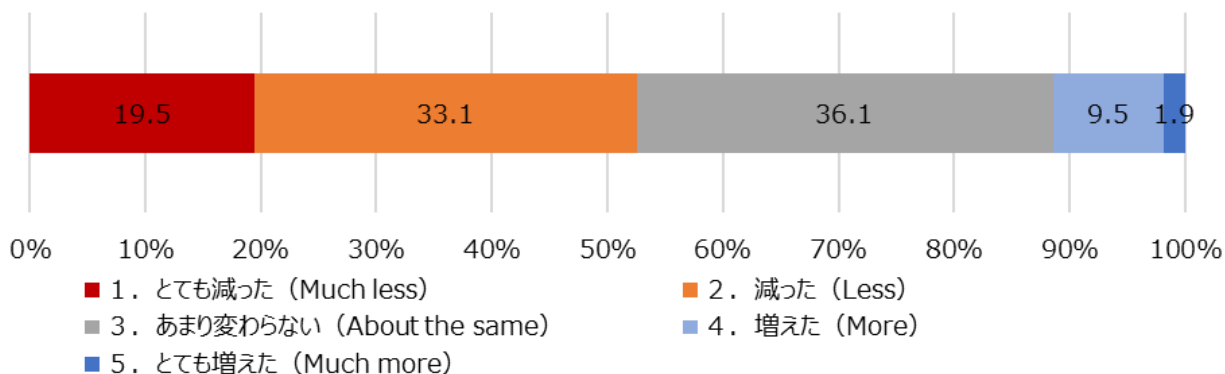
問 2_Q3-7

7. 研究室マネジメント(Lab management) (n=1,497)



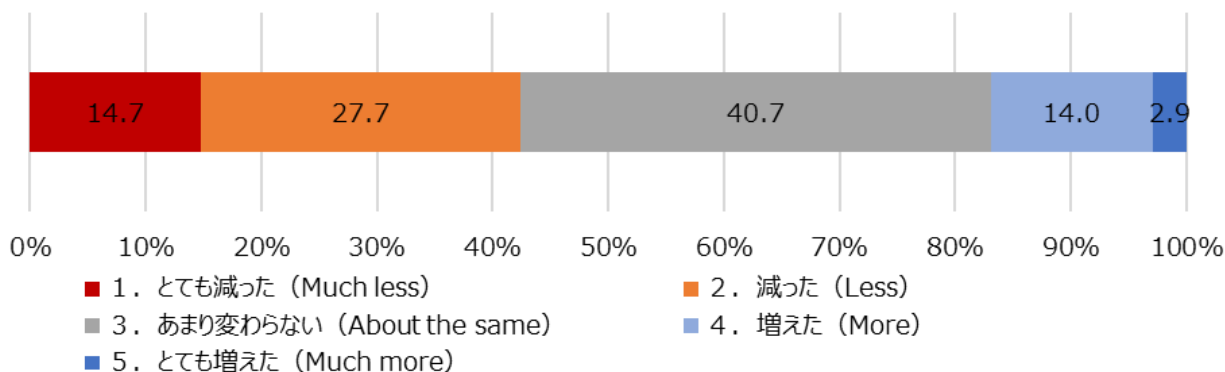
問 2_Q3-8

8. 他の研究者との連携・共同(Collaborating with other scientists) (n=1,510)



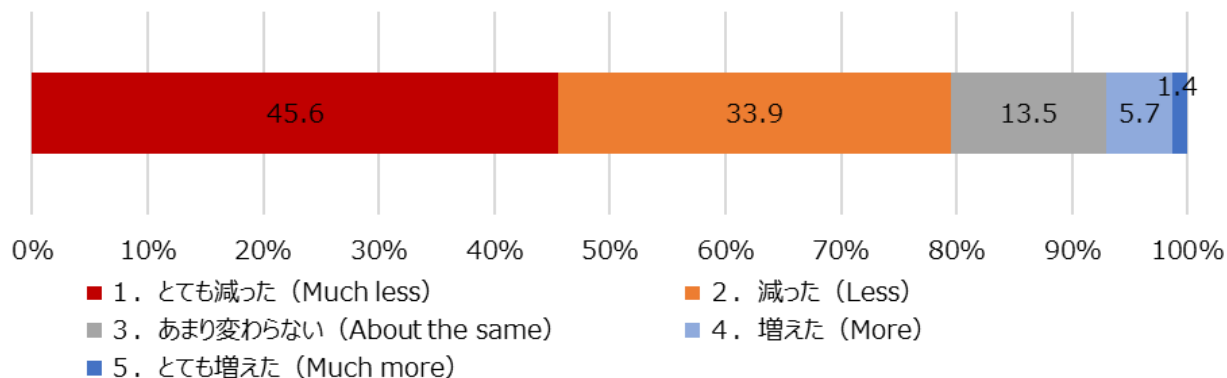
問 2_Q3-9

9. 研究関連物品(器材・試料・事務物品・ソフトウェアなど)の購入に関する活動(Purchasing lab equipment) (n=1,503)



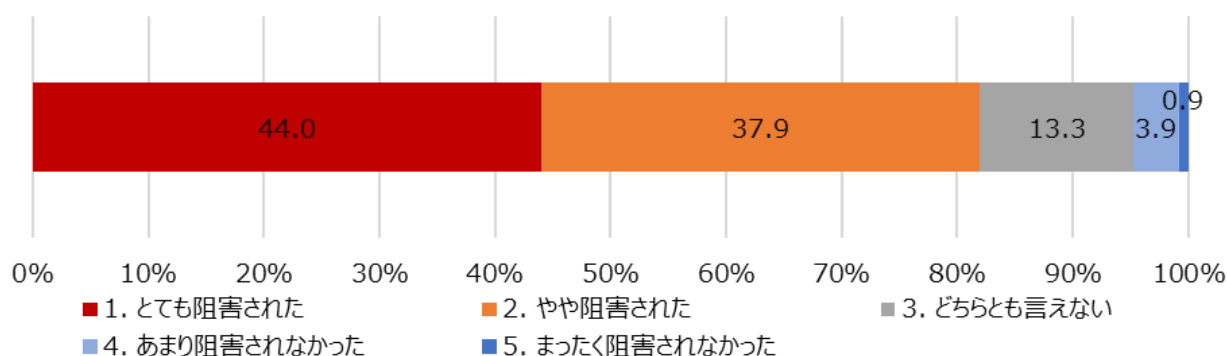
問 2_Q3-10

10. 研究関連の会議・会合(学会や研究会など)への参加(Attending conferences) (n=1,519)



問 2-Q4

Q4. コロナ禍において、あなたの全体の研究活動はどの程度阻害されましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。(n=1,526)



≫ 「4. あまり阻害されなかった」「5. まったく阻害されなかった」とお答えされた方は、その理由や工夫・対策についてご記入ください。

- 研究協力者への接触の制限が生じているため
- 阻害される段階ではなかったため。自宅勤務が増え、事務仕事が減ったことも影響している。
- 教育に関する業務(主に実習)が減ったため
- オンラインを以前から活用することに慣れていた。SNS を通じて研究者と知り合ったりZoomで勉強会を開いたり以前から行っていた。
- 余計な仕事が減ったり効率化したりしたおかげで、かえって研究活動に取り組みやすくなった。特に在宅勤務により、集中して(学務や人間関係等に妨げられることなく)研究活動を行うことができた。
- 既に依頼・回収済みのデータ(質問紙調査)分析の時期だったため、在宅で対応可能であった。在宅勤務により裁量可能な時間が増えたため、結果的に研究に割く時間が増えた。
- 新型コロナウイルスにより、手術などの入院患者は減少し、所属部署の業務も低減した。そのた

め、勤務の空き時間などを利用して研究計画書の作成や文献検索などを行うことができ、研究活動は阻害されていないと考えます。

- 待つしかない。または、分析方法を変えるか迷っています。
- 将来構想に関する検討に時間を掛けるようになった。
- 実施中の研究は昨年データをすべて取っていたので全く阻害されなかった。
- 新たなプロジェクトの開始は遅れたが、その分研究デザインなどを十分検討する時間ができた。
- リモートでの打ち合わせが有効的であり、移動時間が無くなった分、活動の自由度が増した。
- 介入研究を予定していたため、研究フィールドへの参入や対象者との対面が不可能となった。研究フィールドの方針に沿わなければならない、工夫するにも限界がある。研究計画を再検討して倫理審査を受けることを考えている。
- 授業や学生対応はあまり変わらないが、在宅勤務で拘束時間が減ったことや気持ちの余裕が出て、データの分析を試みたりする時間が以前より取れるようになった。
- これまでの会議等がオンラインになることによって、スリム化したこと、移動時間等がなくなったことにより、研究に費やすことのできる時間が増えたと感じる。ただ、インタビュー等の対面における実態調査は難しくなったと感じるので、今後はオンラインによる取組みをもっと検討していくことができると良いと考える。
- 投稿中の論文の査読後の修正が集中して行えたこと、郵送調査を予定していたため、その準備が集中して行えたことなど、阻害されるものが無かった。
- 情報学領域でコンピュータを使用できる環境にあったため、自身にとってみては特に影響はなかった。
- 在宅勤務になったことで通勤時間が減り、また、学内の雑用を依頼される機会が減り、自分のスタイルですすめることができているため。
- もともと ICT を活用した遠隔支援に関する研究を進めていたため。対象者との対面接触は最小限であり、共同研究者との打ち合わせもオンラインで行っていた。また、研究補助者もリモートワークでのオンライン作業がほとんどであり、COVID-19 に伴う研究計画の変更は必要ない。ただし、遠隔授業への対応や緊急の学内会議、学生の健康管理、学会の遠隔開催への対応などに費やす時間が増え、相対的に研究に費やす時間が減った。
- オンラインでのやり取りが増えたことで、日程調整がしやすくなったこと、移動にかかる時間の節約ができたことからあまり阻害されたと感じなかった。また、これまではクラウドサービス利用に懸念があったが、オンラインでの情報共有では必要なため利用するようになり、情報管理、共有が容易になったため、コロナがなかったらこのような方向へは進まなかったと感じた。
- 地域や施設といった現場での調査が全くできなかった一方で、例年論文執筆に時間をさけなかった時期に論文が執筆でき、その後の投稿と査読対応が進みましたので、結果としてあまり阻害されなかったと感じています。
- 研究に関わるスタッフがオンラインで対応してくれるようになった。PC、iPad pro、プリンターなどを研究室だけでなく自宅でも持ち合わせていたため、環境が安定していた。VPN 接続できる図書館が利用できたのもよかった。
- インタビュー調査を実施中であつたので、教育活動や学会等が WEB になったため移動時間がな

くなったので、調査対象者との日程調整もスムーズになり、WEB インタビューに修正して倫理審査をあらため受審し承認をもらうのに 1 か月弱かかったが、その後は順調に実施できている。在宅勤務になり、時間管理がしやすくなった。

- 阻害されたというよりも、むしろこのコロナ渦において実施できる研究を新たに開発するきっかけになった。
- もともと ICT 関連の研究活動を行っていたため、逆にいろいろな今までのノウハウが活用できた。
- データ収集が昨年度で終了して、今年は執筆が主だったため
- まだフィールドや実地調査が無い
- 特にありません。
- 会議等の出張で時間的な拘束があったが、それがなくなり効率的に進められた。いつもは調整つかず会議に欠席の方も出席でき、顔が見れるので意思疎通もでき、良かったこともあります。
- 外部とのやりとり、雑務が減ったおかげでむしろ集中して取り組めるようになった。また調査においてはチャット、Forms を活用すれば十分なのでむしろ IT 能力を高めるチャンスにはなった。
- 会議や打合せは、ZOOMなどで十分に実施することができ、交通費などもかからず移動時間も不要なため身体的にも楽である。しかし、海外出張ができないことで、国際学会が中止されたり出席できないなどがあり残念である。これは世界的なことなので仕方ないと思います。
- 研究活動以外に関わる会議や事務的な業務が減り、その分研究に費やすことのできるエフォートが増えたため。
- 感覚としては阻害されているのだが、科研は最終年度でこの状況だから、計画変更をせざるをえなかったり、今やっておかないとこれからどうなってしまうかわからないので、結果的に切羽詰まってやらざるをえなかった、という状況である。
- 講義がオンラインになり、研究に充てる時間が増えたため。
- 研究計画立案を相談することが多く、オンライン方法に代替できる部分が多かったため。
- 今年度は、すでにデータ収集は終了しており、論文執筆を中心とした研究内容であったため。
- これまでの研究課題は論文執筆している段階であり、また次の研究課題は文献検討している段階である。研究を実施する段階には至っていないこともあり、コロナによる研究活動への影響はさほど受けてはいない。
- ちょうど倫理申請の準備、審査、その後の共同研究者との打合せ期間でした。
- 事務職員は毎日誰かしら来ているが教員はリモートで大学に来ない人が多い。事務連絡が大学で仕事をしている教員に来て自分の仕事に集中できない。また、学生からもメールでの相談が増えてメールでのやりとりに業務が阻害されたと思う。
- 予定していた研究活動は完了できた。この時期は文献検討とモデル作成の計画だったため。しかし、今後予定しているフィールドワークについてはすでに予定通りの実行が困難であることが明らかになっている。
- 直接会って研究協力依頼をすることなく、遠隔通信アプリなどを活用して、共同研究者と連絡を密にとることができた。
- 学会や研究関連の会議も場所を選ばず参加が可能で、移動の負担がなくむしろ参加しやすかった。特に学会は録画で繰り返し視聴が可能なものはより理解が深まった。

- 4月に転職し、新しい職場であるが、コロナによる職場内のオリエンテーションも不十分ななか、遠隔授業の準備に追われ、かつ、在宅勤務によって、職場内人間関係も進展しないまま7月を迎えたことにより、前年度より、研究に割く時間が減っているため、新型コロナウイルス感染症だけが原因とも思わないが、前年度との比較は非常に難しい。
- もともとオンラインでの活動が多かった。また、たまたまデータ収集期間ではなかった。
- もともと研究活動に時間を費やしていなかったため、状況はあまり変わっていない。
- 研究するスタッフの環境を整えるという点で、実務が多忙で環境を整えられないという現状がある。
- もともと忙しいため、できないことに変わらない。
- 臨床現場でのデータ収集は当分無理と考え、オンライン会議、データベースの活用から論文作成を試みている。
- 少人数の研究プロジェクトが多いため。遠隔会議で大幅な時間節約が可能となったため。
- コロナ対策等で時間がとられたれストレスもかかったが、実習の延期等現時点では他の仕事が平素よりも減り、研究時間が増えた。
- 調査が終了し、ちょうど解析や論文執筆など在宅でも可能な活動に取り組むタイミングだった。
- 家族の地方転勤のため、昨年から在宅勤務のための環境を整えていた。
- 学術集会在がほとんど Web 開催となったため、参加に障害はなく、影響を受けていない。
- ちょうど倫理審査や計画書、論文執筆の時期であったため。ほかの仕事が減った分、こちらに時間を割くことができた。
- 在宅勤務となり、むしろ自分の時間が増えた。
- 病院勤務の看護師であるため、研究活動はほとんどプライベートの時間で行っている。
- 現在、臨床に出向いての研究ではないため、阻害されなかった。
- 遠隔での会議・インタビューが実施できた。移動がない分、無駄な時間が少なくなった。
- 資料もその場で共有できることで、効率的になったように思う。
- コロナ対策のために時間をさくことが増えたため、研究以外の細々した仕事や普段していた仕事の変更など、全体的な仕事量の増加に伴うもの。これまでしてきたことがそのまま通用しないため、全体的な変更が伴ったため、仕事量が増え、研究に携わりたいという意欲はあるが、時間がない。日々、状況が変わってくるため、予定していた計画を変更することも多く、仕事が終わらない状況もあった。対策としては、早めに指針を打ち出し、コロナ渦でも最低ラインでできる事を検討することが大事と考える。最良案ではなく、妥協案で進むことで、状況の変化にはある程度余裕をもって対応することができると考える。また、リモート化を進めることで、解決することもあると思うが、なかなか進まず、アナログで対応している状況。
- オンライン会議などができるようになり、出張が減り無駄な移動時間がなくなった点大きい。
- 今後も、時間を有効に活用するためオンラインでの講義や会議、研究活動を取り入れていきたいが、組織内には「顔を合わせる方が意思疎通ができる」「場の雰囲気味わえた方が良い」「対面でないとディスカッションしづらい」という意見もあり、足並みをそろえることが難しいと感じている。
- 研究室にこもっている時間が確保された。
- 病院を対象にした研修プログラムの介入研究は、スケジュールの遅延が生じている。開催の在り

方を検討していく必要がある。

- 大学内の事務局が教育中心にシフトされたため、研究費の使用がストップされ、図書館の運営もストップされ、倫理委員会開催の中止があった。
- 科研費の助成を受けているが、期間の延長を余儀なくされている。科研費に関しても寛容な対応をいただきたい。
- 面接調査を自粛しており、大幅に予定が遅れている。三密を防ぐ工夫をして、今後再開できればと考えている。
- インタビューの実施は皆無となり実施は減ったが、新たな分野の研究についての文献検討や研究計画、倫理申請したり、論文執筆したり、ZOOM で他大学の教員と相談したり、今できることを実施した。学生への直接対応の時間や通勤時間が無くなった分、服装も気にせず、起きたらすぐパソコンに迎えて、すぐ執筆できる環境だったので、トータルとしては阻害された感じがしない。
- 大学院の博士後期課程に在籍しています。指導教員の先生と、オンラインによるゼミを4月以降、4回(5回目も日程調整済み)行いました。自宅と大学院が遠いため、なかなか対面でのゼミが昨年度はできなかったのですが、コロナ禍でも、ゼミができています。
- 今は研究に向けての勉強や文献検討を中心に進めているので、今のところコロナの影響はあまりないです。
- 博士課程に在籍しながら、臨床看護師として covid-19 にも対応する病院へ勤務しており、研究フィールドへの出入りが自由にできること、調査協力依頼を外部に依頼する必要がないこと。
- covid-19 による制限で、外部講師等が真っ先に院内に出入りすることが出来なくなり、院内のリソースがより活用されることとなったことで、自身が研究活動や指導を行う機会が増えたこと。
- 在宅勤務となり通勤時間(往復3時間)がなくなったため、研究活動に時間を使えたため。
- 締め切りなどがあるので計画的に取り組む上で、コロナに阻害されるわけにはいかなかった。
- コロナ対策に時間がとられた。
- 演習や実習がキャンセルになった分、自由に使える時間が増えた。
- 自身の出張が減り、院生の修論・ドク論や、学部生の卒研の指導に割く時間が大幅に増え(個別オンライン対応が特に増えた)、個々の研究活動が進んだ。自身の研究についても、皆に触発されて思考が深まった。
- オンラインの活用
- 教育プログラムを作成することでしたので、遠隔で利用できる教材の開発が寧ろ進んだから。
- コロナ禍が拡大する前に、データ収集を終え現在は分析活動に入っている状況ですので特に工夫等もなく、時間的にたまたまコロナ禍に当たらなかったということになります。
- 看護以外の職業に転職できたため
- 4月～5月までは遠隔授業の準備や遠隔授業実施の期間は、デスクワーク中心でしたので、研究に費やす時間も割とみつことができました。6月より遠隔による実習指導が開始され、学生と記録や考察をこれまでの実習よりも濃厚にかかわることができるので、考察の深まりはより充実しているのではないかと感じます。ただし、学生の更新した記録物の印刷など多量になり、インク代や印刷用紙の出費が予想以上にかかっています。また、6月より学生指導にかかる時間もかなりかかり、退勤時間が22:00近くになることが多いです。

- Zoom を利用し、今まで以上に研究関連の時間を作る時間ができた。
- 移動がない分、時間の効率が良かった。
- 遠隔において研究者間の連携がとれることが、今回の発見であった。
- 業務が多すぎ、研究どころではなかったです。
- 看護職種あてに、アンケート調査を依頼できない。→ 終息を待ち、研究を再開の予定。
- 大学の授業の形態が変更になり、講義資料等の修正や準備に、予定外の時間と労力を費やすことになってしまった。教育活動を優先することになり、研究に費やす時間を減少せざるを得なかった。予定より遅れながら研究をおこなった。
- 講義や実習がオンライン化されたため、自由になる時間がうまれた。その分、研究にあてる時間は増えている。また、各種研究会等の集まりもオンラインで行うようになり、これまでは大学業務の都合等で諦めていたものにも参加しやすくなった。一方で、インタビュー調査やフィールドワークは一切不可能になってしまったので、科研の業績については文献研究を加えようと考えていたり、過去の研究課題を引き続き論文化することに努めている。オンラインでインタビューができないかどうかを検討している。

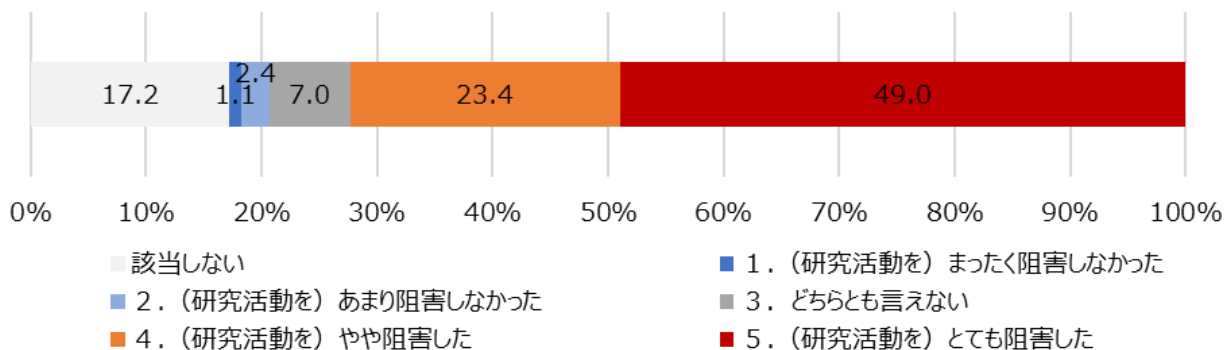
Q5. 以下は、コロナ禍において研究活動を阻害する要因として考えられる項目です。これらは、あなたの研究活動をどの程度阻害しましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選び下さい。項目に該当しない人(例: 研究補助者がいない人、教育業務がない人など)は、「該当しない」とお答えください。

	該当しない	1. (研究活動を)まったく阻害しなかった	2. (研究活動を)あまり阻害しなかった	3. どちらとも言えない	4. (研究活動を)やや阻害した	5. (研究活動を)とても阻害した
1. 研究対象者との対面接触の困難	1	2	3	4	5	6
2. 調査対象施設への出入りの困難	1	2	3	4	5	6
3. 国内の移動手段の確保や出張の困難	1	2	3	4	5	6
4. 海外への移動手段の確保や出張の困難	1	2	3	4	5	6
5. 研究に必要な器材・文献・資料・データ・パソコン・ソフトウェア等の利用の困難	1	2	3	4	5	6
6. 研究補助者(リサーチアシスタントを含む)の活用の困難	1	2	3	4	5	6
7. 在宅勤務による研究の効率の低下	1	2	3	4	5	6

8. 自身の所属組織内外の共同研究者(同僚・大学院生・他施設の研究者など)との打ち合わせの困難	1	2	3	4	5	6
9. 研究に関連する部署や組織、機関(事務、倫理審査委員会、調査協力先の団体、調査・研究の外注先など)の機能低下	1	2	3	4	5	6
10. 研究計画を変更したことによる、必要な予算の確保の困難	1	2	3	4	5	6
11. 研究に関するピアサポートやコミュニケーションの困難	1	2	3	4	5	6
12. 共同研究者との共同研究の停滞	1	2	3	4	5	6
13. 大学院生との共同研究の停滞	1	2	3	4	5	6
14. 研究指導にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
15. 投稿した論文(和文・英文)の査読・出版プロセスの遅延	1	2	3	4	5	6
16. COVID-19 対応に専門職として貢献できない罪悪感・葛藤	1	2	3	4	5	6
17. 講義にかける時間の増加(準備・評価を含む)	1	2	3	4	5	6
18. 演習にかける時間の増加(準備・評価を含む)	1	2	3	4	5	6
19. 実習にかける時間の増加(準備・評価を含む)	1	2	3	4	5	6
20. 実践(臨床)にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
21. 学生・職員の健康管理にかける時間の増加(体調チェックなど)	1	2	3	4	5	6
22. 感染症への恐怖を呈する学生・職員の支援にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
23. その他の学生・職員の相談にかける時間の増加(就職相談、メンタルヘルス相談、経済支援相談など)	1	2	3	4	5	6
24. 管理運営活動にかける時間の増加(会議・委員会活動、オープンキャンパス、就職説明会など)	1	2	3	4	5	6
25. 情報通信技術(ICT)の習熟にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
26. 上司・同僚・部下や組織に対する ICT 関連の支援にかける時間の増加(WEB ミーティングシステムのインストールや使用方法の支援など)	1	2	3	4	5	6
27. COVID-19 に関する社会貢献活動(学会の委員会活動、市民講座など)にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
28. COVID-19 の影響による家事にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
29. 家庭内での COVID-19 の感染予防・健康管理にかける時間の増加	1	2	3	4	5	6
30. COVID-19 の影響により生じた家庭内の葛藤・ぶつかり合い	1	2	3	4	5	6
31. COVID-19 に伴う子どもの休園・休校・登校制限による育児時間の増加	1	2	3	4	5	6
32. COVID-19 の影響による、介護にかける時間の増加(デイサービスやショートステイの利用中止によるものなど)	1	2	3	4	5	6
33. COVID-19に対応するための家事・育児・介護が十分に行うことができない罪悪感・葛藤(家庭での感染予防など)	1	2	3	4	5	6

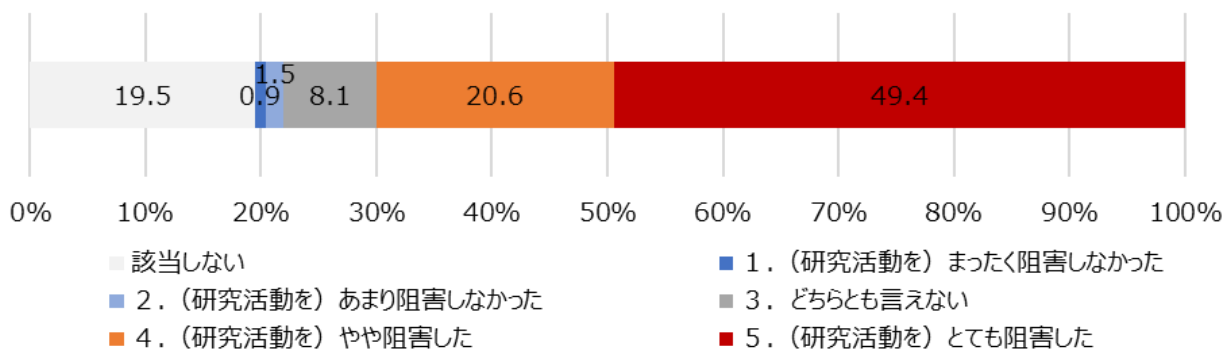
問 2-Q5-1

1. 研究対象者との対面接触の困難 (n=1,520)



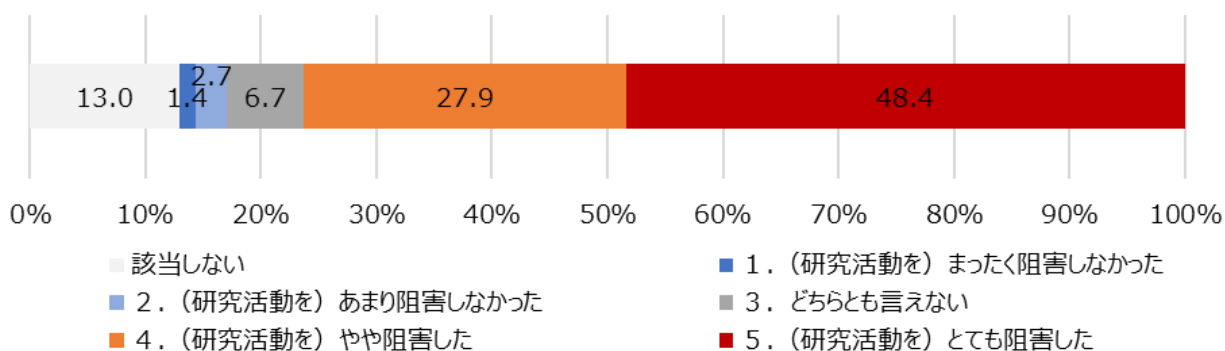
問 2-Q5-2

2. 調査対象施設への出入りの困難 (n=1,509)



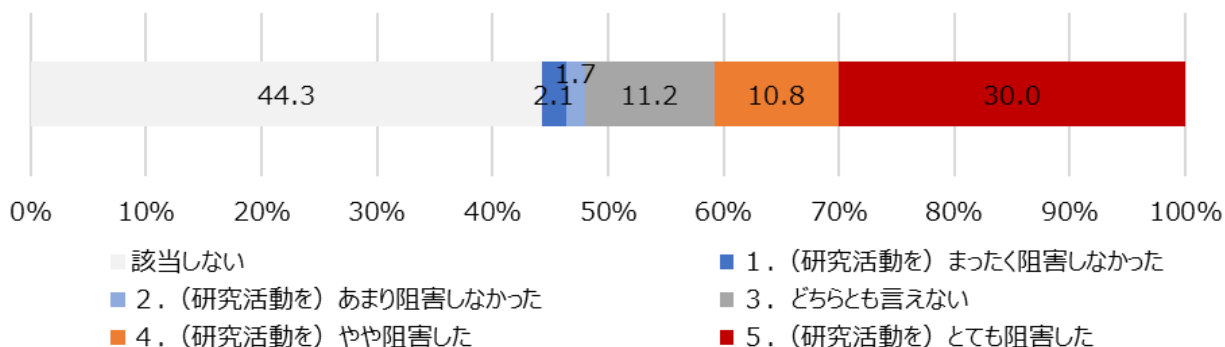
問 2-Q5-3

3. 国内の移動手段の確保や出張の困難 (n=1,514)



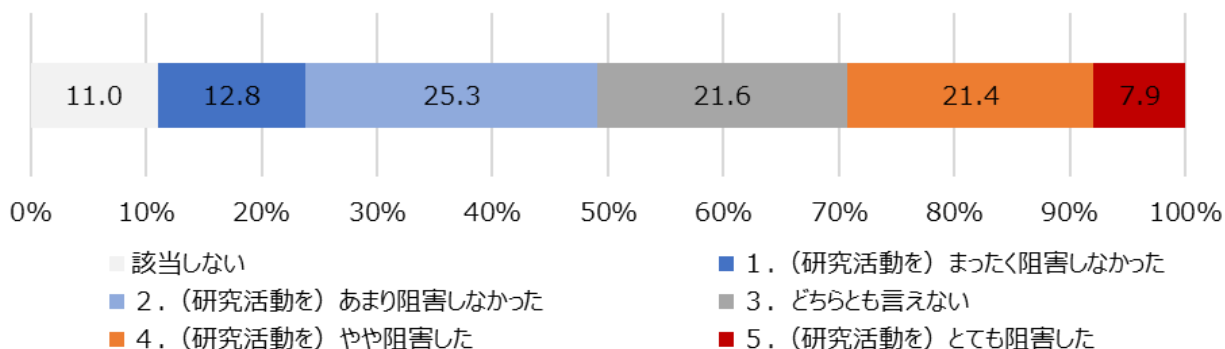
問 2-Q5-4

4. 海外への移動手段の確保や出張の困難 (n=1,506)



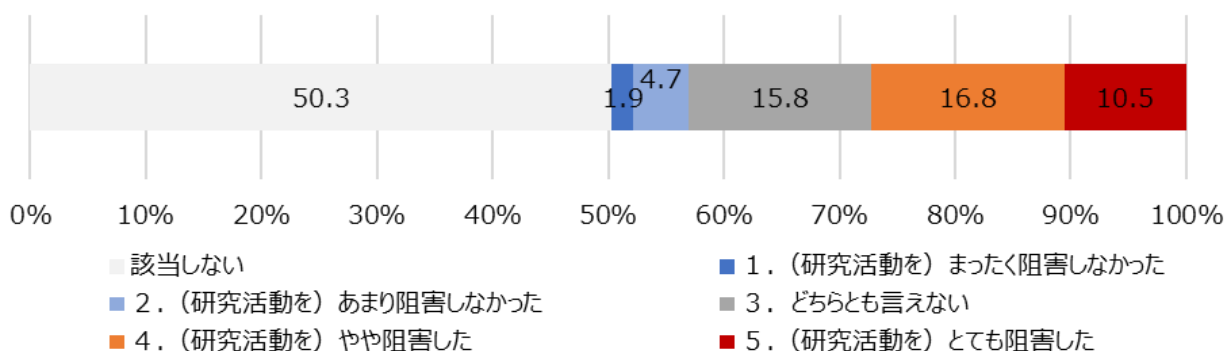
問 2-Q5-5

5. 研究に必要な器材・文献・資料・データ・パソコン・ソフトウェア等の利用の困難 (n=1,513)



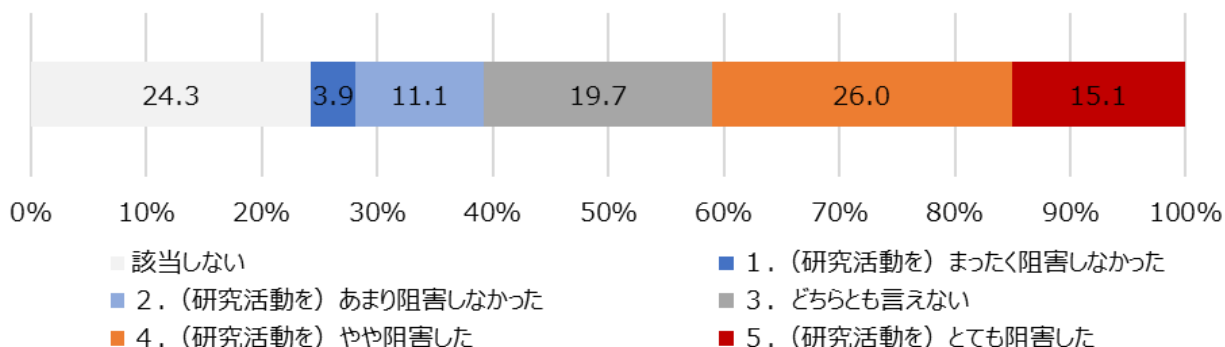
問 2-Q5-6

6. 研究補助者(リサーチアシスタントを含む)の活用の困難 (n=1,502)



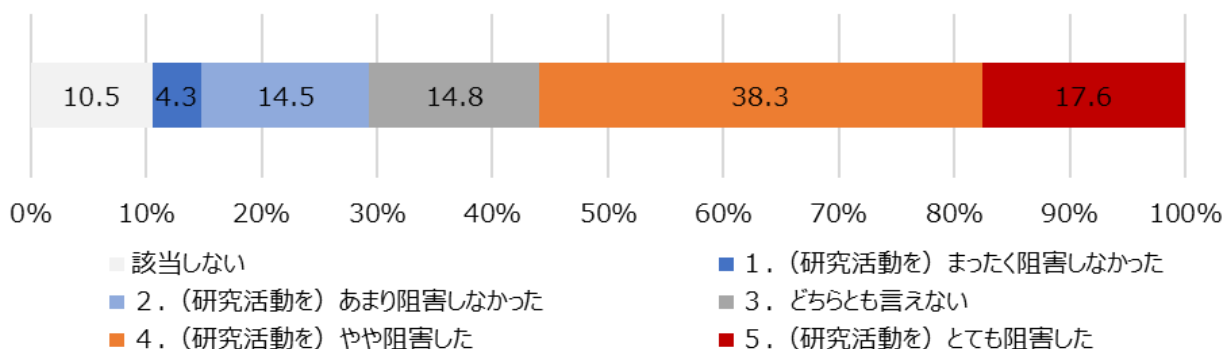
問 2-Q5-7

7. 在宅勤務による研究の効率の低下 (n=1,513)



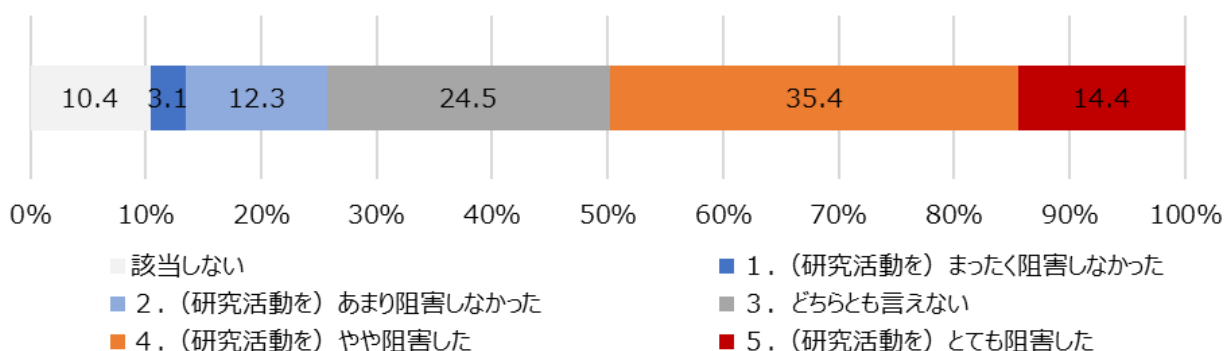
問 2-Q5-8

8. 自身の所属組織内外の共同研究者(同僚・大学院生・他施設の研究者など)との打ち合わせの困難 (n=1,518)



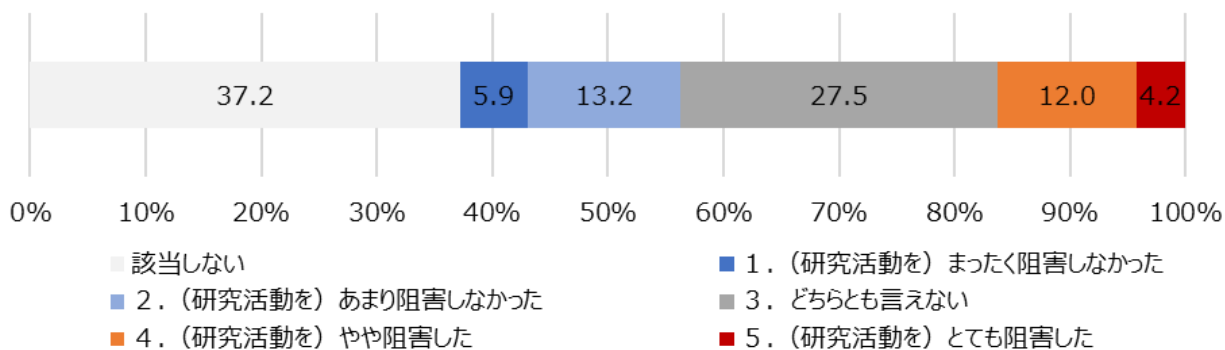
問 2-Q5-9

9. 研究に関連する部署や組織、機関(事務、倫理審査委員会、調査協力先の団体、調査・研究の外注先など)の機能低下 (n=1,507)



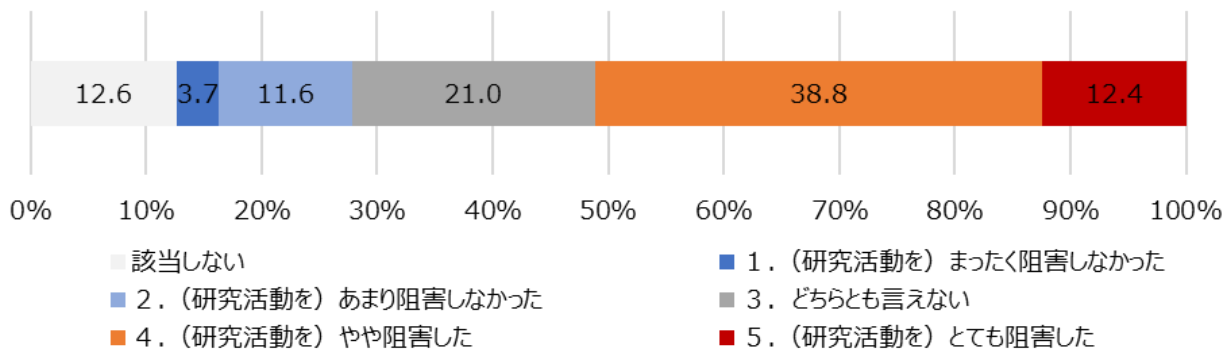
問 2-Q5-10

10. 研究計画を変更したことによる、必要な予算の確保の困難 (n=1,511)



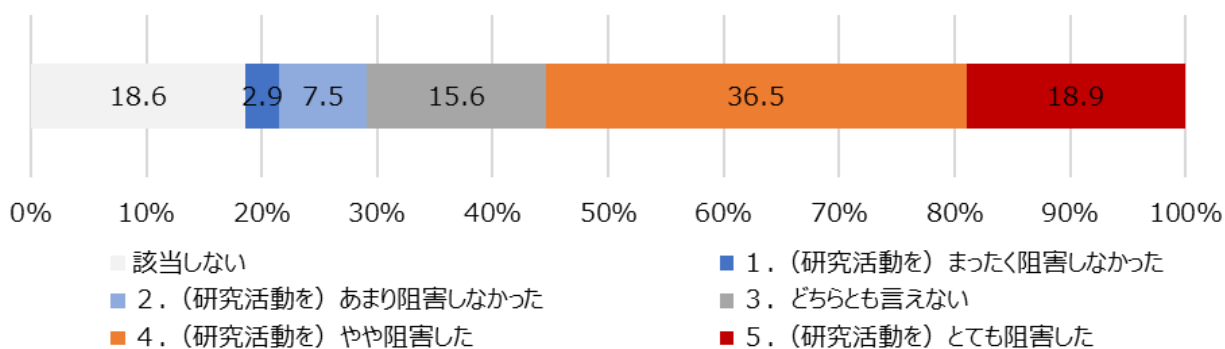
問 2-Q5-11

11. 研究に関するピアサポートやコミュニケーションの困難 (n=1,507)



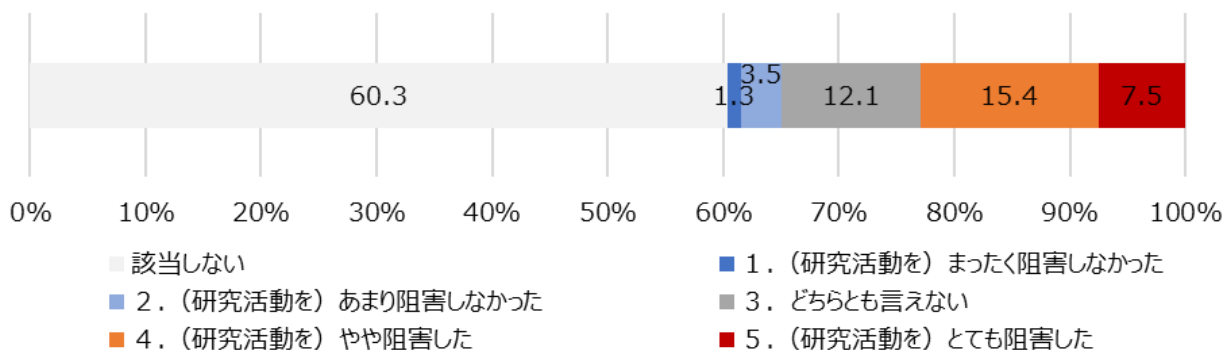
問 2-Q5-12

12. 共同研究者との共同研究の停滞 (n=1,508)



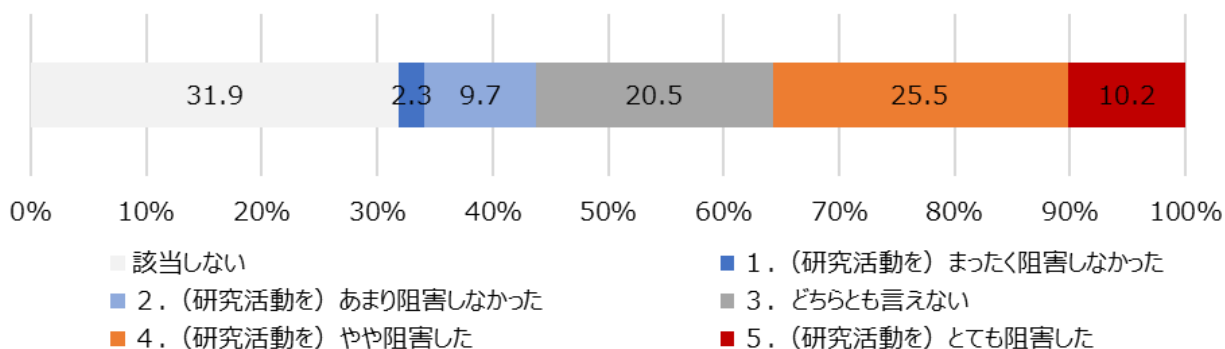
問 2-Q5-13

13. 大学院生との共同研究の停滞 (n=1,507)



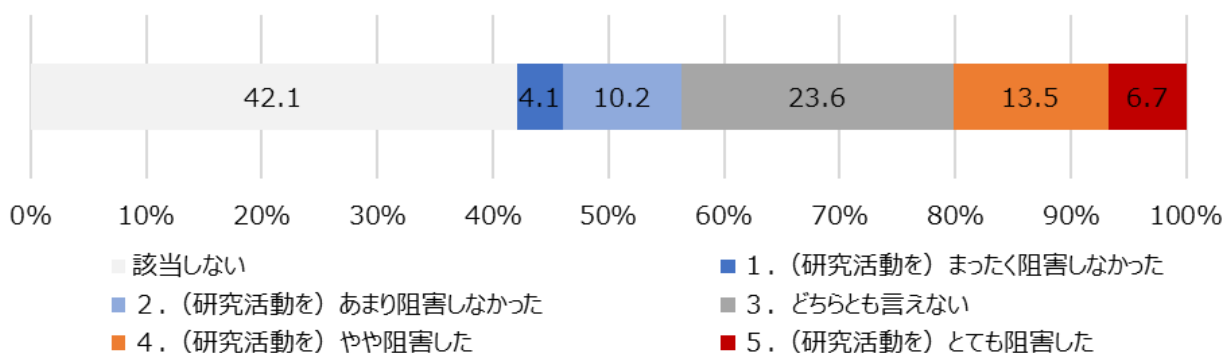
問 2-Q5-14

14. 研究指導にかかる時間の増加 (n=1,507)



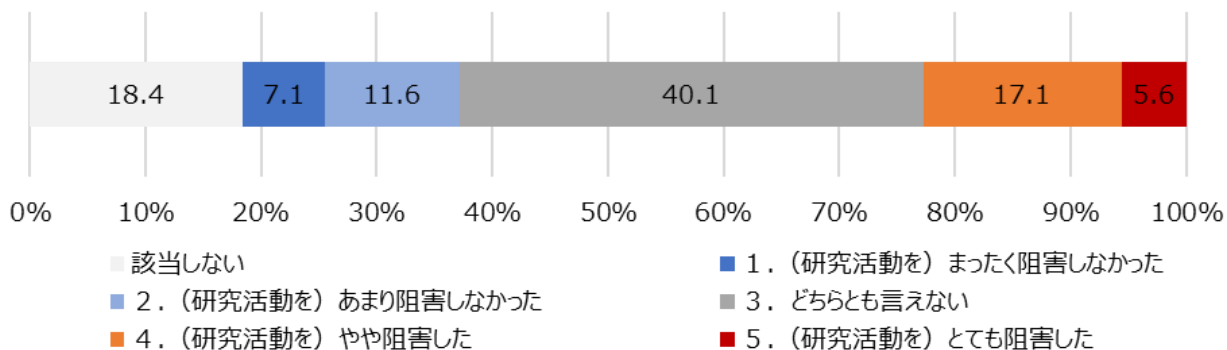
問 2-Q5-15

15. 投稿した論文(和文・英文)の査読・出版プロセスの遅延 (n=1,507)



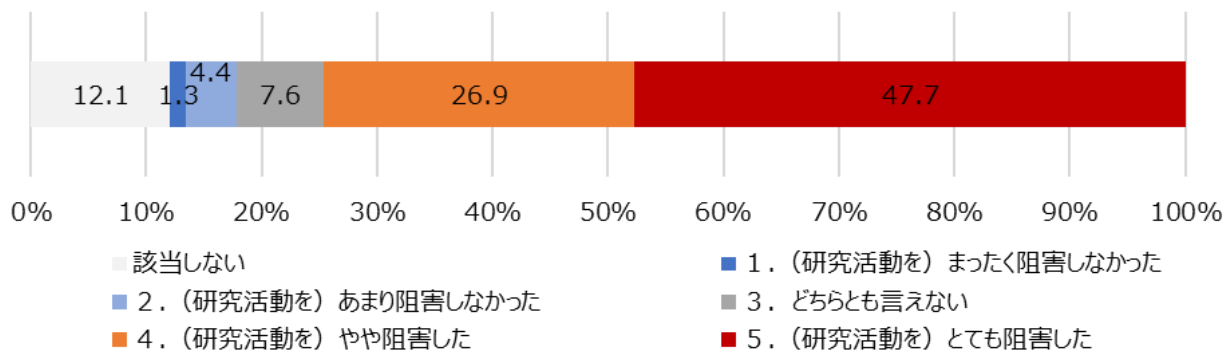
問 2-Q5-16

16. COVID-19 対応に専門職として貢献できない罪悪感・葛藤 (n=1,512)



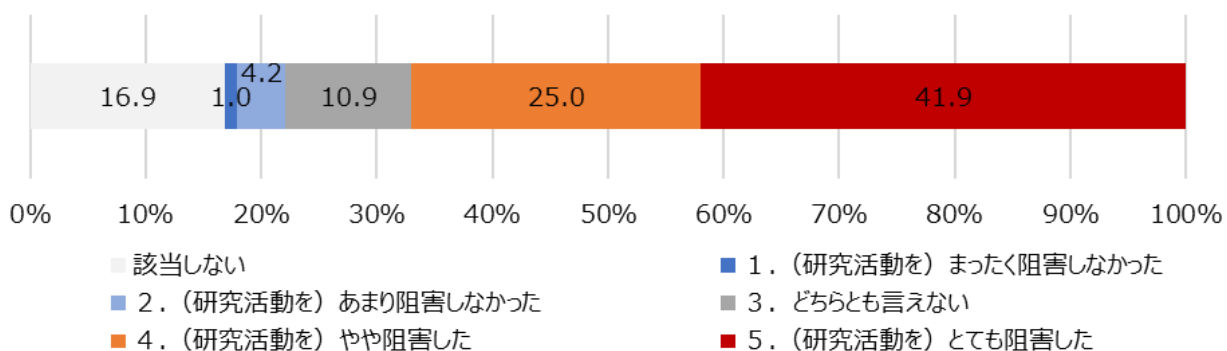
問 2-Q5-17

17. 講義にかける時間の増加(準備・評価を含む) (n=1,514)



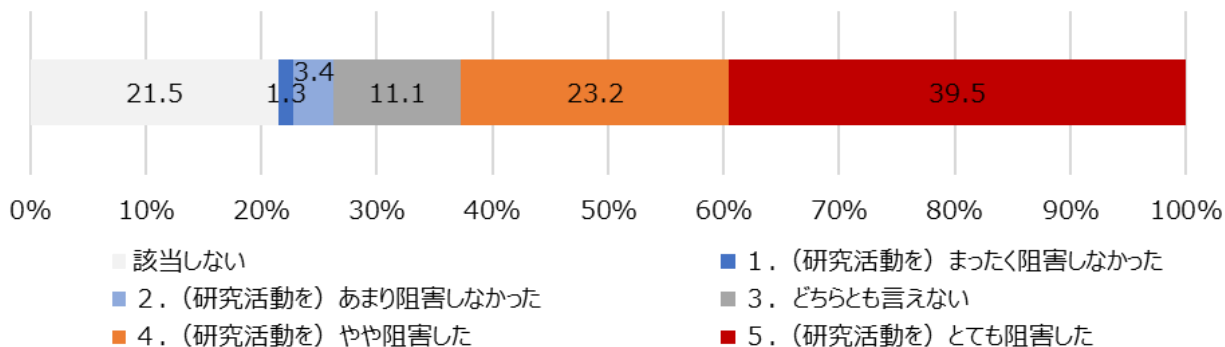
問 2-Q5-18

18. 演習にかける時間の増加(準備・評価を含む) (n=1,502)



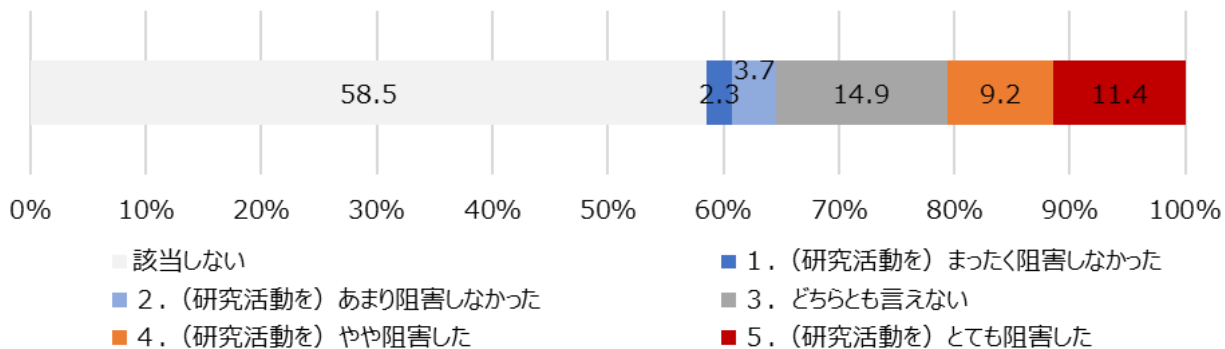
問 2-Q5-19

19. 実習にかける時間の増加(準備・評価を含む) (n=1,504)



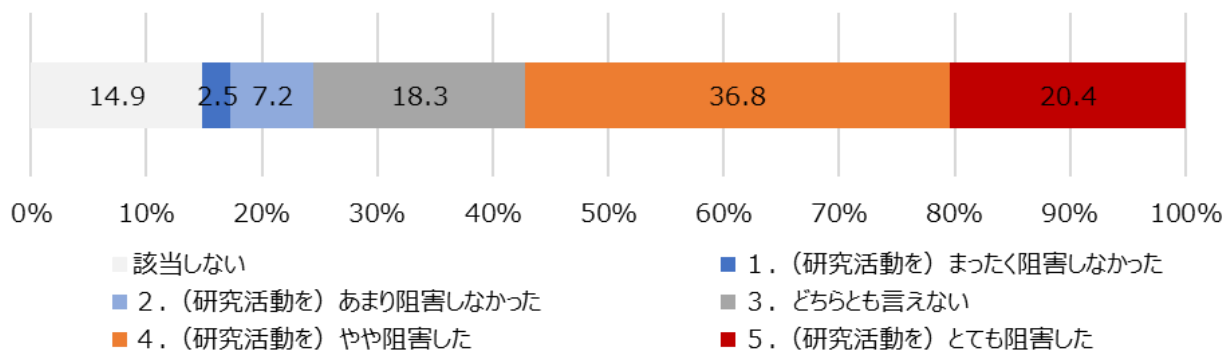
問 2-Q5-20

20. 実践(臨床)にかける時間の増加 (n=1,498)



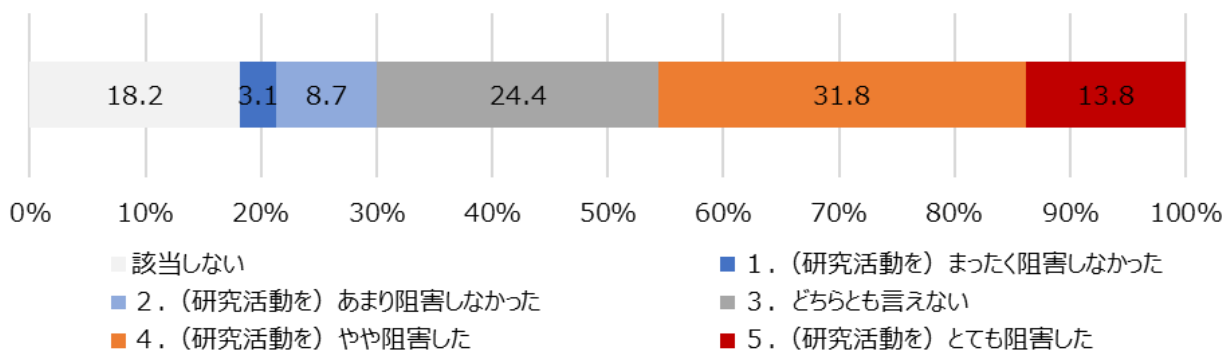
問 2-Q5-21

21. 学生・職員の健康管理にかける時間の増加(体調チェックなど) (n=1,507)



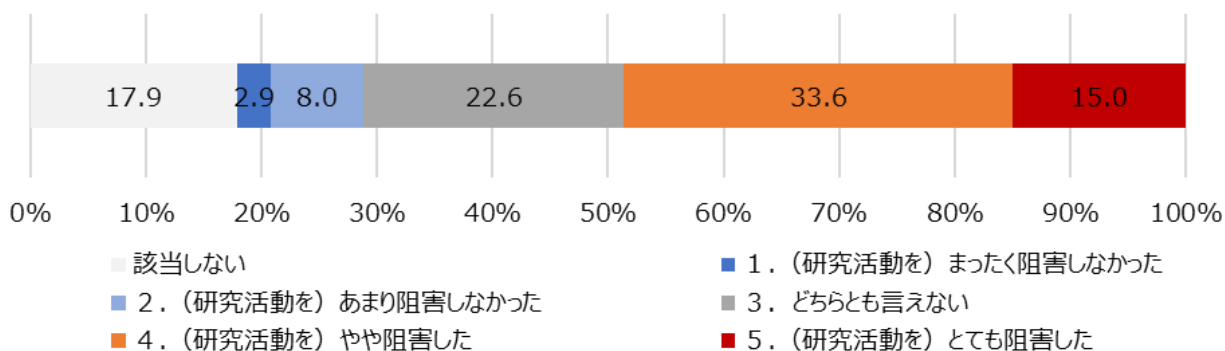
問 2-Q5-22

22. 感染症への恐怖を呈する学生・職員の支援にかかる時間の増加 (n=1,510)



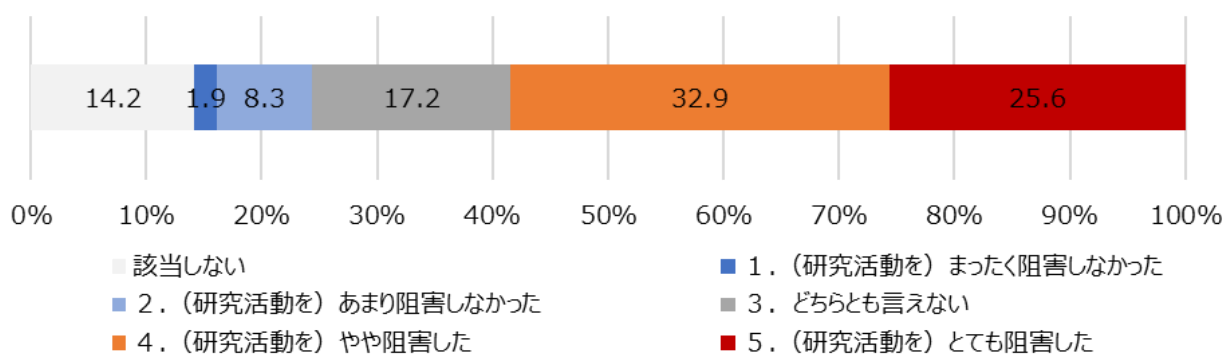
問 2-Q5-23

23. その他の学生・職員の相談にかかる時間の増加(就職相談、メンタルヘルス相談、経済支援相談など) (n=1,511)



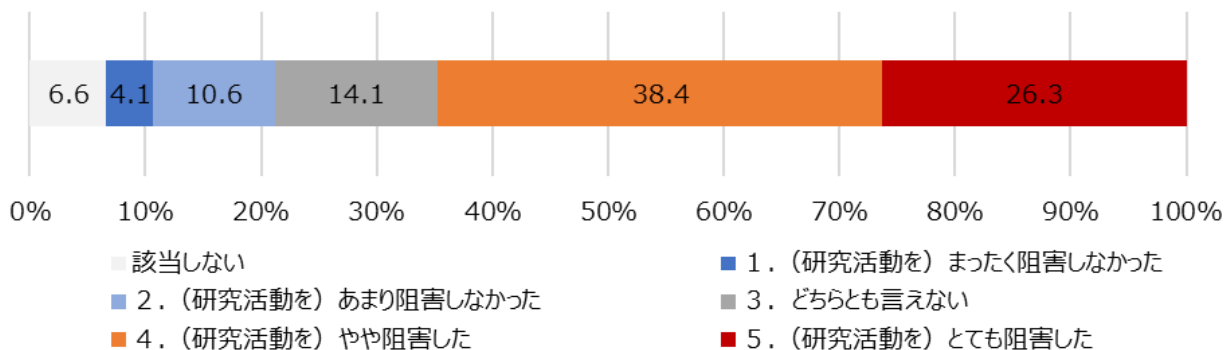
問 2-Q5-24

24. 管理運営活動にかかる時間の増加(会議・委員会活動、オープンキャンパス、就職説明会など) (n=1,509)



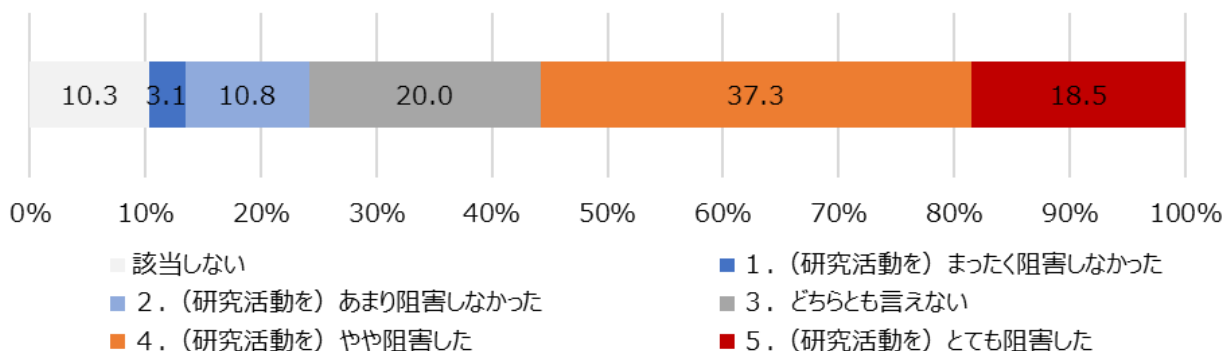
問 2-Q5-25

25. 情報通信技術 (ICT) の習熟にかける時間の増加 (n=1,507)



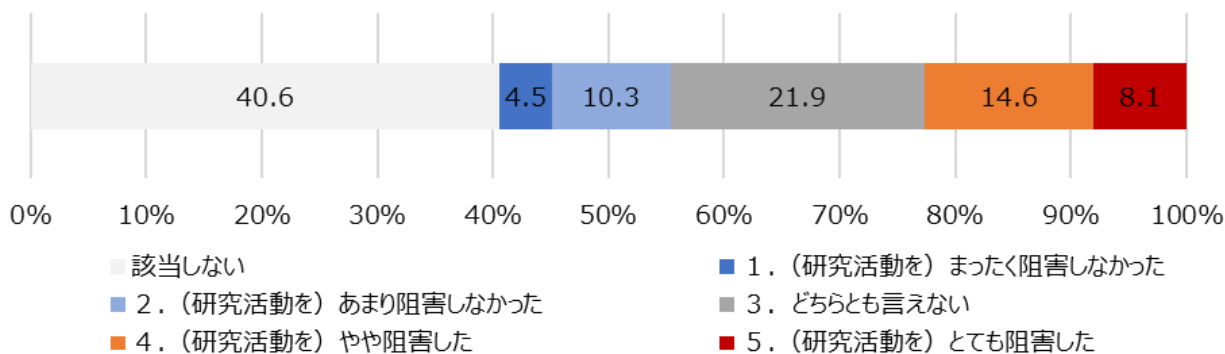
問 2-Q5-26

26. 上司・同僚・部下や組織に対する ICT 関連の支援にかける時間の増加 (WEB ミーティングシステムのインストールや使用方法の支援など) (n=1,511)



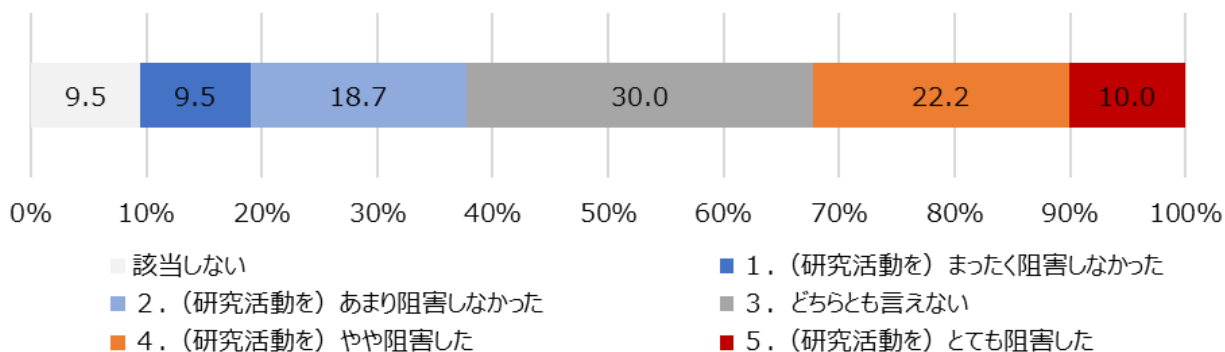
問 2-Q5-27

27. COVID-19 に関する社会貢献活動 (学会の委員会活動、市民講座など) にかける時間の増加 (n=1,504)



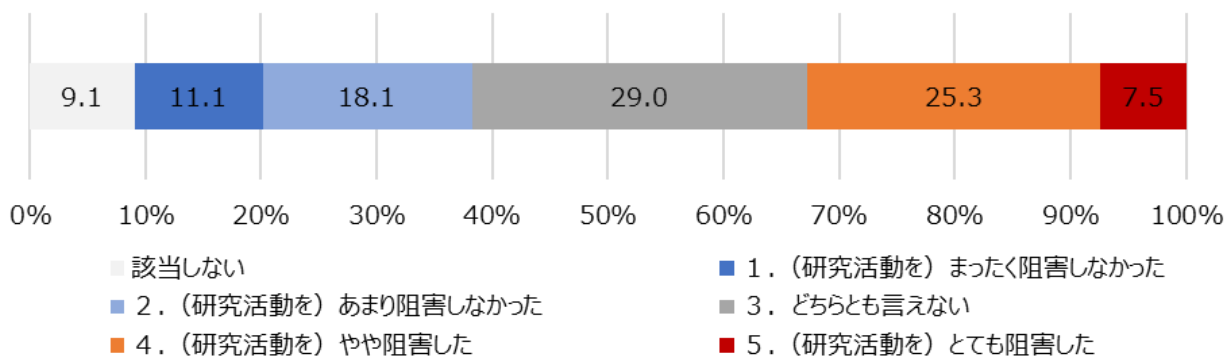
問 2-Q5-28

28. COVID-19 の影響による家事にかかる時間の増加 (n=1,506)



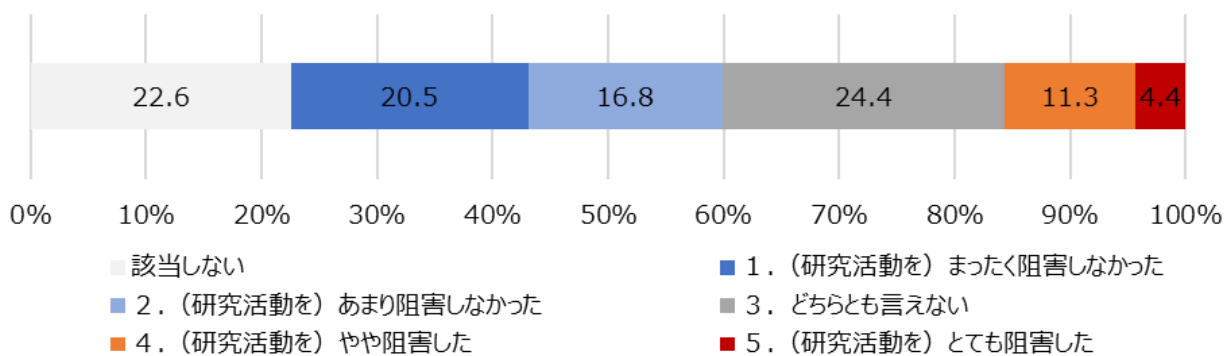
問 2-Q5-29

29. 家庭内での COVID-19 の感染予防・健康管理にかかる時間の増加 (n=1,511)



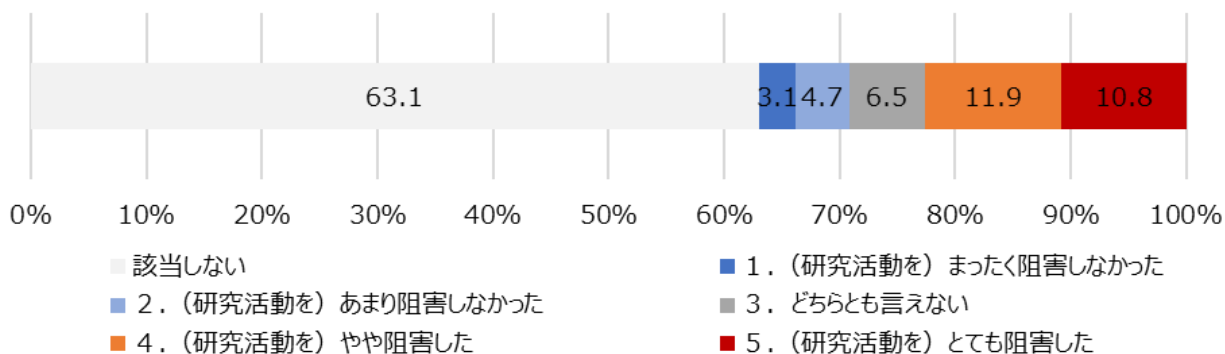
問 2-Q5-30

30. COVID-19 の影響により生じた家庭内の葛藤・ぶつかり合い (n=1,508)



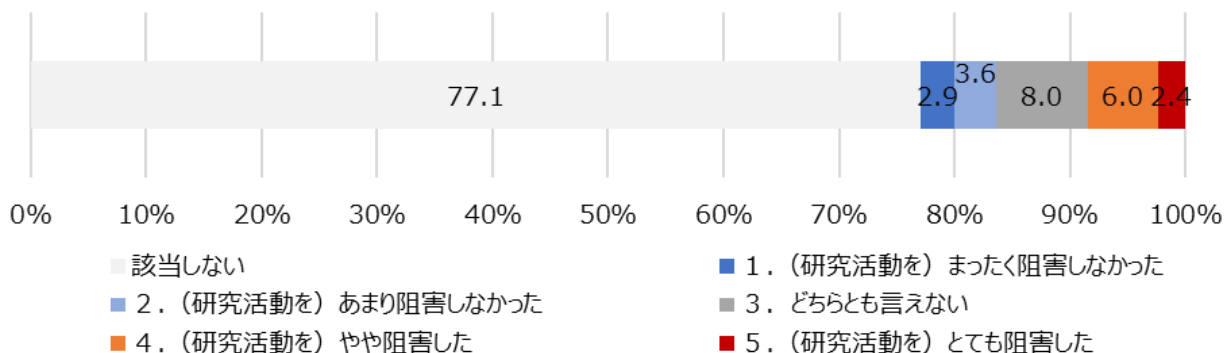
問 2-Q5-31

31. COVID-19 に伴う子どもの休園・休校・登校制限による育児時間の増加 (n=1,506)



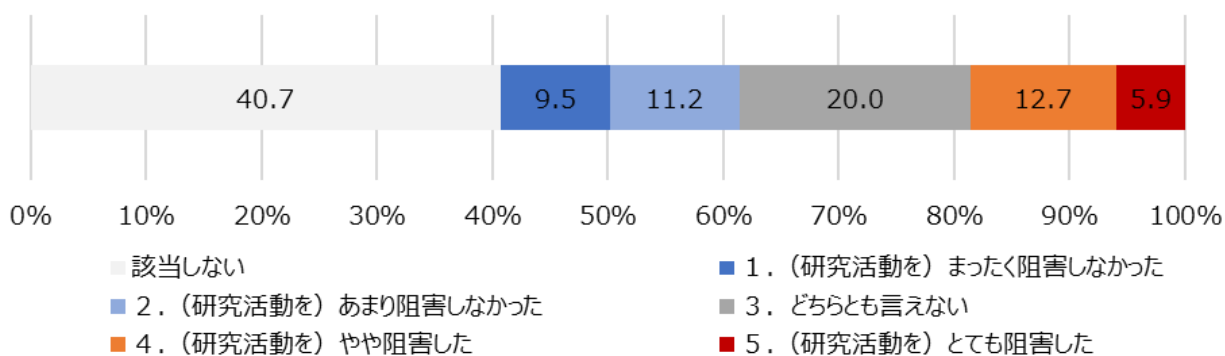
問 2-Q5-32

32. COVID-19 の影響による、介護にかかる時間の増加(デイサービスやショートステイの利用中止によるものなど) (n=1,508)



問 2-Q5-33

33. COVID-19 に対応するための家事・育児・介護が十分に行うことができない罪悪感・葛藤(家庭での感染予防など) (n=1,514)



問 2-Q6

Q6. 上記以外に、コロナ禍において、あなたの研究活動が阻害された要因がありましたらご記入ください。

- 介入研究を3つの病院の外来で実施している。この介入が患者と看護師の面談による個別介入で30分ぐらいかかるため、コロナで受診回数が減ったこと、看護師との個室での対面ができないことから研究が中断した。

- 国際看護科学学会が突然中止になって2日前に連絡がありました。決断が遅かったため発表者として予約していたホテルのキャンセル料も発生しました。また学会に支払った参加費も懇親会費も戻りませんでした。私たちが準備した発表についてオンラインの機会を設ける等、対応されなかったことを残念に思います。看護系の学会には不信感がございます。今後オンライン学会開催予定されておりますが、不信感が大きく、参加を人に勧めることができません。学会側に不手際があった場合費用を支払った参加者がかぶらなければいけないと言うのは辛すぎます。しばらく看護科学学会の研究活動をどうするか悩んでおります。
- 大学に所属しているがコロナの影響により、病院の収益が減り研究費が削減されたため、自費での支払いが増えた。経済的負担を考えながら、研究を進めなくてはならない状況になった。
- 問い合わせの大学機関も閉鎖中で連絡が取れなかった。
- 実施・評価として集合研修を考えていたため倫理審査を受けることが難しく、倫理審査が受けられない状況のため研究が進められる状況ではないと判断し停止している。
- 家庭では自分以外リモートで在宅しているため、自分だけの時間がもてるわけではない。
- 共同研究室での作業は集中できない状況で、学内は Wi-Fi 環境もないため同室者の映像・録音を考えて、あえて日にちをずらし土・日に出勤することもあった。
- Stay Home と言われているが、個室や自家用車で通勤だからという名目で、所属大学の教員は在宅はせず出勤している。Web も自宅ではなく大学で入れることが主となっている。会議は集合しないだけで、学内でメール会議が多かった。
- 教育にかける時間が減っているように見えて、学生・教員間のメール対応は増えており、自分の役割やなすべきことがみえないまま日々送っているような気がした。研究が進められない焦りと言うよりも、もう無理だろうという気持ちになった。
- 国立国会図書館の閉鎖が一番の阻害要因でした。
- 現在も、入場制限があり抽選ですので、とても困っています。
- 大学組織が、研究活動の自粛を命じたことも一因としてあります。
- 対象施設へ出向くための公共交通機関の利用制限。
- この状況下で周囲の職員もかなり神経質になっていることに加え、自分自身の仕事量が急増したため、相談したいことを相談することができなかった。
- コロナ禍に便乗して上役らがますますメンバーのコンセンサスを得ずにして物事を取り決めようとしている。そのために教育業務が膨大になり、研究活動が阻害されている。コロナ禍が組織マネジメントの脆弱性をあわらし、配分される仕事量に偏りが出ている。
- 学会のリアル開催がなくなり、研究者間のコミュニケーション作りなどの有意義な時間が取れなかった点は残念であった。
- オンライン授業や演習コンテンツ作りのための時間増加、度々の時間割変更など教育現場混乱に伴う対応に追われ、研究活動は大幅に阻害されました。
- 発表予定であった学会が次年度に延期となってしまう、発表機会を失ってしまった。
- 大学組織の人員削減策
- 大学の研究費がカットされたこと
- 所属組織(大学)が COVID-19 対策の指針を示すのが遅かったこと、またその方針・具体策に強く疑問を感じるなどかなり心理的に疲弊したことが、もっとも意欲を削いだ。また、法人の経営難に伴い、教材費削減、

研究費使用不可、昇給見送り、夏季賞与ゼロなど、経済面でも直接的、間接的に打撃。

- 遠隔講義のための講義準備に時間を要した
- 学生を対象とした調査で、学生に対面で説明する機会がない。オンライン調査に変更する場合、回収率が下がる可能性がある。
- そもそも大学当局から研究活動の自粛を求められた(5月末ごろまで)
- 所属大学での感染対策委員長であるため、学内の感染対策の構築に時間を費やしている。
- 同じ状況が長く続けば肯定的になる部分も、急激な変化であったために変化への対応・環境調整に労力・時間を要し、研究時間確保の阻害要因となった。
- 研究支援の研修が開催できなかったが、研修室に
- 教育教授方法をオンラインに変更するための準備にかなり時間を要した。また、研究対象者がコロナの影響を受けており、治療がままならず、研究協力依頼ができる状況ではなく、倫理的配慮の難しさを感じた。
- 大学教員ではあるが、元々病院活動も週1日していたため、スタッフの疲弊をフォローしたり、オンライン面会のシステム作り、面会禁止に伴い終末期患者が在宅を希望することが多くなり、そちらの支援に追われた。
- 私生活も子供の休学も重なり、いつも以上に家事と育児に時間を要し、心身ともに疲労し、研究どころではない。
- フィールドへの立ち入りが禁止されて、データ収集や介入ができなくなった。ほとんどの研究が全く止まっている。
- 教育活動が大半になり、研究は期限を守る範囲での活動でした。研究費(科研)などが削減されるのではないかと不安もありました。次年度についてもやや心配です。
- 高齢の教員へ ICT のアシスト時間で個人的な業務時間を割かれた
- 実習が学内実習になるなど、感染管理をしながらの準備にかなり時間を取られた。
- 研究分野が感染看護であるため、調査がすべて停止した。
- 社会情勢にしたがい研究活動に対する意欲が減退した。
- 研究対象者との面接ができないため、対面してのインタビューができません。当初、2月にフォーカスグループインタビューを予定していましたが、数名の研究協力者が得られたところで中止の判断となりました。倫理審査委員会に申請していた研究期間が切れてしまうため、延長申請して承認が下りるところにはリモート授業の準備でそれどころではなく、ようやく自分の準備としては再開できる状況にはなったものの、今年度いっぱいフォーカスグループインタビューの形態は無理ではないかと、再度の変更を予定しています。おそらく来年度に個別のインタビュー、しかも Zoom で行うことも考えております。そのたびごとに倫理委員会に研究計画の変更申請をしなければならず、研究計画書その他の資料をすべて、現状に応じて書き換える必要もあり、そして変更のみでも2か月くらいは承認の有無の返答にかかるため、書類作業ばかりに時間と労力が取られています。
- 在宅ワークになったため、以前は、対面の会議のついでなどに確認できたり、指導をうけたりできた日常的なコミュニケーションがなくなったため、小さいことでも、メールで目上の方にたずねる際には、メール文面の作成に時間をとられた。
- なれるまでの1週間程度はラボ内で運営する slack のアイコンが動くたび、集中力がとぎれた。
- コロナ疎開していた子供が帰京した6月以降、学校に登校することなく、Web授業で1学期終わったため、

日中の食事の準備などの家事が増えた。

- 子供の塾のオンライン授業のためのパソコンのセッティングやオンライン化のための情報の管理など、コロナ前にはなかった負担が増えた。
- 4月から他大学に異動しました。着任早々在宅勤務や時間差出勤が推奨され、学内においても対面の接触は極力避ける方針でした。大学内はオンライン講義の準備で慌ただしく、着任校における倫理審査のかけ方、研究支援課との事務手続きなど、研究活動に関することはとてもとても心苦しくて聞けませんでした。
- コロナの影響を受け、発表予定の学会が6月から11月(オンラインではなく従来のかたち、会場:特定警戒都道府県の大都市)に変更になりました。第2波も危惧されている中、オンライン開催にしてほしいです。仮に11月に現地で学会が開催されて、自分が学会発表に行き、万が一発熱など起こした場合のリスクを考えると取り下げた方が良いのかとても悩んでいます。一人でも感染者が出ると全国的なニュースになるし、大学にも学生の教育にもかなりの影響が出ると思います。
- 遠隔講義や実習の代わりとなる学内演習に費やす時間が増え、研究活動の時間と気持ちの余裕がなくなったのに加え、調査対象者の確保の困難及び、調査に何う交通の困難、場所の入室困難となり研究活動をするのに非常に困難を有している
- 子どもがいるために、在宅ワークで講義を行うよう言われてもできない。(講義を行う場所がなく、別室を借りに行く手間や時間がかかった)
- 育児環境と仕事環境の混在
- コロナ禍から直接というよりも、研究活動が中断されたことから復帰するモチベーションをあげることに困難を感じている。
- 病院での介入研究を予定していたため、すべて研究計画が止まってしまっている。
- 院生の研究についても対面のものはできなくなり、困っている。
- 気疲れが大きく、思っていたほど捗らなかった。
- 共同研究者との打ち合わせについて、上司から打ち合わせ場所等の許可が下りないため、研究活動がすすまない。
- 科研のアルバイトさんが出勤してくれなくなり、自分で行う雑務が増えた。
- 研究対象が転院した。受診間隔が延びて当初の予定で研究が終了しなくなった。
- 長期休園、しかし通常通り(オンライン対応のみ必要)な教育で、日々を生きていくことで精一杯だった
- 地域における障がい者福祉施設は、新型コロナウイルス感染症の発生にナーバスになっているため、新規介入は非常にハードルが高い。また、集合型の調査や介入は現段階では困難で、アンケート調査などに切り替えるか、終息まで待って調査や介入を開始するしかない。
- 今、現場で求められているニーズは感染管理のスキルや助言であり、研究ではない。
- 大学の体制不備(①在宅勤務禁止、②オンライン授業および教務活動中における法人からの一時帰休の指示(の結果、給与6割に削減))
- COVID-19に対する、教員間での感染の認識の違いにより、自粛する生活がオープンではなかった。
- 学生がオンライン講義であったため、尽力をつくして頂いた方がいる一方で、うわさや、不安、不満などがCOVIDの固有のものか、元の潜在的な課題が浮き彫りになったのか、職場の人間関係の悪化。
- 研究フィールドである保育園での活動自体ができない
- 感染予防対策での消毒作業や、子どものケアに時間を要するために、日々、2時間程度の残業となり、帰

宅後の研究に費やす時間が取れなくなっている。研究対象者へのインタビューも実施することが、難しい状況である。

- 研究に参加させていただきたいと申し出て、お返事待ちのところでもコロナ禍となり機会を失った。
- 研究対象を病院として研究計画書を作成していたが、2020年3月にいざ実施しようとしたときに、COVID-19の影響で、正直研究どころではないと感じ、アプローチすることすらはばかれた。7月になり、少し解除かと思いきやまた感染者の人数は拡大傾向にあり、なかなか協力依頼すら出しにくい状況である。依頼を出して、断られた中で進めるほかないのかとは思っています。
- 倫理委員会の新規受付の一時停止により、新規の研究活動の阻害。
- 強いて言えば、介入研究を実施しているため、今期のデータは研究期間や介入内容が比較対象から外れるため使えなくなった。それはそれで新たなアイデアが生まれたので良いと思っている。
- 研究場所が特別養護老人ホームであること、前向き研究であることが、研究活動が阻害されているおおきな要因である。
- 長期間の在宅ワークによる昼夜逆転などの自分自身のメンタルヘルス不調の影響
- 学外での実習ができないため、学内実習に振替えとなったことによる、教育にかける時間の増加
- 遠隔講義の準備をしていたが、対面授業が開始となったことによる、講義資料の作り直し(特に、教員1年目だったため、基盤となる資料がなく、講義準備に割く時間が大幅に増えていると感じた)
- 大学として、コロナ患者の宿泊支援に行くことになり、プラスαの業務があった
- 介入・実験研究が一切実施できなくなった
- 本校において科研費は、大学に確実に入金されないで使用できない。今年度、コロナ禍のため入金が遅れているため、科研費が活用できない。研究に必要な物品の購入もままならず、研究活動が妨げられている。
- 今年行おうと思った研究計画が、計画通りにいかないこと、また今後の見通しが持てないことへの意欲の低下。モチベーションの低下。自分自身の問題もあるということです。
- ICT教育への移行及び推進、サポートに関する旗振りではほとんどの時間を費やした。
- 病院内で実施する研究(研究者が直接調査を行う、研究者以外の調査者が入ること)が禁じられ、調査が実施できない。
- 研究者間で直接操作を確認する予定であったが、他県で遠方であり、行き来が制限されている。
- COVID-19に関連した情報収集とそれに伴う対応の検討の会合等に時間が多く必要になったこと
- 感染患者(入居者・利用者)はいなかったため直接ケアの負担はなかったが、コロナについての情報収集、マニュアル等資料作成、職員教育、入居者・利用者・家族への説明(クレーム対応含む)の負担が大きく、心身ともに疲労困憊したこと。
- 所属組織の医療収入の大幅な減少により、学校の経営状態が悪化し、その影響を受けている。
- 学内でこれまで活用できた研究費、教材費が使用できなくなり、学会費の支払い、研究活動に使用する書籍の購入、PCの購入、データ分析料等すべてが滞っている。また給与や賞与の減額により、退職者が増え、さらに経営状態の悪化から人員削減が予定されており、大学運営にかかる予算執行が滞り、学内業務が膨大となり、研究活動に費やす時間がなくなっている。
- 在宅勤務が認められず、休業要請を受け、生活そのものが経済的に大きな影響を受けており、このまま在職するべきか日々悩み、精神的不調を引き起こす不安を感じている。

- コロナの影響で研究活動が滞ったり日常生活の支障について指導教授が理解しない。
- 職場上司がコロナ対応に専念することを求める。
- 心理的閉塞感や身体活動量低下等による体調管理の難しさ
- 講義、演習、実習、行事などすべてにおいて方法が変更となり、それらの準備のために時間を常にとられ、休みもとれないという物理的な問題は、精神的にもストレスが大きく、意欲の低下につながっていると感じています。
- 組織としてどう動けばよいかの方針が決まるのが遅くなったり、変更が続くことで、研究を進めるスケジュール管理が難しかった。
- 対象が小学校や病院であったため、対象施設への出入りの制限や休校による影響が大きくありました。
- COVID-19 の影響により生じた、職場内の人間関係によるストレスの増加
- 倫理審査が混乱のため停滞し、研究が進まないこと。
- 科学研究の結果が遅いこと。(萌芽の発表がまだ)
- 倫理審査委員会が、コロナの恐怖で過剰な反応をしていること
- COVID-19 の影響による抑うつ的な心理状態
- 家族も在宅勤務、在宅学習のため、在宅勤務中に研究活動を行う部屋の確保ができない。
- 職場への教員および学生、学外共同研究者や業者等の立ち入り制限により、オンライン対応できない案件については、自費にて貸し会議室等を調達し教育研究活動を継続しなければならず、その点も困難さを感じた要因と思われます。
- web 授業への急遽変更、WEB 上での学生の指導、毎日 140 名の学生の健康状態の把握、ICTトラブル対応や支援の急増、新入生への郵送準備(入学前、入学式に配布する予定であったもの)、時間割の月単位の変更、非常勤講師への依頼、実習施設の依頼と確保、実習要項の変更 など 教育方法の急な変更による対応に追われ、まったく研究にそそぐ時間がなくなってしまい、滞っている。
- 4 月は、連日 20 時間以上の勤務で蕁麻疹が出現し、点滴をしながら業務をしていた。
- オンラインでの授業となり、準備、実施、その後と全てに時間を要するため
- 病院でのデータ収集が不可能となった。
- 研究活動よりも教育活動がこのような形で行われることに満足している教員に疑問を感じる
- 3 月に調査を予定していたが、1 週間前に、感染拡大予防のため、調査を自粛し、まだ、調査ができていない。本来なら、調査を終了し、データ分析をする時期であった。いつ、調査を実施できるのかの見通しが立たず、研究がストップしている。
- 教務委員長を担っていて、学科の運営に時間が取られてしまっている。
- 共同研究者とのソーシャルディスタンスの維持が困難であった
- 研究フィールドが海外であり渡航できない、対象国も外出禁止令で家から外出ができない、研究協力者も大学閉鎖等で教育業務が忙しく研究の時間が取れない、など COVID-19 の影響をものに受けている。今後の研究活動の見通しが立たない
- 研究協力者が保健師だったので、全く時間的にご多忙であり、調査ができない状態である。
- 研究に関して一定期間閉鎖措置のため、実験施設が使用できなかった。
- 通常業務外の業務が生じる中で慢性疲労感と、自身の後期への準備ができないことへの不安・ストレスが高いこと。

- 海外大学との共同研究において、かなり早期から訪問ができなくなった。
- 管理職としての以下の要因によって、多大な時間を要し執筆活動に影響した。
- COVID19 の感染拡大を情報収集し、国や県の方針を考慮し、教育上の授業形態の変更、臨地実習の変更などの方針決定、状況に応じた修正の判断。
- COVID19 の影響により、組織内の感染予防対策の決定と実施などの方針決定と実施状況のモニタリング
- COVID19 の影響により、学生に対して自律的な感染予防行動がとれるようにする指導の徹底等、方針決定と状況に応じた修正の判断。
- COVID19 の影響により、感染予防対策に関する啓発活動の方針決定と実施継続。
- 所属機関の新型コロナウイルスに係る医療支援に1週間参加した。緊張感の強い中での業務だったため、終了後も身体的にも精神的にも疲労感が強く、研究活動を進められなかった。
- 臨地実習を取りまとめる委員会の委員長であるため、各方面との調整や学生、教員への説明などにかなりの時間や労力を費やした。
- メールでの連絡にかかる時間
- 所属機関での経費削減、予算見直しへの対応(学生への緊急奨学金などのため)
- 新年度の人事対応
- 旅行やスポーツなど趣味ができない事で、ストレスマネジメントやメリハリがなく、研究活動がはかどらないことがあった。
- 教育に入ると思いますが、実習の予定が立たない、そのために他の予定が入れられなかったり、入るなら感染予防のために移動制限があることなど、間接的な要因も多く存在すると思います。
- 今年度後期から実施しようと計画していた研究活動の遅延が予測されるので、多少の不安がある
- 1月～3月に質問紙票調査を実施したが、回答率が低かった。
- 病院への調査では、数%も行かない回答もあった。この調査で、発表が出来るのか、出来ないと思う。また、直接的な影響ではないが、1～3月はイベント等が中止となり比較的時間があつたが、大学本部で4月以降の授業・実習・演習等への方針が決まるまでに時間がかかりすぎであった。
- あの空いた時間に準備もなにもできない時期があつた。
- 大学本部が医学系ではないため、看護の講義実態にそぐわない決定の中で困難の中で方法を模索することに時間がかかり、研究どころではなかった。
- 学内での実習の実施におけるマニュアル作成等、通常では必要のない文書作成に多く時間がかかった。また、領域を超えて調整が必要なことも多く、会議・メール会議等にも時間がかかった。
- 教科書の発注忘れなど、コロナ禍とは関係があつたりなかったりだが、事務職員の不手際が多くあつた。緊急の対応に不慣れな様子であつた。
- このような状況で多くの方が研究どころではない状況であつた。その雰囲気の研究を行うことへの後ろめたさになり、一人で出来る範囲での研究しか手をつけられなかった。
- 大学がコロナ対応に追われ、倫理審査委員会の開催が遅れた。
- 上記に項目がありますが、授業も実習も遠隔型になり、授業内容の再検討や演習等の進め方等、あらゆることを0から作っていかなくてはならず、非常に業務過多になっています。また、オープンキャンパスやその他の入試業務に関しても資格検定をどのように扱うか、大学院では民間試験の導入を決めていましたが、それらの開催が中止となったために、どうするか、新たに学内で試験問題を作成するか等、あらゆることを

検討しなおし、それに伴う要項や運営方法を作り直すために、本当に休日、深夜を問わず業務に追われています。そのような中で、研究活動もなんとかできることをやりたいと思い、関係者との調整や倫理審査申請書の作成等に取り組みますが、過重労働がきつく、さらに遠隔授業等のため、VDT 症候群の影響か、睡眠の質も阻害されています。メンタルヘルスに支障をきたしているのではないかとと思うくらいこの 1 か月間は感情の起伏が激しく、本当に辛いです。しかし、一方で、教員評価は、例年と同様の内容と評価基準で提出を求められており、このような状況にあっても研究で成果を挙げられない者は低い評価となる様子で、この仕事にもう限界を感じています。自身の健康のためにも辞めたいと考えるようになっていきます。

- 講義素材の見直しと、リモート講義のソフトプログラムの修得・学習
- 指導教官との連携不十分
- 世界的ネット使用の急増に伴う影響があり。接続状態が悪い、ストリームなどのソフトなどが、正常に機能しなくなった。
- 遠隔講義の環境整備が遅れていたこと
- 所属機関の収入減によるもろもろの方針変更等による心理的影響
- 臨床での調査ができないことが大きいです。
- 学生と一緒に行動を制限されていること
- 研究先の確保がより一層困難になった
- 倫理委員会の回答に時間がかかり、研究活動が停滞している。
- 4 月からの転職
- 他大学に置いてある図書を借りられずとても困った。また、他大学の図書館を利用できないことも困った。
- 研究協力者が中高年の方々としていたので、コロナ禍では対象者へのアプローチから中断した。おのずと研究計画の修正をしなければならないが、それを考えただけで気持ちが萎えてしまい、研究に心が向かなかった。それに加えて、日々対応が変化する職場での業務に割く時間が莫大になり、全ての研究活動を中断せざるを得なかった。
- 3 月に投稿し査読の修正も 4 月以降まったくできず、時間の確保が難しい。
- 心が落ち着かない状態が 3 か月続いている。
- 研究会はリモートで行うことができたが、やはり、意志疎通しにくい部分もある。
- コロナ禍により、感染対策の検討、授業スケジュール・内容・方法の検討、実習室での技術練習の調整を担当する係などが、教員の一部に偏り、業務負担のバランスがかなり悪い。また、講義だけの科目を担当しているなど、上記の業務がさほどない教員との負担に関する温度差はかなりあり、日々変わるコロナ対策を反映した授業計画を 4 週間前のミーティングで提案するなど不可能であるが、上司はそれを要求するので、対応できないことを強く要求され、心身ともに疲弊しています。
- web 開催となった学会も、参加する時間が取れないほど、教育・組織運営活動のみで日々過ぎていきます。
- 技術演習や技術修得に関連した科目を担当しているため、研究活動など、2 月から全く行えていません。働いても働いても研究活動にはたどりつけません。
- 遠隔による講義や実習への変更に伴い、準備に多くの時間が必要であった。とにかく通常業務が増え、それだけでも通常勤務時間内に終わらず、研究の時間を作ることができなかった。先々の予定も見えず、研究は止まるのみで、計画を修正していくこともできなかった。
- 介入研究の対象者が学生である。しかし、学生の大学の出入りが禁止されているため、学生を教室に集め

られないため研究が滞っている。

- 高齢者へ予定していたインタビュー調査が全て中止となった。
- オンラインでの研究に関する議論ができない。ソフトウェアやアプリは使うことができるが、対面と比べて白熱した議論にならず、後から何を話していたのか考え直さねばならないことが多い。
- 研究フィールドが臨床なので、現在は患者対象に実施できない。
- 職場内の事務作業の煩雑さ
- 臨床が忙しい
- 日々の状況変化に対応しながら、他部署との調整に一日が終わる日が続いた。また、それらの情報を教員及び学生への周知に、労力を要した。
- データ収集を実施している病院でコロナ患者の受け入れを始めたので、病院・勤務先の双方から研究活動を中断するように指示があった。
- 研究協力者の参加がなかなか得られない
- 教育に通常以上の時間と労力がかかっている。また、学校だけでなく学生個々の環境に配慮するため、せつかくのシステムが使えず、手作業や確認作業が増えた。集団指導ができないため、個々の指導対応が多く、業務時間は全体的に増えた。自粛中は通勤にかかる時間がないので効果的に感じていたが、外出自粛が解除された以降は、通勤は通常通りなのに学生はリモートであり、リモートの旨味を全く感じなくなった(学内でリモート授業、会議が行われる)。
- 自身の体調不良
- 大学学長兼理事から他県への移動を禁止する発言があり、自粛した。
- 所属機関を異動したタイミングということもあり、研究費の移行手続きが遅れ、全体的なタイミングが遅れた。
- 大学院生をしながら臨床で働いていましたが、臨床で働くリスクは高く、仕事を退職しました。学費の確保が難しいです
- WEBによる授業用の授業資料作成(録音や解説の作成等)に膨大な時間と労力が費やされてしまった。
- 臨床現場にいたので、院内の感染対策や患者対応の体制づくりに追われていた。
- 教職員間のストレスが増大しているせいか、口論が増えた。上司として人間関係の調整を図るための時間が増え、疲労している。研究活動に向かう時間や意欲が減退してしまう。
- 研究活動を続けるためには研究費用の自己負担が必須であるが、コロナ禍による大学病院の経営悪化のため教員の昇給が中止、ボーナスが減額された。研究費の支給の遅れやさらなる減額も予想され、このままでは研究活動に取り組めない。
- 臨床現場の仕事が精いっぱい、研究方法の変更などを検討する時間や話し合いが持てない。
- 在宅勤務が続くことによる仕事とプライベートの切り替えや体調管理の難しさ、出勤の可否を検討するための情報収集やそれに伴うストレス
- コロナ禍で、大学内の運営において、活用されるのかわからない実態調査が増えており、書類の提出に追われている状況がある。書類も活用されないことも多く、上層部の保身のための書類作成にも思え、不毛感が続いている。
- 出張なども減り、教員同士の衝突が増えている気がしている。そのメンタルフォローや仲裁に入らなければならない、かなりの時間を要している。

- とにかく他の業務(リモート授業の為の授業の組み立ての変更、資料の作成、対面授業となってからの演習時の感染予防方法の検討等)に追われていて、研究計画を立案するための作業がなかなかできない。
- 海外出張ができないことが痛手である。
- 大学では在宅勤務をするように指示していたが、教授は大学に来ることを認めていたため、大学院生も来ていた(バイオ系など、実験や飼育があるわけではない)。そのような研究室では在宅勤務はしにくい状況であり、私も毎日出勤していた。私の研究室は個室ではないため、院生が複数人いる中でオンラインの講義は難しく、課題学習をしてもらうための講義資料を充実させるため多くの時間を費やした。
- 研究対象者が一般住民であるため、外出自粛や交流の制限があるとそもそも調査ができない。
- 対象者へのインタビューや質問紙調査など対象者に会うことが禁止されたため、研究計画書なども変更せざるをえなかった
- 対象施設への入館ができないことにより、研究活動が停滞していること
- 集合研修などがなくなり、そこで行おうとしていたアンケートができずすべての予定が狂ってしまった。結局看護研究は、人が対象のため、システマティックレビューや概念分析以外はすべて人を介すので今後も研究活動はかなり難しい。学位が取れずキャリア設計も崩れ正直、自分のモチベーションも下がり研究職をあきらめて、臨床に就こうと考えている。
- 感染状況や大学の時間割を含む各スケジュールが随時変更され、スケジュール調整に追われた。
- 対面式のアンケート調査ができない。新型コロナの発生した地域から、調査依頼をする場合は電話のほうが良いのかなと思ひ、名刺交換等もやりにくいと感じる。今までの常識が通用しないと感じている。
- 博士課程に在籍し、研究活動に期限があるが、対象への研究協力の依頼がしにくくて、とても困っており焦りもある。博士課程を予定通り修了できないと学費もかかるため、非常に厳しく感じている。
- 非常事態宣言時の研究活動の考え方として、レベル 2(研究活動の制限)の方針が出され、しばらく人を対象とする研究に着手できなかった。
- オンデマンドのためにかかる学科内調整に時間を要した。
- 教員間の意思疎通の不備(暇な教員による他人を噂話)
- 研究計画変更困難の為のデータ収集の中断: 博士課程に所属し、研究課題に取り組んでいる。対照群を設定した準実験研究であり、対象者は小学生のこどもとその保護者である。対面式のデータ収集と介入を必要としており、データ収集及び介入は予定の半分で中断している。コロナウイルス感染症発症により小学生への依頼そのものが停止している。データ収集困難が続いている。この時点で研究計画を変更する方法が選択できず、研究遂行が困難である。学位取得の遅れについて、相当の負担感がある。
- 健康管理と研究遂行バランスの崩れ: 機縁法により研究参加者を募集しているが、研究依頼を気にしてくださる機縁者へ、必要以上に気を遣わせる負担感がある。これまで以上に感染予防行動を優先する日常となり、研究遂行に無理が利かなくなった。
- フィールドである病院・施設の多くが面会禁止のため、外部者である研究者は出入りできなかった。上記の理由のため、病院・施設へ研究協力を依頼するフィールドが多くなり、問い合わせの回数が増え、時間を取られた。
- 講習会が開催できない
- 緊急事態宣言解除後の政府の方針がないことで、大学の方針が決まらず、研究活動にも影響した。
- 感染対策を徹底することで、研究協力施設(病院への訪問、外来患者へのインタビュー)の許可が得られ、

インタビューを実施していたにも関わらず、途中で大学の方針が変わり、研究活動を施設でする場合、申請しなければいけなくなった。申請をしても、大学側の理解や許可がなかなか得られず、許可が下りたとしても周囲の教員に研究協力施設へ出向くことを良く思われない部分もあり、研究活動に影響し研究を中断しなければならなかった。

- 面会制限があり家族対象の研究が進まない
- 感染予防のため、介入の研究計画の修正が必要となった。
- 緊急事態宣言がされたり、解除されたり、勤務体系が変わったり、予定していた講演会、図書館が機能しなかったり、などなど、
- 予定がころころ変わることの疲労と、それへの対応などで、気分が乗らない(うつ的?)
- コロナで疲れて研究意欲がかなり低下した。滞っている論文執筆に手につかない。
- 図書館の利用時間制限
- 大学院の指導教員が学部学生の対応(オンライン授業、オンライン実習等)に追われたため、大学院生が指導を受ける時間が短くなった。
- 調査先に出向けないこと。
- 調査先の医療機関へ外部の者が入れないこと。
- web 会議システムを活用しているものの、初めて指導を受けることになった大学院の指導教員とのディスコミュニケーション
- 大学などの組織内で、新たな事務手続きの発生、書類の集計、申請に時間をとられることが小さなストレスの積み重ねになった。
- 今年度着任で、新しい機関の設備等の運用が、職員の勤務自粛で窓口閉鎖により、機関の規則が十分理解できず動きにくい
- 総合大学の為、文系の学部は web で授業を行うのが当然という風潮があり、演習や実習が必須となる看護の授業をなかなか理解していただかず、その調整に多大な労力と心理的ストレスがある。管理職のため、コロナ禍ではなくても常に何かあるので、研究活動時間自体には大きな差は生じていない。
- 研究対象者、共同研究者が行政機関の関係者のため、COVID-19 対応の期間中アクセスをまったくしなかった。
- 自身が大学院に在籍しているが、新年度に入って一度も通学が許されていないので、他者の発表や意見などを聴く機会がないため、研究的視野が狭くなっている可能性があり、研究の質の低下が懸念される。
- 現状のテーマが今のトピックスとして受け入れられるのか。気が引ける。
- 外出自粛・県外移動自粛の影響: 医療機関に協力をアンケート配布に関して依頼予定であったが、緊急事態宣言の期間は患者も電話受診となり、その後も病院の繁忙度を考えると協力を依頼しにくかったため取りやめた。
- 情報システム利用スキルの問題: 患者会への研究依頼をしていたが、感染予防の観点から対面では会えず、電話での打ち合わせも齟齬が生じるなどコミュニケーションが難しかった。zoom(オンライン会議システム)の使用を提案したが、「わからない」と言われてしまい新たなコミュニケーションの方法は取り入れてもらえなかった。大学教員との打ち合わせであっても、相手側がオンライン会議システムをいまだに使用できないため、なかなか進まない。
- 教育に費やす時間: オンライン実習への切り替えのため、打ち合わせ・準備に膨大な時間を要した。実習開

始後も、通常より学生のフォローが必要であり、実習記録の確認も実習時間外に行う必要性が出てきてしまい、時間外の労働が多すぎて、研究にはなかなか取り組めなかった。

- 授業運営方法変更のための会議：大学内の実習中止に伴う対応や、感染症対策のオンライン会議に長時間費やすことになった。
- コロナ対応で、現状が戦争のような施設(病院)への研究依頼をためらう気持ち
- 新人看護師を対象に研究をしたいが、例年通りの配置や教育体制が整っていないのではないかという疑問があり、調査をすべきか考えている
- オンライン用の講義資料の作成にかなりの時間を割かなければならなかった。
- 完全オンライン→半数の学生の登校を許可(つまりオンラインと対面のハイブリット)→全生徒登校と、大学側の対応が変化し、そのたびに講義計画を組み直し、演習を再構成し、課題を変え、評価方法を変更するなど、何度も教育の関する業務で大半の時間を割かなければならなかった。
- 研究では、面接は不可能になり、研究方法の変更を余儀なくされ、倫理審査再度申請しなければならなくなったが、結局、再度の流行で研究はストップしたままである。大学院の研究もできず休学を選択した。
- 大学付属病院の収入が激減し大学全体の財政状況が悪化し、教職員も一時帰休となり給与が減少している上に、教育研究費がまったく支給されていない。
- 社会人の大学院生のうち、現場でコロナ対応を担う部署におり、1名は退学、1名は休学を余儀なくされた。2名とも調査の実施が困難になっただけでなく、今後の見通しも立っていない。
- 私はまだ研究駆け出しで、質的研究をメインに行っており、対象者も高齢の方が多く断られることが増えた。リモートでインタビューを行うことも考えたが、デジタルネットワークに弱い方や環境が整っていない方も多くおられ、なかなか思うように研究協力が得られない。
- 繰り返しになりますが、研究計画を変更したいが、コロナ禍にともなう行動制限が、期間や地域など範囲が予測できないため、修正案も考えあぐねている。
- アルバイト収入の減少に伴う経済的困難
- ネットワーク環境の整備の必要性
- 在宅勤務となり、他の教員とのコミュニケーションが減ったことで、自分自身のモチベーションが低下した。
- 医療者を対象にした調査研究であるので、調査依頼を躊躇し、調査依頼の時期を延期した。
- 学内の会議時間の増加、ICT 整備にかかる時間の増加。
- 着任 2 年目で初の科目責任者となり授業準備に時間がかかったうえに、対面と遠隔両方の準備をするようにという大学側の要望があり、授業準備が大変だった。対面で予定していたものを遠隔に作り替え、さらに通信状況などの制約を後から聞かされ、それに合わせた授業形態へと変更するなど、とにかく遠隔授業に莫大な時間を費やした。
- 個人努力に任される部分が多いこと、いろいろな ICT の方法を覚えると他の教員から「私のもやって」と依頼されることもあり、頑張れば頑張っただけ時間がなくなる感覚だった。
- 学内演習や感染予防策の策定、演習や感染予防に必要な医療資材を手配する業者とのやりとり、見積もりの作成、それ以外に例年行われている備品チェックなどの雑務、外部講師の日程調整など煩雑を極めた。
- 研究の時間が「減った」ではなく「なかった」と回答したいくらいでした。
- ベッドサイドでの患者への介入ができなくなった、研究協力施設である病院への出入りができなくなった、ま

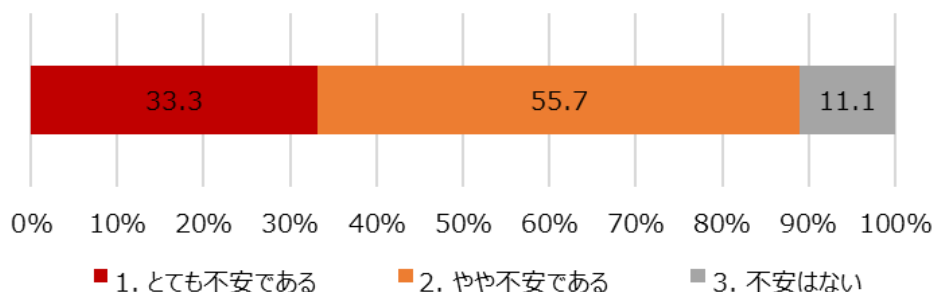
たは病院の出入り制限があった、等により、研究データ収集・分析は中断、延期となった。研究協力者との調整や支援を得ることも困難となった。

- これまでとは異なる授業形態(オンライン)となり、準備に時間を要した。また、臨床現場との接点が閉ざされ、研究の機会を確保できなかった。
- 特に教育に対する準備や調整に伴う自身の精神的ストレスが大きく、研究活動への時間だけではなく意欲まで損なわれている。
- 自身の健康管理を優先した結果、研究・教育活動の時間が短くなってしまった。葛藤があるが、健康管理を優先している。
- 学会参加による交流や情報収集の阻害、オンライン授業など新たなシステム導入、教材開発に要する時間の確保。
- 今後の見通しがわからないことで、フィールドでの研究が遂行できるかわからないことによる不安と焦りの気持ち
- 自粛期間、一時期は先の見えない不安から研究意欲が全く湧かず何も手がつかなかった。不安要因は、勤務先の収益減少による自身の収入減少に拍車がかかり、研究継続にかかる費用を捻出することや、調査フィールドに出入りすることや協力を依頼することの困難、自身の体調や生活そのものが脅かされることへの恐れが主でした。
- コロナ禍における大学教育運営、危機管理に関する介護が多く実習・演習・授業の調整に時間が多く取られた。
- 授業準備や学内実習の準備に追われ、研究の時間の確保が困難な状況が続いている
- コロナ関連の業務に追われ、研究に関する相談や他の研究者との討論が阻害され、新しい研究を立案することが難しい。また、研究を立案しても出張や対面でのデータ収集が難しいため、現状で活用できる研究方法が限定され、自由な発想で研究を立案することが難しい。
- 公衆衛生看護領域が専門のため、研究協力施設の保健師がコロナ対策に追われ、研究協力どころではなかった。
- この状況下が終息するまでは、協力施設の関係者と協議・企画・立案などの協力を要請することも対象(住民)を集めて調査することも困難である。
- 4月～5月にかけては、大学閉鎖となり、学生対応も電話やメールなどさほど負担になりませんでしたので、先行研究や文献など調査の時間がもてました。
- リモート教育になったので前期の科目持ち分を4月下旬から6月までに6科目こなしていた。1日に1科目の授業資料を配信しなければならず、それも2回分の作成を求められていた。この4か月間土・日曜日も授業準備と評価で追われており、研究に関してはほぼ手を出すことができなかった。科学学会の発表投稿も考えていたが、功を奏したのか学会中止になったので来年度、トライしたいと考えている。
- 学生に対する教育の方法を日替わりで変更することや、学生の体調や学修管理に時間を要したことにより、研究時間が確保されない。
- 学校の休校とそれに伴う放課後事業の縮小、保育園の登園自粛要請に伴い、3月から約4か月間、子どもたちと生活をともにしながら仕事、研究をしていました。子どもたちがいるときに、深くのめり込むような(たとえば分析など)をやってしまうと、子どもたちの呼びかけにすぐ答えられない、などの問題が生じます。そこで、子どもたちが寝ているときにそうした作業をやっていました。

- 在宅勤務者の分の仕事が回ってきて、仕事量が増加した。
- 看護職を対象とする研究の場合、危機対応による病棟再編などにより、縦断的研究はできなくなった。
- 病院看護職対象にコロナ対応における研究調査が集中して依頼があり、同じような目的や内容の研究が重複して行われていることに、現場の負担を伝えられた。
- 職場から外部での活動を制限された
- 漠然とした無気力感、COVID19 に対する組織の対応に振り回され、研究活動に集中した時間を非常に確保しにくい。
- 私は病院で病棟師長の職にあり、様々なコロナ対応があり、研究活動に対する意識・意欲が低下してしまいます。
- 自分自身のメンタルと体調の管理に多くのエネルギーを要している。
- これまでも教育活動に時間を割かれていたが、全く研究活動に充てられる時間が無くなっている。また、病院に入れなため、データ収集も再開の見通しが全く立たない。
- 調査に出かけられない(インタビュー対象者に会えない、リクルートを進められない)、フィールドワークに出られないこと以外にはほとんどない。むしろこの状況はチャンスだとすら考えている。(大学教員として勤務しながら博士課程在籍中で、科研等は学位論文に向けた研究でもあるため)
- 対面での介入研究ができない

問 2-Q7

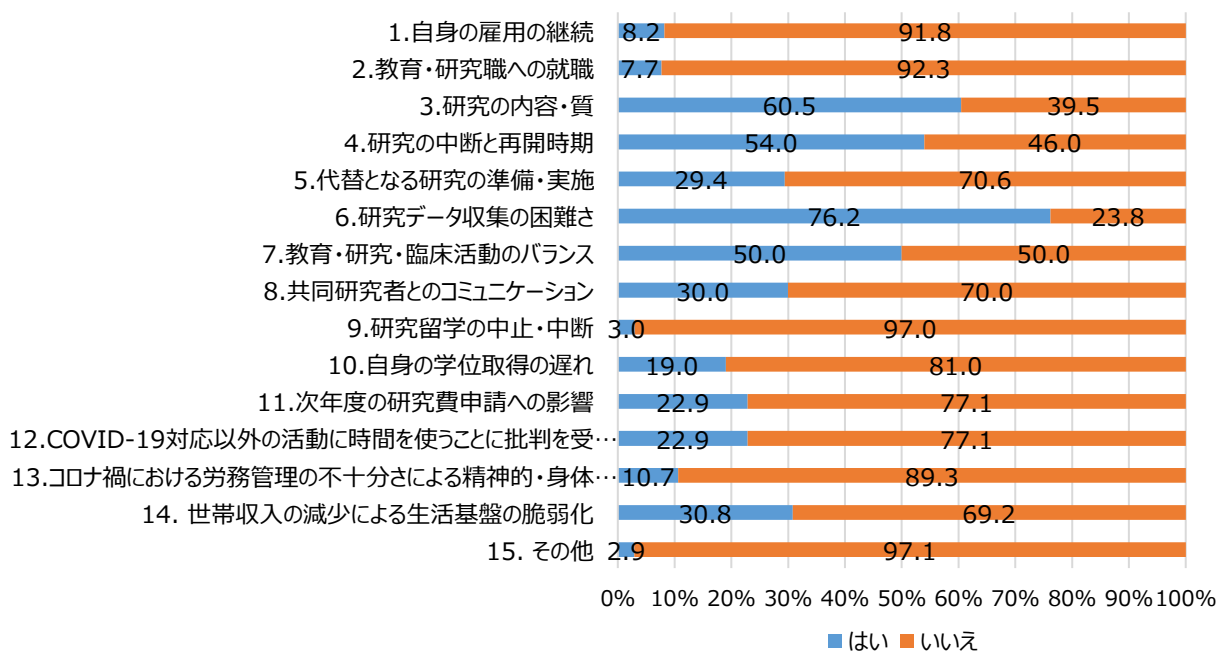
Q7. コロナ禍において、あなた自身の研究活動について不安がありますか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。(n=1,519)



≫ 「1. とても不安である」「2. やや不安である」お答えした人にお尋ねします。具体的にどのような不安がありますか。(複数選択可)

1. 自身の雇用の継続
2. 教育・研究職への就職
3. 研究の内容・質
4. 研究の中断と再開時期
5. 代替となる研究の準備・実施
6. 研究データ収集の困難さ
7. 教育・研究・臨床活動のバランス
8. 共同研究者とのコミュニケーション

9. 研究留学の中止・中断
10. 自身の学位取得の遅れ
11. 次年度の研究費申請への影響
12. COVID-19 対応以外の活動に時間を使うことに批判を受ける可能性
13. コロナ禍における労務管理の不十分さによる精神的・身体的疲弊
14. 世帯収入の減少による生活基盤の脆弱化
15. その他



≫ 「15. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

- 施設内研究相談室の利用中断
- 計画している研究が、コロナ禍において先の見通しが立たないことで、倫理審査に出すタイミングが伸びている。
- 県をまたいで移動が困難となり、対面での情報共有の機会が少なくなり不安である。研究者間でのコミュニケーション不足を感じる。地方のため専門書を取り扱う書店や図書館も少なく、不自由さを感じている。
- 学会参加及び対面での学修の機会の減少については、新たな知見の習得には不安である。
- 投稿論文の出版までにかかる時間の延長
- 臨床医の夫自身が喘息の持病があり抗癌剤を飲みながら COVID-19 の患者を診療しており、子供が感染症の専門医として COVID-19 の患者を診療している。両者とも感染や死亡のリスクが高いので万が一感染して自宅療養になったら自分の研究どころではなく不安がある。2 人とも疲労困憊しているため、家事の分担など依頼できないので自分が行っており、免疫を高めるためにバランスの良い食事作りに時間をかけている。
- 研究費で雇用している、事務職員、研究員の労務管理

- 研究室の感染予防対策
- 大学閉鎖中には、アルバイトなど外部から人を頼めない
- 研究調査に伴う地理的移動や他者との接触が、組織の方針違反として批判を受けるリスク
- 今後のコロナの影響で実施途中で中断の可能性があるなど読めないこと
- 参加予定学会が中止や延期などで戦略的な学会発表ができなくなった。
- 各教員間で教育活動量にもともと差があり、今回の状況でますますその差が広がり研究活動にかける時間がほぼ持てなくなった。
- 現場(病院や地域)では、これまでのような研究協力依頼がしにくい状態である。それは、患者や家族だけでなく、医療従事者への配慮も真摯に受け止め研究活動をしなければ、逆に患者や家族、スタッフを傷つけることになりかねない。
- 国際学会の延期や中止に伴う成果発表の場や機会の減少
- 学会発表の減少、発表形態の変化に伴う人間関係の停滞・減少
- 科研費最終年だったため、研究成果を国際学会で発表予定だったが中止となった。これらの業績の確保ができなかったこと。
- 研究活動のための時間や環境の確保
- 緊急事態宣言中、大学からも在宅ワークを認める措置がとられましたが、実質的には大学で仕事をするをよとする雰囲気職場内にあり、多くの教員は結局は出勤し、在宅ワークをしている教員をよく思わない同僚もいました。また、学内会議はリモートで開催されるのですが、議長は大学内の会議室からの発信となり、そのための ICT 機器のセッティングに下の教員が出勤するという事態もありました。結局、このようなことに日々煩わされ、研究のことを考える余裕はなかったとも言えます。また、高校での ICT 教育が進んでいると聞いていたのに、蓋を開ければ新入生のほとんどは自分の PC も iPad も持っておらず、WiFi 環境も脆弱で、このような学生をどうフォローするのかで、今も教員は奔走しています。アフターコロナの看護教育を構築するためには、教員も学生も ICT を日常的に利用する環境が整えられることが必要かと思います。コロナそのものの研究は自分の専門では無理ですが、ICT をどう看護教育において現状以上に利活用するのか、環境整備も含めた研究はぜひ取り組みたいです。
- 研究費を助成期間内に使用し、研究を終えられるかどうかの不安(科研費ではないため)
- 大学からの研究費が支給されないまま過ぎており、学会年会費も経理に回されないままとなっており、学術集会での発表のために、年会費の研究費での支払い状況が心配である。所属学会を見直す必要が出ている。
- 大学病院の経営難の影響ですべての職員にボーナス支給もなく、病院の看護師の離職が加速しているため、教員が臨床に看護師として勤務する可能性が検討されている。教育の質担保に精一杯である現在、研究活動は、時間的にも研究費の面でも厳しい状況にある。
- 昨年度までの研究を発表するなど、過去の研究活動の成果をまとめる作業は可能であるが、新規の活動は、経費の上でも、時間の上でも、組織間の連携調整や移動の制限など、多くの問題が山積している。
- 突然今までやっていない仕事(コロナによる計画修正など)を依頼されたりするため、見通しが立たない。

- 何が起こるか分からないため、落ち着かず、研究に集中できない。
- 研究補助者の募集
- 海外出張等の中止、再開の目途が立ちにくい
- 教育・研究職への就職ではないが、学位取得見込みとの採用内定を受けている。感染症の流行により、研究が思うように進められず年度内取得は厳しく、内定先との調整が必要かもしれない。
- 自分というより大学院生の研究が進まないことです。大学院生の研究はすべて自分との共同研究でもあるので。
- 特にありません。
- 研究の内容が COVID-19 に影響されるため、今後どのように研究を進めていくか、いつまで様子見をするか、悩んでいる。
- 図書館などの休館などによる査読に通す準備の遅延。
- 予定していた国際会議が長期延期になった。
- コロナ対応に集中するとともに疲弊し、研究活動に対する時間確保の困難さ、および、意欲の低下が生じる可能性
- もし、自分が感染したら、研究室や研究者へ迷惑をかけるという不安
- COVID-19 の第二波により、また保育園等の子供の預け先が無くなった場合による研究への影響が心配です。
- 私が住んでいる自治体では、同居家族全員がインフラ等の職でない場合は保育園に登園ができなくなりました。自宅で保育しながらの仕事は睡眠時間を削るしかなく、精神的ストレスが大きかったです。はじめの 1 か月は、在宅勤務になった夫と夫婦で勤務時間をずらして調整しました。しかし、勤務時間が固定されがちな夫と融通が利く大学教員の自分とでは、私が夜間や早朝に働き日中に保育と家事を行うなどのように、自分に負担が多くなってしまいました。さらに、大学事務と研究活動では、研究活動が後回しになりがちで研究時間はほとんどとることができませんでした。
- はじめの 1 か月はなんとか過ごせましたが、残りの 1 か月はもう二度と経験したくないと思うほど辛いことでした。
- 研究予算が計画通りに執行できるか
- オープンキャンパスや国際交流などの大学運営業務については、可能な限り縮小、できる範囲のことに限定していただき、在学している学生の教育の保証と研究活動の保証にエフォートを残していただきたいのですが、研究を進めたいので、大学運営業務は縮小して欲しいなどと申し出ることはできません。
- 新設校であり、トップダウン、ボトムアップの体制が不十分。実習委員会が十分に機能していないため、各領域で感染症対策を講じるしかないが、領域責任者は実習に行かないために全面的に職位の下の方が負担を背負う。仕事量の格差を感じており、精神的なストレスが大きい。
- 研究フィールド(研究協力医療機関)が、コロナ禍による経営悪化で閉院、もしくは診療体制の変更を迫られており、今後研究活動を継続出来なくなる可能性がある。
- 図書館へ行けないことによる論文執筆の遅れ

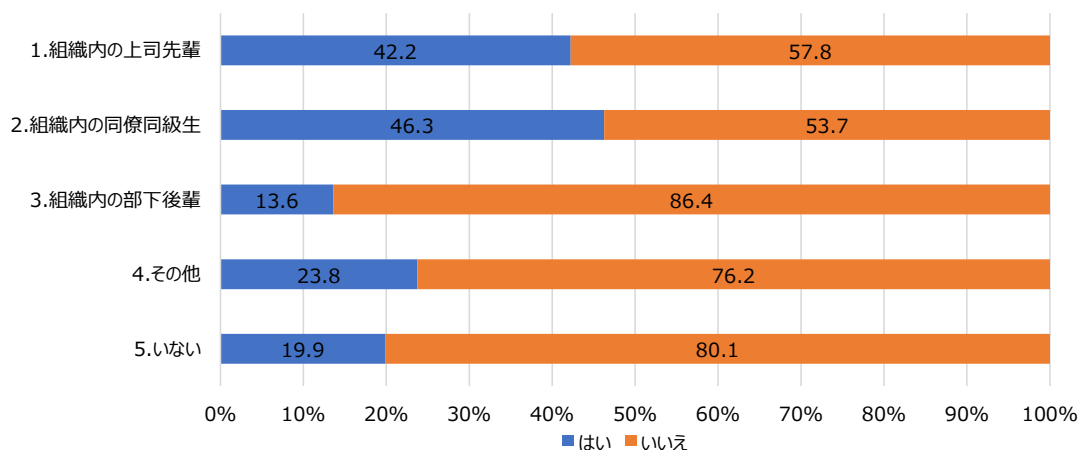
- 研究活動で、インタビューなど WEB 形式を選択した場合、参加者の倫理的配慮が十分に出来るかどうか。
- 在宅勤務が認められていない中での活動となるので、自身の健康管理を維持するだけで精一杯な状況です。生きていくだけで精一杯です。すっかり研究活動にまで考えが及ばなくなりました。
- コロナ禍における労務管理の不十分さの逆。
- 労務管理がどんどん増えて事務作業ばかりになることによる疲弊。
- 研究活動の位置づけが様々な事柄の最下位になっている雰囲気があり、研究をする＝仕事をしていない、もしくは暇なので他の仕事ができると捉えられて、ますます研究をしづらくなっている。
- 休校・在宅勤務の再要請に伴う研究の遅れ
- 自身の体調不良による研究継続の困難
- 研究スケジュールの遅れ
- 論文の査読が遅れている学会があります。論文の掲載が決定しないと任期の継続に支障をきたします。
- 2020 年 4 月に、科研費(若手)がはじめて採択されました。コロナ禍で教育に多くの時間が必要で夏季休暇も補習が続きます。コロナのため研究方法は再考が必要になり相談すべき講師も多忙のため時間がとれません。2020 年度は計画していたことがほとんど出来ないのではないかと思います。採択された科研が進められないことになった場合、どのようになるのか考えると怖いのです。
- 研究データが収集できない中、科研の期間だけが過ぎていき、予算も使えず調査もできないため、この研究費はどのような扱いになるのか不安である。
- 働きながら学ぶ大学院生の仕事の荷重が高くなり、研究がすすめられない。
- 研究協力施設とのつながりの脆弱化(これまでのように容易に連絡できないため)
- 研究活動再開の時期の不明瞭さ(研究協力施設が病院の場合、ご迷惑の掛からないように十分に注意したいが、連絡を取ることも憚られ施設の状況の把握が困難なため)
- 獲得している研究費の予算を使えないこと
- WEB 講義のための準備に追われる
- 未就学児を抱えながら、大学教育と研究とを両立させることの困難さ。子どもを保育園に預けられない期間はほとんど在宅で仕事も研究もままならず、保育園が再開しても子どもが発熱するたびに「コロナでは？」と不安になり、病児保育も使えない。教育についても、指導内容をオンライン対応版に修正することに多大な時間がとられ、研究活動に割ける時間が確保できない。
- 院生の研究遂行(zoom 開催となったが、倫理審査委員会開催・結果が遅れたこと、病院へ研究データ収集に制約が多いこと等)が遅れていることで、院生自身を不安にさせており、なんとか修了が次の 3 月に間に合ったらよいと考え実施している。また、院生が修了後の就職先を探すことに不安、ためらい、制限を感じている。
- モチベーションを保てるのか。
- 病院や施設は、コロナの影響で負担が増している。その中で、病院や施設にアンケートや資料の郵送などは躊躇される。研究が予定通りに進まない。
- 研究スケジュールが後ろ倒しになることによる、今後の職務への影響

- 4月に科研の採択通知が来たが、全く、研究に取りかかれない。海外渡航もできないので国際学会にいけず、予算が大幅に変更になる。科研費の延長をしてほしい。学会から、文科省にお願いしてください。
- 自己の意欲

問 2-Q8

Q8. あなたのコロナ禍における研究活動に関して、気軽に相談できる人はいますか。もっとも当てはまる選択肢をすべてお選びください。(複数選択可)

1. 組織内の上司／先輩
2. 組織内の同僚／同級生
3. 組織内の部下／後輩
4. その他
5. いない



≫ 「4. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

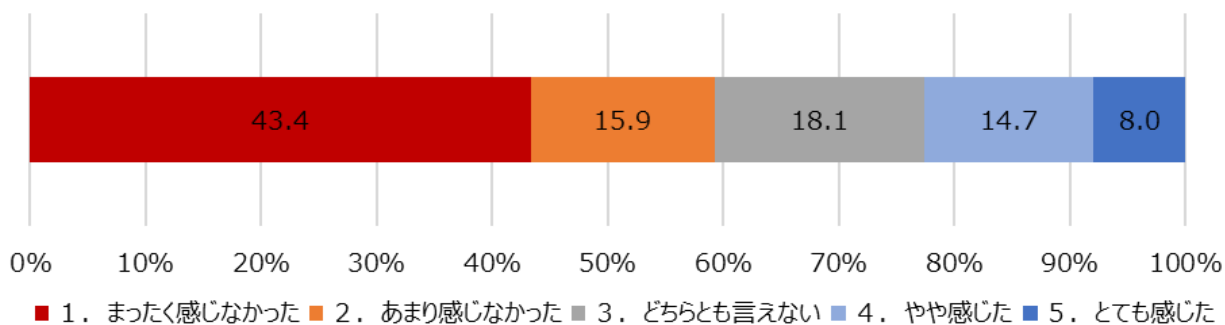
回答:「組織内の別の部署のスタッフ」「組織外の教育研究者／臨床実践者」「大学院時代の指導教員や同期」「家族・親族」「友人」など。

Q9. 以下は、コロナ禍における研究活動上の肯定的な変化として考えられる項目です。あなたは、これらの変化をどのくらい感じましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。

	1. まったく感じなかった	2. あまり感じなかった	3. どちらとも言えない	4. やや感じた	5. とても感じた
1. 通勤時間の短縮による研究時間の創出	1	2	3	4	5
2. 通勤時間の調整(時差出勤)による研究時間の創出	1	2	3	4	5
3. 対面会議の減少による研究時間の創出	1	2	3	4	5
4. 会議・出張の中止・延期による研究時間の創出	1	2	3	4	5
5. 新たな生活リズムの構築	1	2	3	4	5
6. 新たな研究アイデアの着想	1	2	3	4	5
7. 新たな研究へのチャレンジ	1	2	3	4	5
8. 新たな分野の研究者や知見に触れる機会の増加	1	2	3	4	5
9. 新たな分野の研究者との共同研究の着想	1	2	3	4	5
10. 在宅での研究活動の環境改善	1	2	3	4	5
11. 遠隔による教育活動の効率化による研究時間の創出	1	2	3	4	5
12. ICT を活用して国内の研究者間でのコミュニケーションが取りやすくなった	1	2	3	4	5
13. ICT を活用して海外の研究者とのコミュニケーションが取りやすくなった	1	2	3	4	5
14. 遠隔による研究活動の機会の増加	1	2	3	4	5
15. 遠隔による実践(臨床)活動の機会の増加	1	2	3	4	5
16. 遠隔による学会・講習会のメリットを体験	1	2	3	4	5
17. 遠隔でのピアサポート・コミュニケーションの機会の増加(オンラインでの同僚や大学院生同士の雑談や飲み会など)	1	2	3	4	5

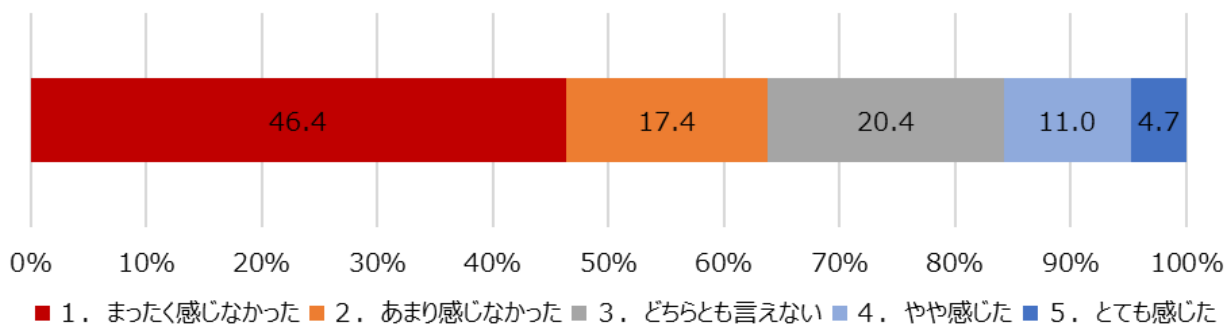
問 2-Q9-1

1. 通勤時間の短縮による研究時間の創出 (n=1,507)



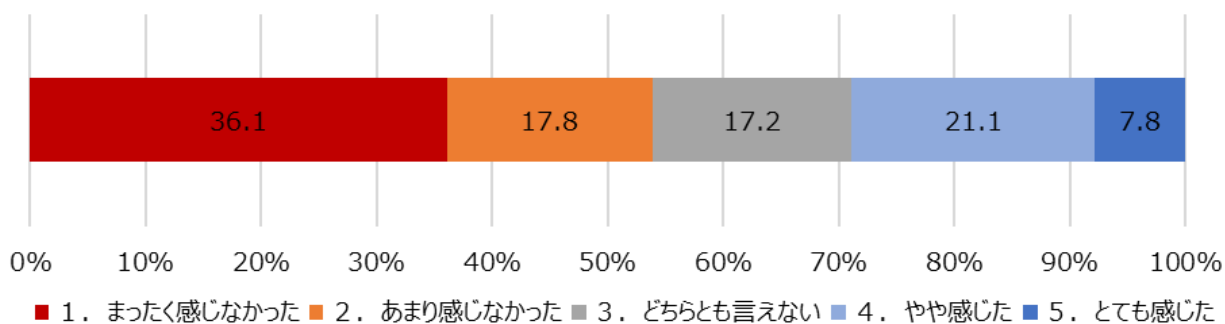
問 2-Q9-2

2. 通勤時間の調整(時差出勤)による研究時間の創出 (n=1,504)



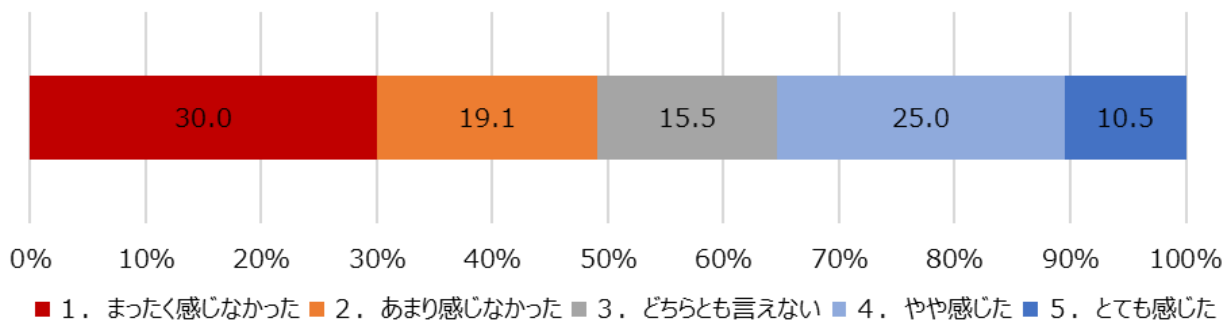
問 2-Q9-3

3. 対面会議の減少による研究時間の創出 (n=1,508)



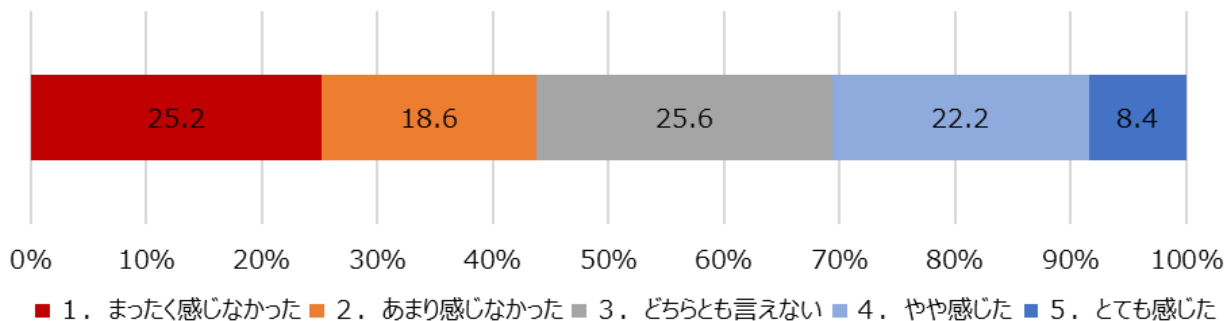
問 2-Q9-4

4. 会議・出張の中止・延期による研究時間の創出 (n=1,499)



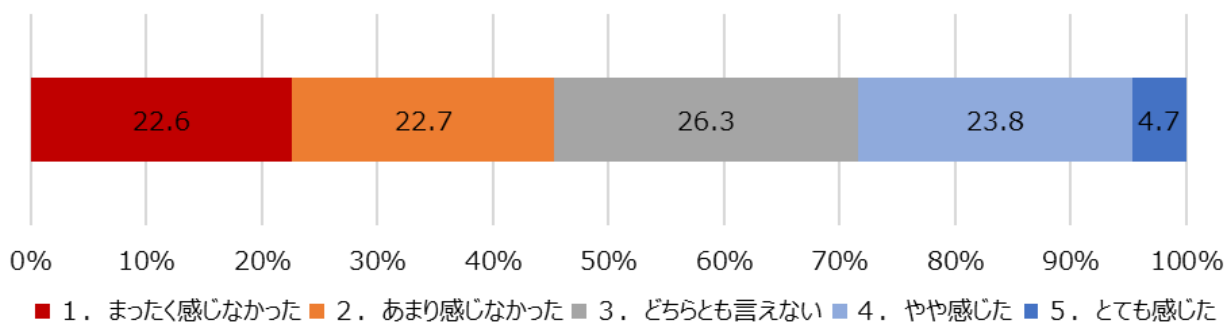
問 2-Q9-5

5. 新たな生活リズムの構築 (n=1,505)



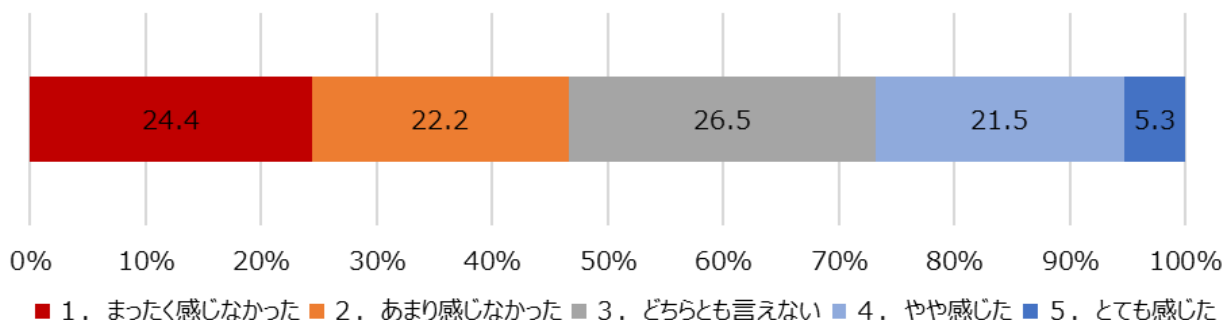
問 2-Q9-6

6. 新たな研究アイデアの着想 (n=1,504)



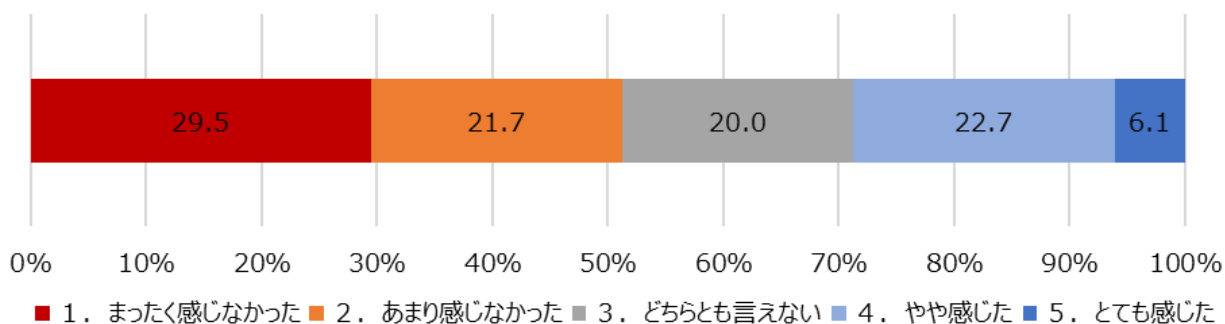
問 2-Q9-7

7. 新たな研究へのチャレンジ (n=1,497)



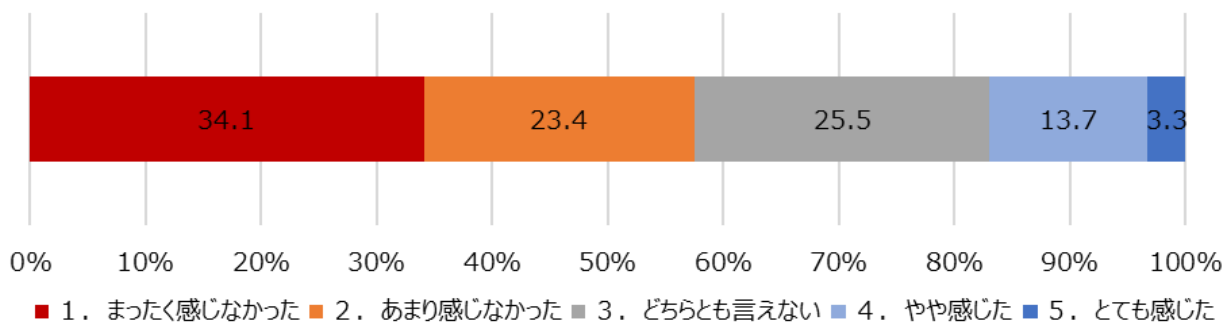
問 2-Q9-8

8. 新たな分野の研究者や知見に触れる機会の増加 (n=1,501)



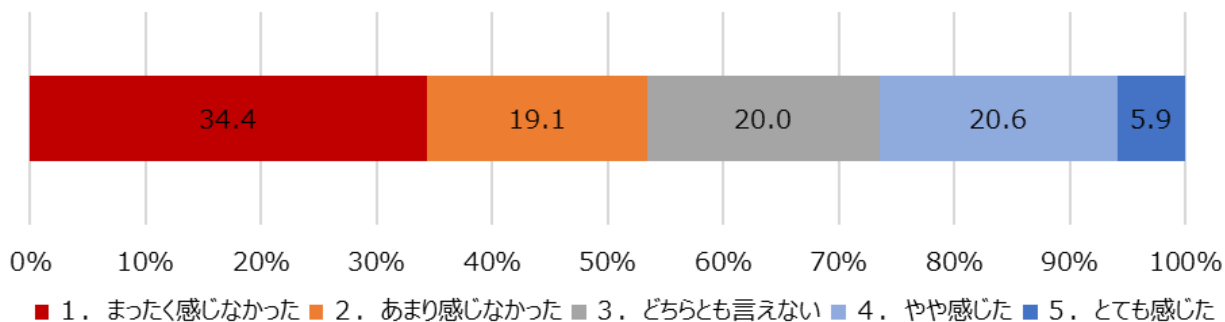
問 2-Q9-9

9. 新たな分野の研究者との共同研究の着想 (n=1,503)



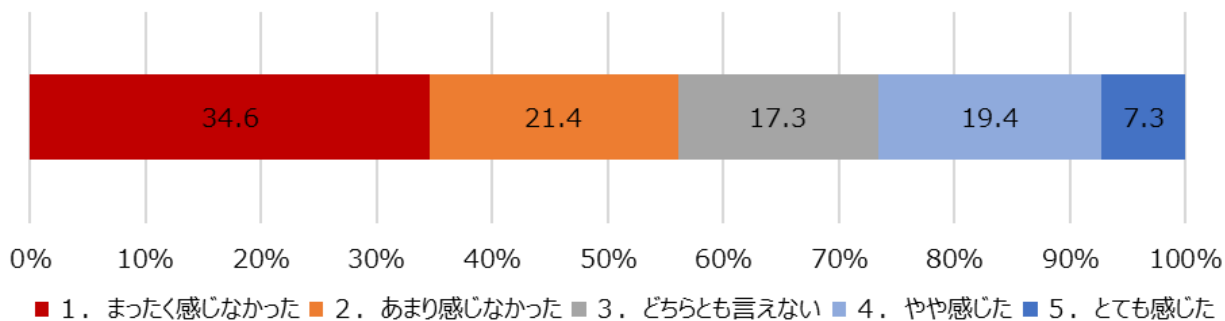
問 2-Q9-10

10. 在宅での研究活動の環境改善 (n=1,502)



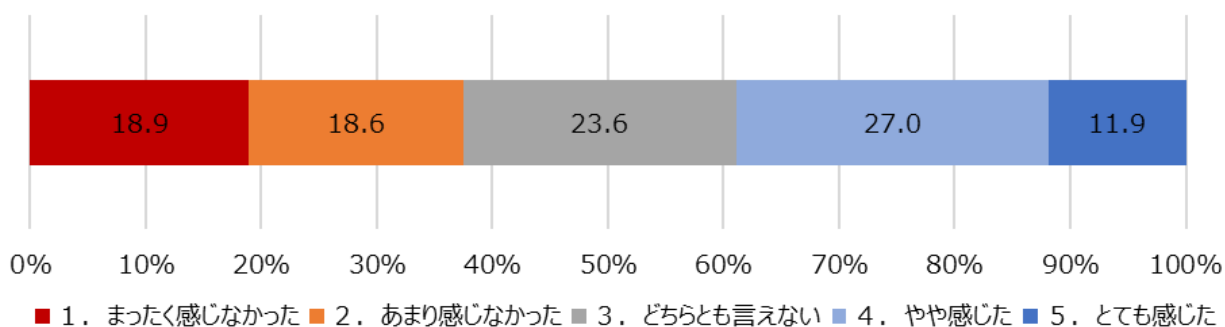
問 2-Q9-11

11. 遠隔による教育活動の効率化による研究時間の創出 (n=1,502)



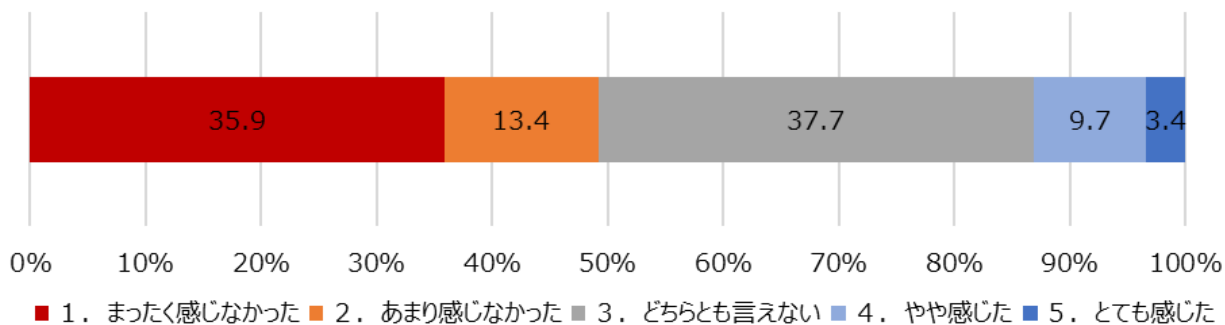
問 2-Q9-12

12. ICTを活用して国内の研究者間でのコミュニケーションが取りやすくなった (n=1,505)



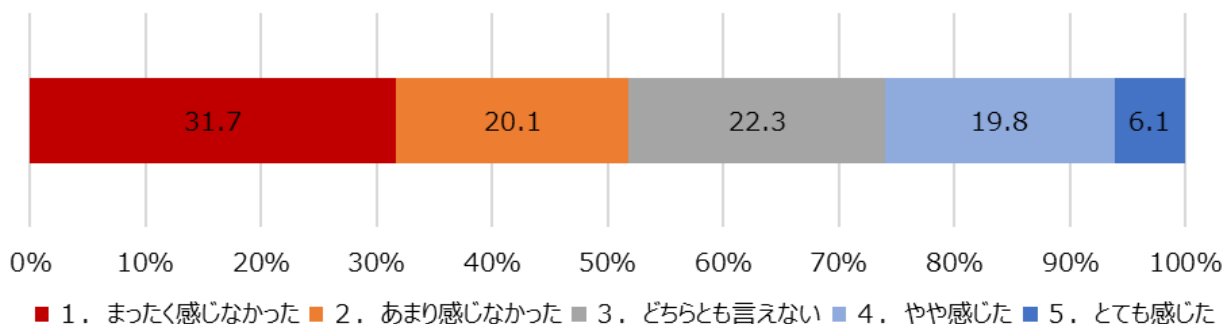
問 2-Q9-13

13. ICT を活用して海外の研究者とのコミュニケーションが取りやすくなった (n=1,497)



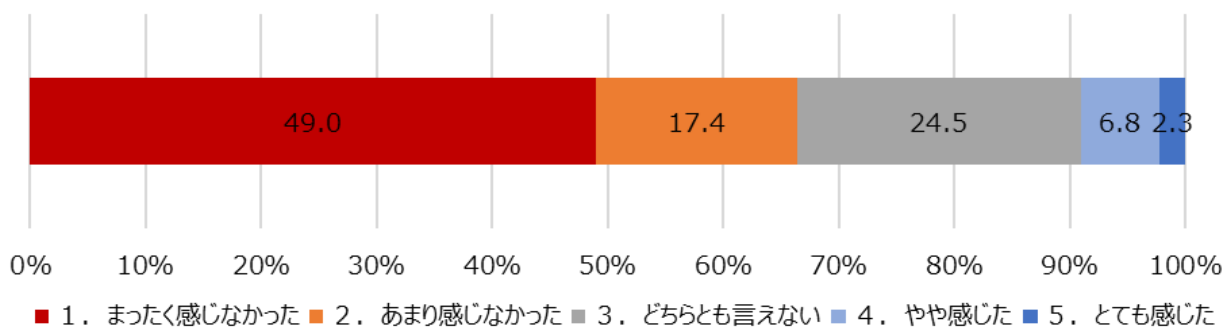
問 2-Q9-14

14. 遠隔による研究活動の機会の増加 (n=1,483)



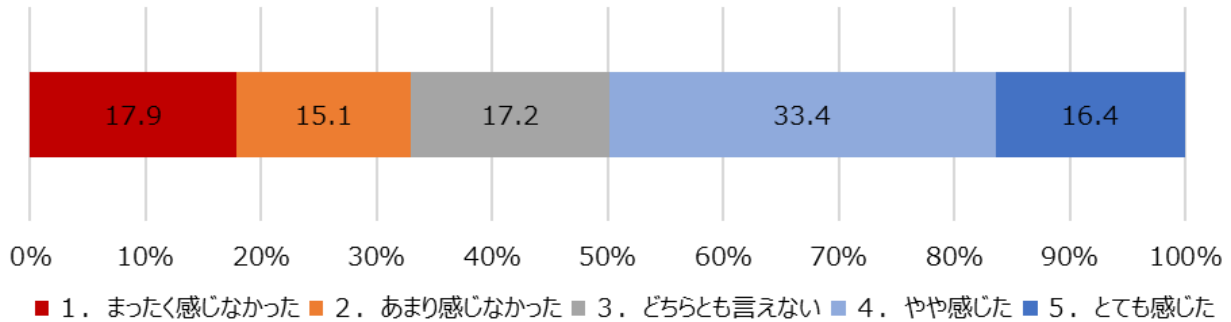
問 2-Q9-15

15. 遠隔による実践(臨床)活動の機会の増加 (n=1,492)



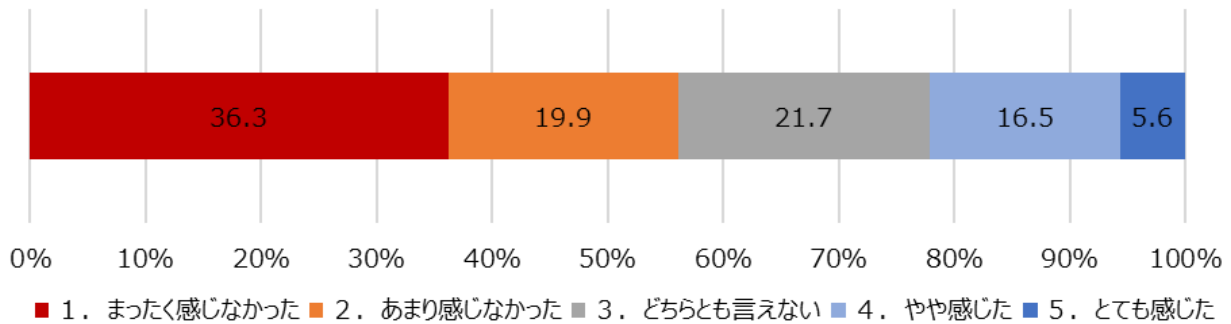
問 2-Q9-16

16. 遠隔による学会・講習会のメリットを体験 (n=1,499)



問 2-Q9-17

17. 遠隔でのピアサポート・コミュニケーションの機会の増加(オンラインでの同僚や大学院生同士の雑談や飲み会など) (n=1,495)



問 2-Q10

Q10. 上記以外に、コロナ禍において、あなたが感じた研究活動上の肯定的な変化がありましたらご記入ください。

- いつもメールの返信をよこさない上司が、(メールしかコンタクトの方法が無くなったためか)メールの返信をくれるようになった。
- 研究時間が取れることは肯定的に考えています。
- 学会発表に参加できない分、論文作成に向けた文献検索と収集を始めたこと。
- 他者との交流や不要な雑務が減ったことにより、比較的マイペースで研究活動ができやすくなっている
- 学生の面談が少なくなった
- 在宅勤務による通勤時間の減少、会議の効率化などによる、時間の創出はそうであるが、その他の大学教育に関する新たな業務が膨大で、研究活動に時間を使うことができなかった。(→今もできていない)
- 旅費交通費が不要となり、調査の実質に使える費用が増加した。
- 学会や研修会中止により、時間的余裕ができた。
- 土日開催が中止になったことにより、家族との時間に費やすことができた。
- 交通費や宿泊費などの出張費が抑えられたので、経済的負担が減った。
- テレワークで時間を有効に、論文執筆が捗った。
- 目的・課題・計画・デザインすべてにパラダイムシフト(発想の転換)を強いられたが、この変化が創造性に

繋がるのを感じる。

- 新たな研究フィールドの開拓をしなければならないが、臨床が忙しそうでいつから開始できるか思案中です。
- 学内の無駄な作業が簡略化されたことによる時間の創出
- 自分の時間が取れるようになったので、生活に運動を取り入れたり健康になった。
- 国内出張の移動時間が減ることで時間的な余裕が生まれた。
- 在宅ワークと研究室へ行く時間を主体的に決められるようになったこと。
- 出勤前のあわただしい時間を過ごさずに、すぐに自宅でも仕事を開始できること。
- オンラインでのミーティングが多くの人にとって通常のことになったこと。
- 対面会議が減ったため、会議のために移動することが少なくなったこと。
- 対象者に迷惑をかけられないので、研究計画を見直し、本当に必要な内容か改めて考える機会になった。
- 自身が今できることは研究成果を公表することであるということの意識の強化
- たまたま落ち込んでいた時期であったため、コロナ禍によって半強制的に休むことができて良かった。結果として、心機一転し研究活動を新しい視点から見直すことができた
- 直接の会話や相談できる時間は増えた。
- テレワークと大学での研究活動のバランスがとれると研究にかける時間を調節できると感じたが実際に実現はできなかった。
- 対面会議がなくなり、ほとんどが web 会議に変更されたため、移動の時間が減少し、研究時間を増やすことができた。各種セミナーがオンラインになり、どちらにせよ未就学児の育児でセミナーの参加が難しくオンラインを望んでいたため、何もかもオンラインになったことは大きなメリットです。是非オンラインセミナーは続いてほしい。
- 今後海外の研究者との SNS でのコミュニケーションのハードルが下がった。将来、挑戦してみたい。
- コロナ対応で研究活動自体(研究時間の喪失やフィールドの喪失、倫理審査の遅れ等)が大きく阻害されたので、肯定的変化はあまり実感できませんでした。
- 在宅勤務により、作業を中断される機会が減り、効率が上がった。そのぶん、研究活動に費やせる時間が増えた。
- zoom などに慣れている相手同士の場合は、zoom ミーティングが増え、コミュニケーションの機会が増えた。
- 研究に関する打ち合わせは、zoom ミーティングでも十分可能であることもわかった。
- 普段だったらいくつも参加しにくい研修やセッションも、自宅で参加できるので、逆に見識が広がった部分も大きい。
- 本来なら参加が難しかった、遠方でのセミナーに、ZOOM で気軽に参加できるようになった。交通費がかからず、参加費だけでよくなり、参加が容易となり、その点はとても良かったと思う。
- これまでよりも学会や講習会が Web 開催されることが多くなり、同時期に開催されていても参加が可能になったことは良かった。
- 困難であるからこそ、指導教員などがさらに研究の進捗や心の変化に寄り添ってくれた。
- 全体的に無駄が省けていると思う。
- データ収集の機会が減少しているからこそ、より一層、得られるデータの質を高めようと努力できる。オンラ

インを活用した調査に対して消極的な考えがあったが、様々な配慮を正しく行えば非常に有用なスキルであるという認識が高まり、今後の研究方法に活かせると学んだ。

- 在宅ワークで移動の時間が必要なく、マルチタスクが同時にできる。
- 在宅勤務になったことで通勤時間(片道 2 時間)がなくなり、その時間を研究はじめプライベートな時間に充てることができたため、驚くほど QOL が上がった。QOL が向上したことでメンタルが回復したのか、研究意欲が向上した。最も大きかったのは精神面の健康が劇的に改善したことだった。
- 研究室の片づけができ、環境整備になった。
- 特にありません。
- 投稿していた論文の締め切りが学会側の配慮(Covid-19 のために延長が必要な場合は申し出ることができたこと)により延長が可能になったことで、再投稿できた。
- 通勤時間や会議時間の短縮という利点は非常にあったと思いますが、その分、教務や大学運営等にかかる時間が莫大に増加したため、結果として研究時間の創出にはつながっていません。
- ICT の活用を提案した。機材も採用された
- 学会等への交通費、宿泊費の削減
- 海外大学主催の WEB セミナーに参加しやすい(情報を得る機会がある)
- 実施したことはありませんが、今後 Web (ICT) の活用が多様化していくように感じました。
- 依頼は、ほとんどと言っていいほど対面で行っていたのから、メール配信による日程調整や会議を設定することへの躊躇が軽くなった。
- 毎年実習があり、参加できなかった講習会が web 開催したので、講習を受けることができた
- 休講中の研究活動に専念する時間がやや増えた。
- 学会、研究会、講演が無くなり、休日に休養できた。
- 通勤時間、移動時間が節約できる。
- 在宅で、自分のペースで仕事ができるので、心理的に気楽。
- 良い意味で、人と距離がとれる。煩わしい人間関係に日常的には接しないで良くなった。
- 研究者仲間とのオンライン会議が積極的になった。情報交換がこれまでよりしやすくなった。(お互いにオンラインが当たり前になったため)
- 家族のそばで研究活動ができるので安心(帰宅が遅くなることを心配しなくてよくなった)。
- 隙間時間を活用しやすい。
- 移動や昼食代等が節約できている分、研究活動に必要な書籍、資材等の購入にお金をまわせる。
- 研究テーマの開拓
- 普段、人間関係に研究・教育の時間を取られていることがあったが、この期間は人との接触が少なくなり、そのような時間が減少し、研究や教育に集中することができた。このように、自分の研究や教育の時間を阻害していたものがわかってよかったと思います。
- 従来行うはずだったことは出来なくなってある意味時間が出来るが、別のこと(コロナ関連)で時間が必要になるので、プラスマイナスゼロ。
- テレワーク中に医中誌が特別学外利用できたこと。
- 遠隔授業の可能性を知り、その使用方法にも慣れてきたので、遠隔での学習会の開催など、これを現場の実践者との新たな交流のツールとして活用してみたいと思っています。

- 遠隔の可能性を考える機会の増加
- 予防的看護の重要性への気づき
- 打ち合わせ等にかかわる時間調整のわずらわしさが消滅したこと
- 今まで移動等に時間と費用を要するため、学会やセミナーの参加をためらう場合があったが、セミナーをオンラインでしていただける機会があったので、積極的に聴講できた
- 在宅ワークによって、職務の無駄が省かれたことで研究時間が捻出できると思っていたが、それを上回る遠隔講義の準備やメールなどでの学生対応に時間を費やし、結局研究にまで手が回らなかった。とくに 4 月、5 月は、24 時間メールが鳴り響く状況に、研究も進められない状況はストレスフルであった。しかし、6 月には慣れてきたこともあって、ずいぶん効率よく時間を使えるようになった。しかし、慣れた頃に緊急宣言解除となり、ICT、対面講義の両者とも中途半端な状況のまま、前期が終了しそうである。職場が ICT 化するのか、元の形式に戻るのかを決断しないことで、都度の対処に振り回される状況は、前回記入したときと変化していない。
- リモートが推奨され、当たり前前に研究会がリモートで開催されたことはよかった。
- 学会のセミナーや、学術集会も遠隔になり、参加がし易くなり、よかった。
- ICT などの技術習熟による研究方法の拡大
- 遠隔会議による移動時間が削減し、熟慮する時間ができた。
- リモートになり、今までなら話す機会がない人とのコミュニケーションの機会が増えた
- 多様な勉強会や研究会にオンラインで気軽に参加できるようになり、視野が広がった。情報を積極的に取っていかうという態度・姿勢ができた。
- 現状の対応に追われており、研究活動にまで手が回っていないため、肯定的に感じる事が少ない。
- ICT の活用で、普段会えない人とも会うことで情報の交換はできた
- 在宅勤務となったことで通勤時間が研究活動に充てられた。在宅によって集中して研究活動ができ、また家事の量は増えたものの両立がしやすくなった。在宅勤務の時は満員電車での通勤や職場での感染のリスクから解放されストレスが減り、また安心して研究活動ができた。
- 在宅勤務にはなりませんので、Q10 は該当する回答がありませんでした。
- 研究内容が空気質に関することなので社会的意義をあらためて感じた。
- 育児・家事両立の点では在宅勤務で通勤時間が無くなり、時間を効率的に使えた。
- 新しい着想、文献レビューの大切さ、データ収集の方法を工夫することができた、4 月から博士課程などの院生を指導するようになったためそれが楽しくやりがいがあり、自分も勉強になる。
- 否応なくリモート操作を覚えた。
- オープンゼミ(大学院)など、遠方であっても参加できた。(以前より参加していたもの)
- 研修会・学会参加の宿泊交通費の減少
- 新しい情報交換の方法が増え、これも新しい教育方法の始まりと考えられる。
- zoom 等の ICT を利用して、より国内外とのコミュニケーションが取れるようになった。また、学会等も何度も録画を見聞きすることができ学習の質が変化
- オンラインでコンタクトできる可能性が増えたことによって、遠隔地の参加者へのアクセスに対する経済的負担が減りそうなこと。
- 新しい考え方を導入する上で科学的根拠が出ていないので、独創的なアイデアが浮かぶことが多かった

- 遠隔による研究指導を受けたが、思った以上にスムーズに意思疎通ができた。
- この質問紙は、主に研究者に問われた質問と思われ、私のような現場で働きながら、博士課程に通う者は、回答しづらかったです。
- 回答率が1割ということで、回答いたしました。
- 保健所で、コロナ渦の真ただ中にある保健師です。とても目まぐるしい毎日を過ごしており、海外へのジャーナル投稿があと一歩なのに、まとまった時間をさくことができません。ただ、このような状況だからこそ、短時間で、集中してやろうという肯定的な気持ちの変化がありました。
- ICTを活用出来、対面会議などの移動にかかる時間がなくなった分、教育も遠隔になっているため、準備や授業後の課題確認など出欠に変わる提出物のフィードバックに時間を割く必要があり、結果的にそちらの時間が増大し、研究活動の負担になっている。
- 移動時間だけでなく会議資料の準備、前後の準備、自宅や仕事の段取りが楽になった。
- 遠方の研究者や研究協力者との予定調整がしやすくなった。
- オンラインジャーナルなどの利便性が向上した。
- 今までの価値観を見直す機会となった。ひたすら前進、理想を目指し、いい方向へと考えていた、いい方向とは何か、進歩・発展とは何なのかを再考する必要性を感じる。
- 在宅や時間があるのですが、意欲は減退した。肯定的な変化は新しい時代の研究テーマを発見しようとしている。
- 自分の時間を確保しやすくなった
- 在宅勤務が許可されているので、自分のペースで研究を進められること
- 研究指導や助言を受けるためにICTを活用することができて、移動時間の不便がなくなった。
- 所属施設がオンラインジャーナルの学外認証による利用ができるように手配してくれたため、コロナ前より便利になった
- 自宅での研究活動環境を整える時間や考える良い機会になった。
- 外出する機会が減り、新たな研究活動をすることに割く時間が増加したように感じる。だが、自分の気持ちの振れ幅がその時々で変化するので、要は自分の気持ち次第で前に進んだり停滞するのだと痛感している。
- 遠隔会議の方法が多方面に普及したので、同等の職場であれば研究の話し合いなど手段を選びやすくなった。
- コロナ感染への恐怖と隣り合わせで働く看護師と日々勤務する中で、このような状況による研究疑問への着想
- 在宅ワークを選択できる先生方は在宅で研究に没頭できる時間が増えたのではないかとおもいます。
- 論文執筆に時間を費やせること。
- 会議をズームで行うのは、拘束時間が短いので良いと思う。
- 在宅ワークで通勤時間は短縮されたが、その短縮した時間を使わないと業務は回らない。
- web会議になっても、回数が膨大に増えたのでメリットはない。
- 夏休みも短くなり、科研が全く進まない。
- 人と人の関係性についてを研究テーマとしているので、現在の研究が遂行できるのであれば（現状遂行が難しいのですが）、この社会生活の大きな変化にも役立つ成果が得られるのではないかと感じている。

- ICTによる教育への移行によって、通常の体力と時間の消費は少なくなったが、ICT使用による疲れが翌日まで続くことがある。また、ICT教育の緊張感があったため、慣れるのに3か月ほどかかった。そのため、授業準備と実習(遠隔)に追われることで、研究に取り組む気力を維持することができず、結果的に進めることができなかった。ただ、前学期が終了する現在は、まとまった時間が取れるようになったため、研究結果の論文化を進めている。
- 新たな発見ができた。やや追い風を感じた
- 遠隔会議システムを使用することによる、移動時間の短縮や、資料共有の効率化は図れたかと思います。
- 学会や学会の委員会等の会議がすべてオンラインになったため、地方都市の大学教員としては、移動時間がなくなり助かった。その代わりに、直接会う機会が全くなくなり、研究進捗や相互の報告など細やかな情報交換ができなかった。
- コロナで大学への就職ができず、看護実践を行う中で、新たな研究テーマが見えてきた。
- コロナ禍は早く収束してほしいですが、遠隔でのコミュニケーションが教育や研究に及ぼす影響は大きかったと思います。今後も遠隔でのメリットを生かした教育や研究をしていきたいです。
- 無、というより研究に取り組めなかった。
- 他分野でもWebセミナーが増え、関心のある勉強会に参加しやすくなった。
- 「上記以外」ではないのですが、様々な学会、研究会に在宅勤務により、ひとりで集中できる時間が増えた。(出勤すると細々した用事があり、自分の仕事が進まない。)
- 在宅勤務になっていることを前提とした質問になっているように感じます。
- 勤務は通常勤務で、プラスとして感染拡大を防止した講義や演習・実習で業務量が増えています。
- コロナ以前からICT活用をしていたため、特に変化なし。
- 自宅で集中して文献検索ができることがよかった。
- 研究活動と生活(介護)の両立の可能性があること。
- 既述の通り、講義や実習のオンライン化で時間が捻出しやすくなったこと、助教のため雑務が主だがオンライン化ではそうした雑務は激減すること、遠隔地の研究会・研修等にオンラインで参加しやすくなったこと、
- 研究を1から見直す時間となった。また、論文執筆活動に落ち着いて取り組むことができた。
- 宿泊を伴わない学会、研修会参加ができる
- 以前より、メールでのミーティングが充実した。対面のミーティングの良さもあるが、メールやオンラインミーティングの効率を実感した。

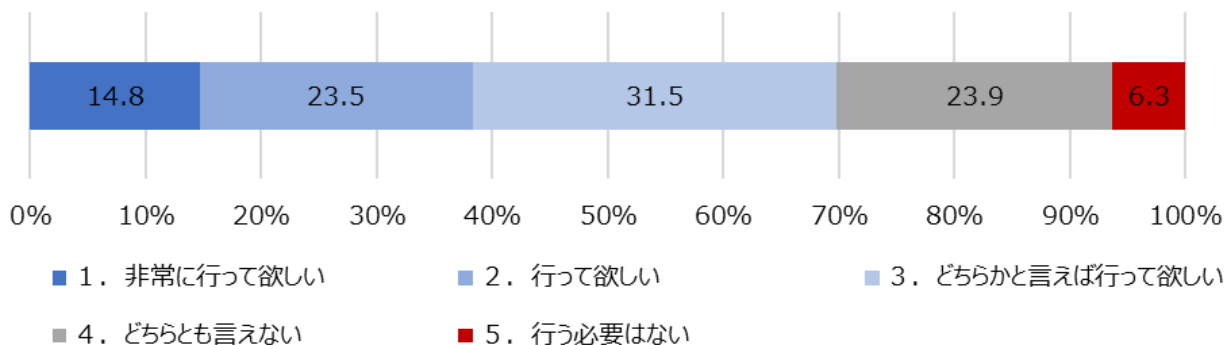
③コロナ禍における、効果的な支援の方法について伺います。

Q1. 日本看護科学学会(JANS)では、コロナ禍における会員の研究活動の支援などを行うことを検討しています。あなたは、どのような支援を行って欲しいと思いますか。あなた自身のために必要な支援について、あなたのお考えをお答えください。

	1. 非常に行って欲しい	2. 行って欲しい	3. どちらかと言えれば行って欲しい	4. どちらとも言えない	5. 行う必要はない
1. コロナ禍に関連する研究への研究助成	1	2	3	4	5
2. コロナ禍により留学の開始や継続が難しい人への費用の助成	1	2	3	4	5
3. JANS 会員が行う会員向け調査への協力(会員が行う研究への会員情報を用いた依頼、調査票配信など)	1	2	3	4	5
4. JANS が行う会員向け調査データのオープンソース化	1	2	3	4	5
5. オンラインで参加できるセミナーや研修機会の充実	1	2	3	4	5
6. オンラインで会員同士が交流・相談できる機会の充実(掲示板・メーリングリスト・SNS での限定グループなど)	1	2	3	4	5
7. オンラインで参加できる論文抄読会の構築	1	2	3	4	5
8. オンラインで参加できる研究ミーティングの構築	1	2	3	4	5
9. オンラインで行える研究に関する個別相談体制の構築	1	2	3	4	5
10. 遠隔での共同研究が効果的に行われた事例の共有	1	2	3	4	5
11. コロナ禍での在宅勤務で研究を進めることができた事例の共有	1	2	3	4	5
12. コロナ禍での阻害要因に対応できた研究マネジメント事例の共有	1	2	3	4	5
13. コロナ禍を含む非常時に活用可能な研究方法についての研修					
14. コロナ禍における効果的な教育方法の研修	1	2	3	4	5
15. コロナ禍を含む深刻な健康課題が発生した状況において研究と教育・実践・政策の連動を促進するネットワークの構築	1	2	3	4	5
16. 会員の所属組織に向けたコロナ禍における研究についての提言	1	2	3	4	5
17. 会員の所属組織に向けたコロナ禍における教育についての提言	1	2	3	4	5
18. 会員の所属組織に向けたコロナ禍における働き方についての提言	1	2	3	4	5
19. 会員の所属組織に向けた教員の ICT 習熟を促進するための提言 (ICT 支援スタッフの雇用など)	1	2	3	4	5

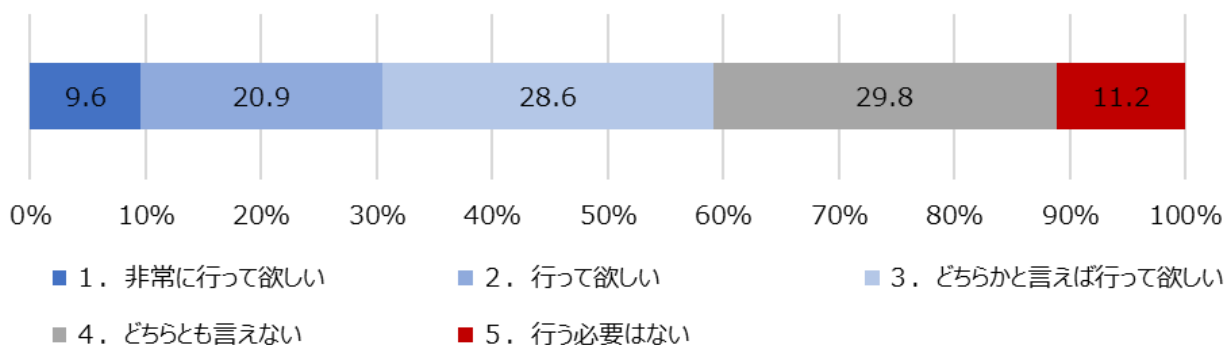
問 3-Q1-1

1. コロナ禍に関連する研究への研究助成 (n=1,505)



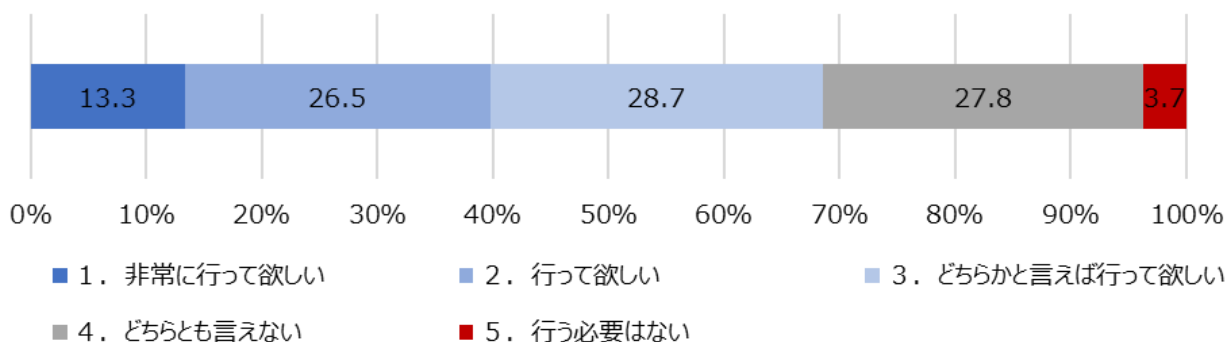
問 3-Q1-2

2. コロナ禍により留学の開始や継続が難しい人への費用の助成 (n=1,498)



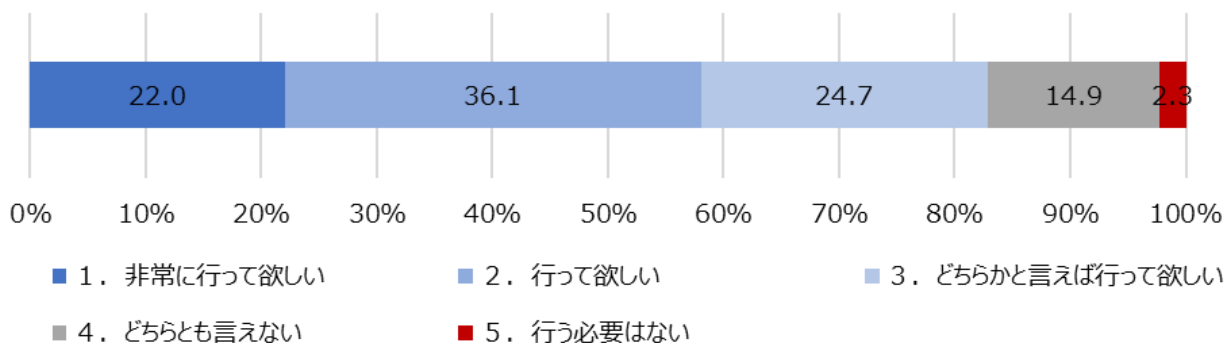
問 3-Q1-3

3. JANS 会員が行う会員向け調査への協力(会員が行う研究への会員情報を用いた依頼、調査票配信など) (n=1,493)



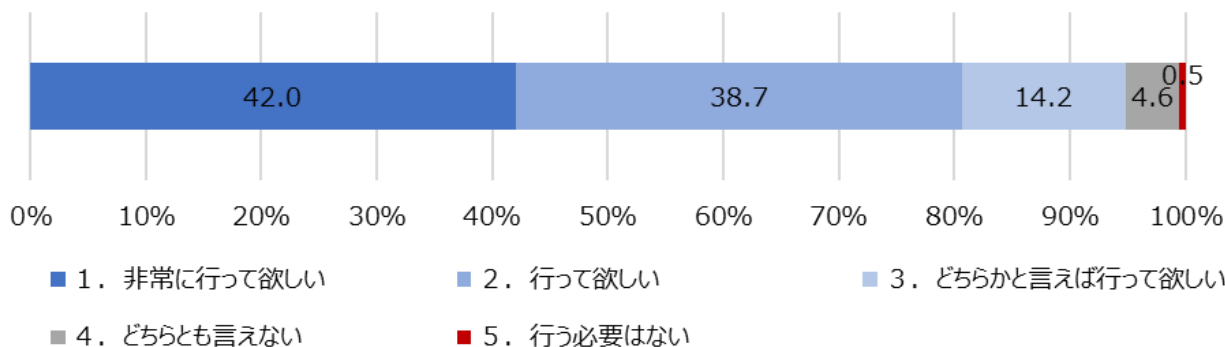
問 3-Q1-4

4. JANS が行う会員向け調査データのオープンソース化 (n=1,504)



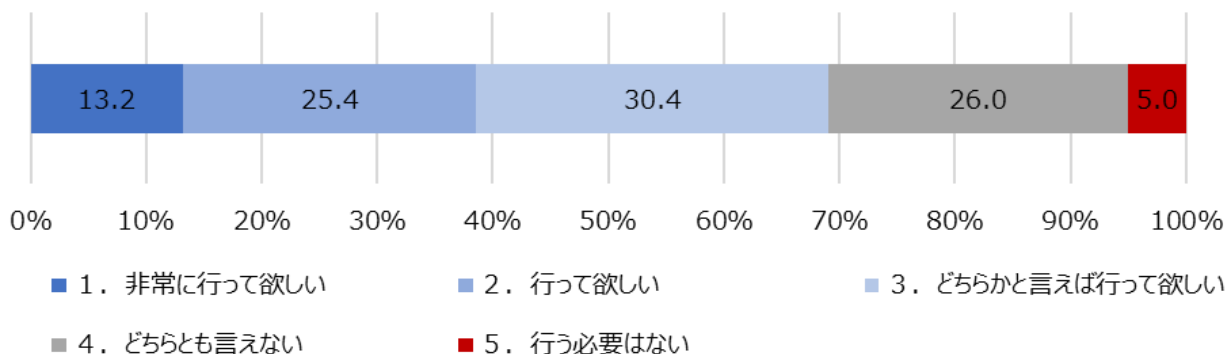
問 3-Q1-5

5. オンラインで参加できるセミナーや研修機会の充実 (n=1,498)



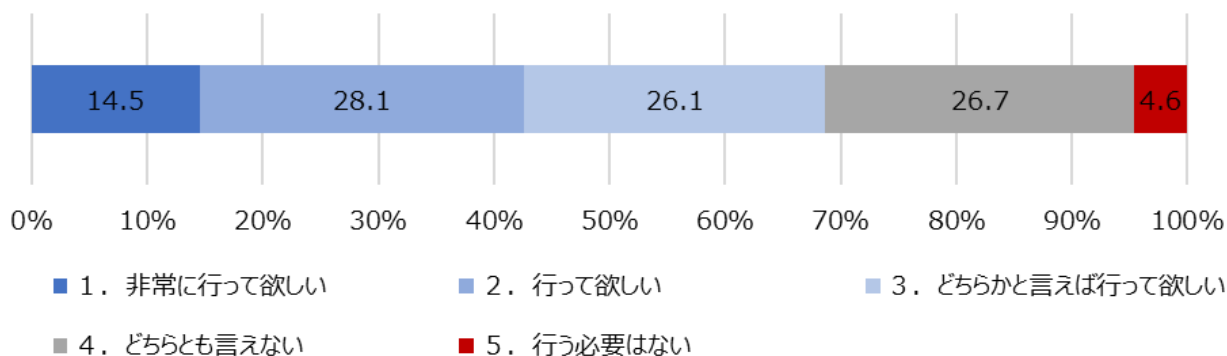
問 3-Q1-6

6. オンラインで会員同士が交流・相談できる機会の充実(掲示板・メーリングリスト・SNS での限定グループなど) (n=1,496)



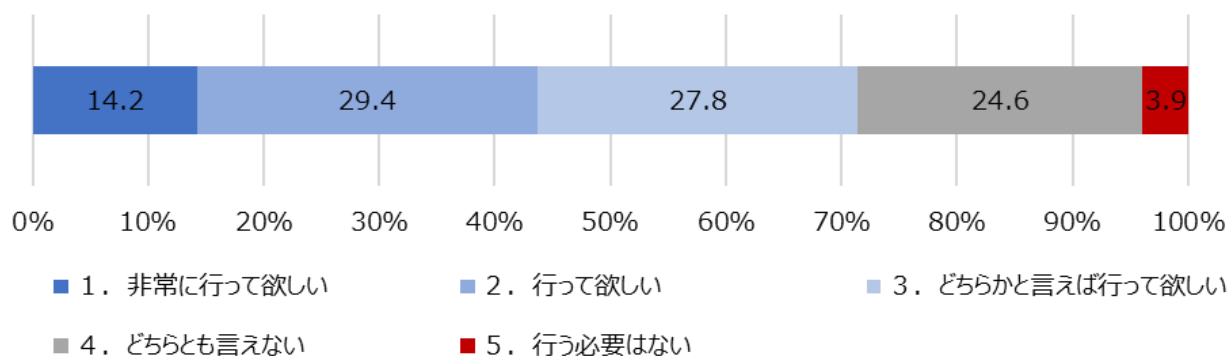
問 3-Q1-7

7. オンラインで参加できる論文抄読会の構築 (n=1,490)



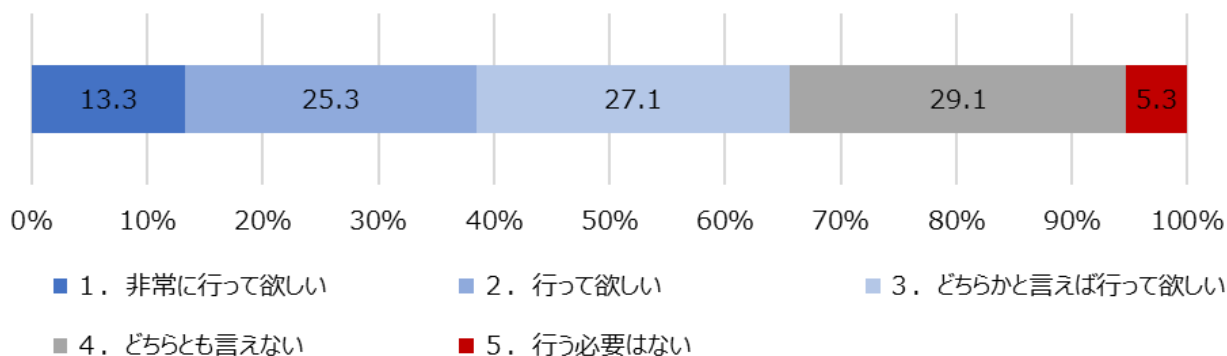
問 3-Q1-8

8. オンラインで参加できる研究ミーティングの構築 (n=1,498)



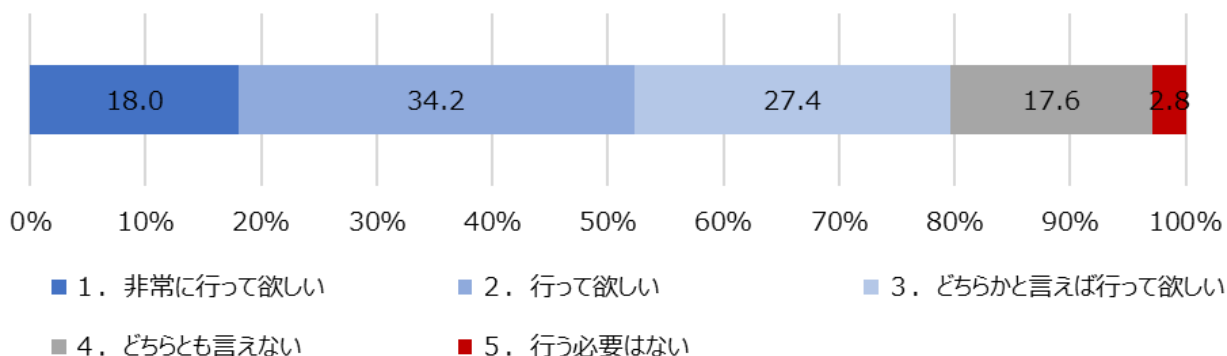
問 3-Q1-9

9. オンラインで行える研究に関する個別相談体制の構築 (n=1,501)



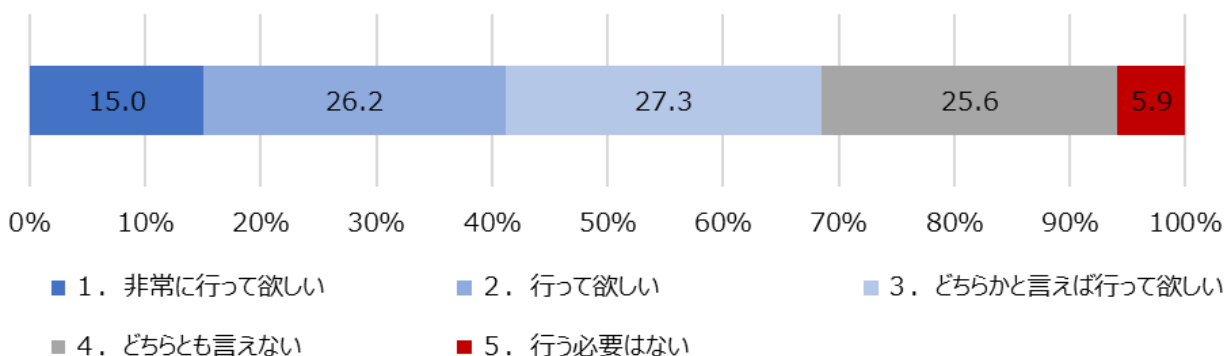
問 3-Q1-10

10. 遠隔での共同研究が効果的に行われた事例の共有 (n=1,491)



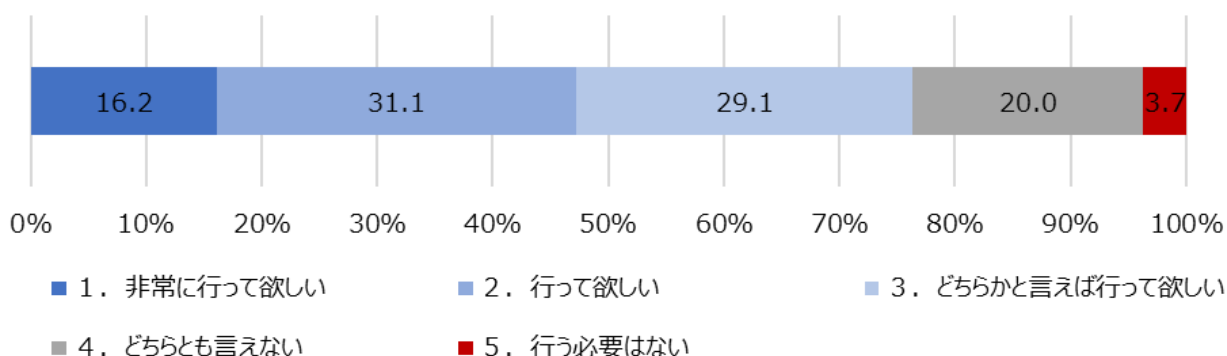
問 3-Q1-11

11. コロナ禍での在宅勤務で研究を進めることができた事例の共有 (n=1,492)



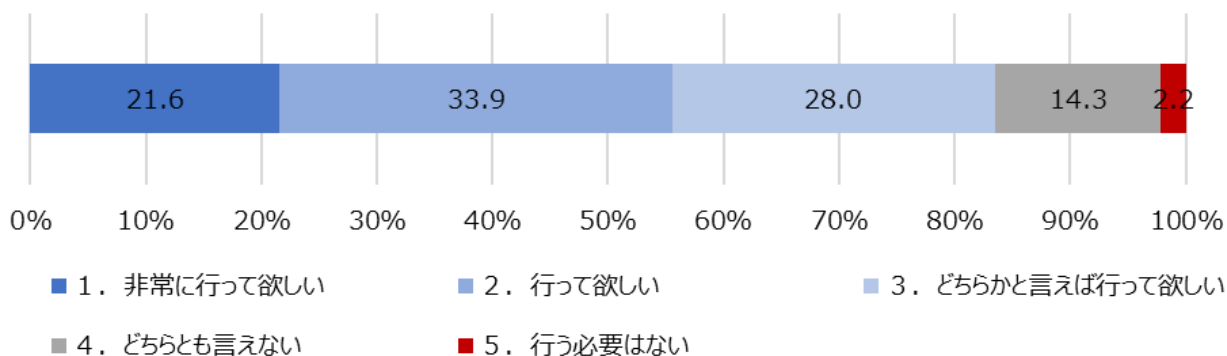
問 3-Q1-12

12. コロナ禍での阻害要因に対応できた研究マネジメント事例の共有 (n=1,484)



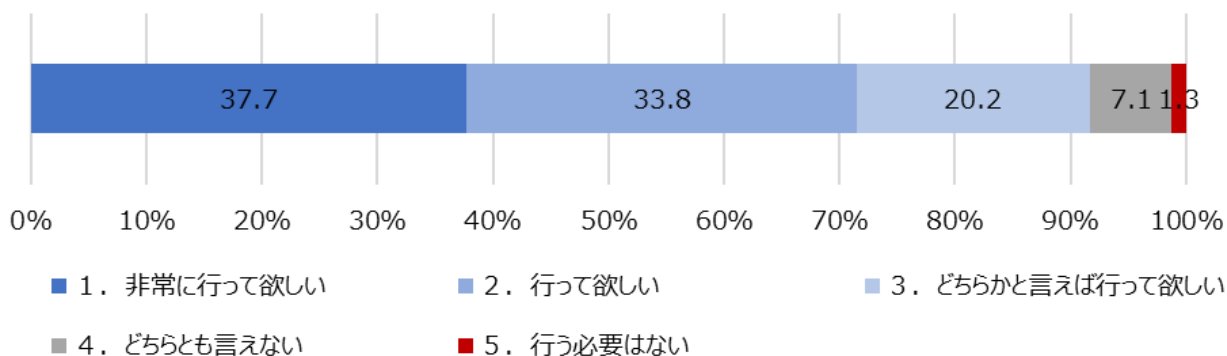
問 3-Q1-13

13. コロナ禍を含む非常時に活用可能な研究方法についての研修 (n=1,486)



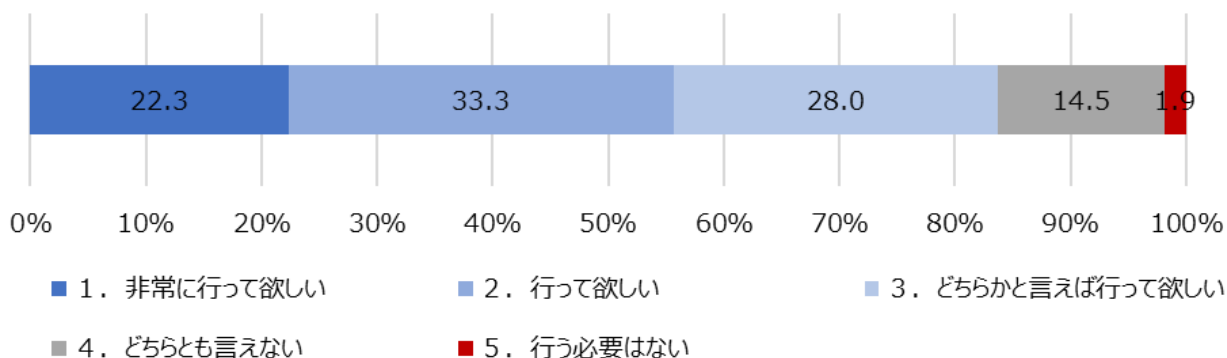
問 3-Q1-14

14. コロナ禍における効果的な教育方法の研修 (n=1,494)



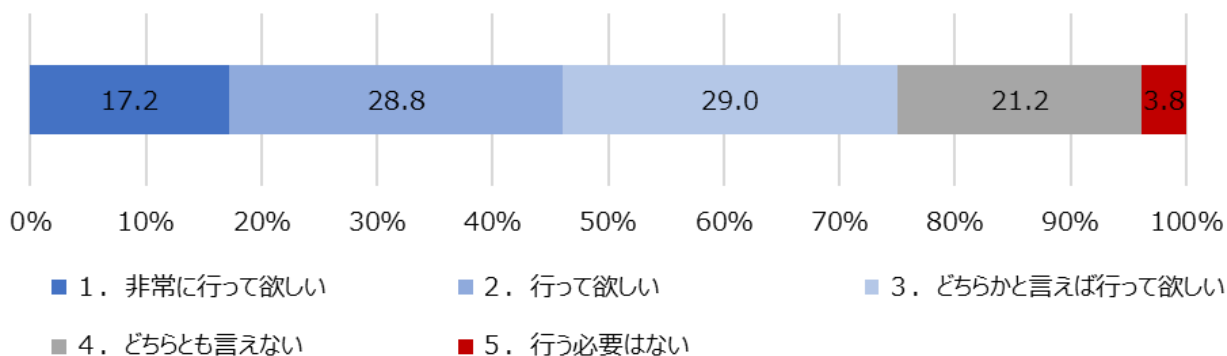
問 3-Q1-15

15. コロナ禍を含む深刻な健康課題が発生した状況において研究と教育・実践・政策の連動を促進するネットワークの構築 (n=1,495)



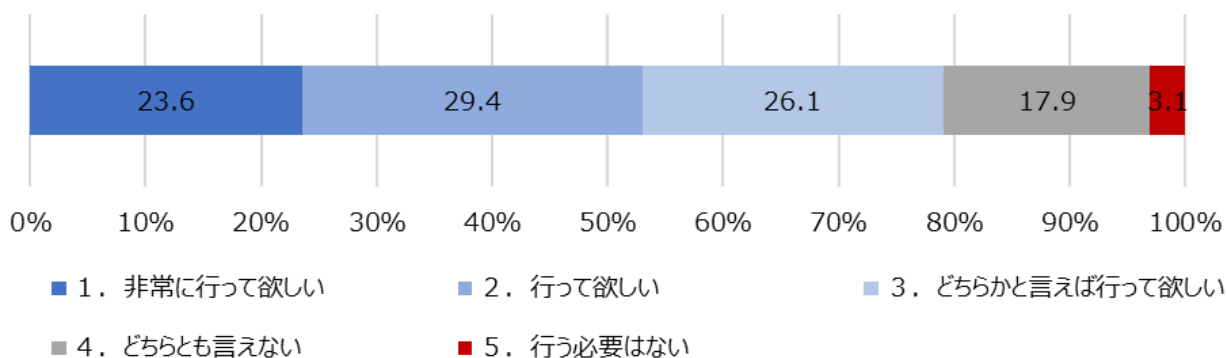
問 3-Q1-16

16. 会員の所属組織に向けたコロナ禍における研究についての提言 (n=1,495)



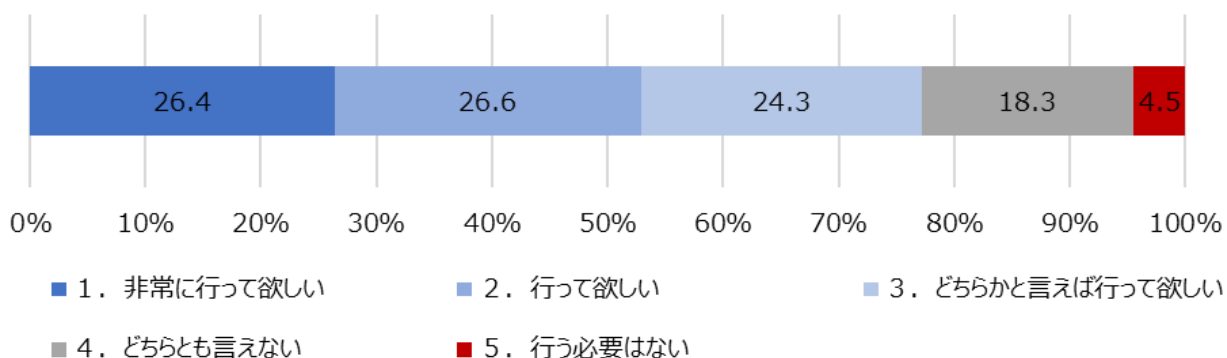
問 3-Q1-17

17. 会員の所属組織に向けたコロナ禍における教育についての提言 (n=1,493)



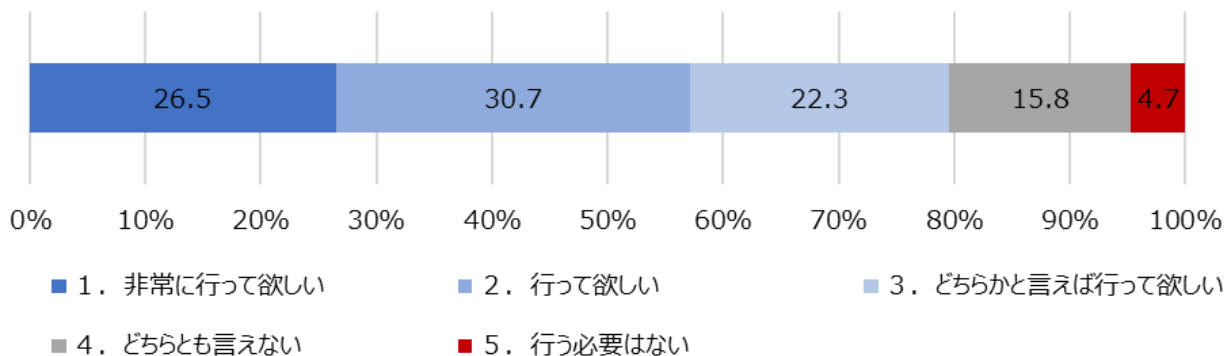
問 3-Q1-18

18. 会員の所属組織に向けたコロナ禍における働き方についての提言 (n=1,484)



問 3-Q1-19

19. 会員の所属組織に向けた教員の ICT 習熟を促進するための提言 (ICT 支援スタッフの雇用など)
(n=1,492)



問 3-Q2

Q2. 上記以外に、コロナ禍における会員の研究活動支援のために有効と考えられる方法について、アイデアがありましたらご記入ください。

- 多数の学会からこのような調査がばらばらと来るのを、一元化・集約して、手間を減らしてほしい。
- テレワークの促進が謳われているが、結局のところ緊急事態宣言解除後にすぐに通常勤務に変わった。
- 通勤時の満員電車、ターミナル駅の利用など、自身の感染リスクも高い中、実習指導に行くことに不安がある。
- 是非とも、テレワーク可能な人のテレワークの促進を看護業界においても推進してほしい。
- 在宅で研究が行えない最大の理由はデータ管理の方法にあると考えます。倫理審査時にデータ保管場所を特定しているため、施設外へ持ち出すことができず、解析や論文執筆が実施できない状況にありました。また倫理の変更申請を試みようにも、倫理委員会自体が動いていないために申請することすらできませんでした。本来組織内の倫理委員会を通して決定されるべき事項ではありますが、緊急時においてデータ持ち出し等を許可してもらえるようなアプローチ、または持ち出しを想定した倫理委員会申請書類の作成方法などの提案があると助かると考えます。
- テレワークの推進
- エビデンスに基づいた環境整備の指針の提言。(過剰な環境整備に時間をとられないため)
- 対面でのインタビュー調査のハードルがかなり高くなったと思います。仮に zoom などの ICT を活用した対面調査をした場合、個人情報を守られるのでしょうか。インターネットを活用した対面調査における個人情報の保護・倫理的配慮について教えてほしいです。
- 子どもがいる女性研究者のための支援(そういう人がいると示してもらっただけでも救われる)
- 文献の検索機能や文献の取得が、在宅でも簡単に出来る様に、アクセスしやすい様にして欲しい。
- 基本的な教育使える動画の共有、基礎知識の講義のオンラインセミナー(学生が学ぶ基礎知識となるものを学会で配信し、各学校は演習中心の講義で良い仕組みが欲しい)
- メンタルヘルス対策
- 家庭での役割も増えて、社会との繋がりが逆にできず、孤立していた。メンタルが病まない様な支援

- 研究助成は、コロナ禍のテーマに限定しないで広く公募していただければありがたいです。
- コロナにより、研究が順調に進めることが難しい状況にあり、民間、および公的な研究助成金の使用期限の延長を学会として提言してほしい。
- コロナ禍への対応に伴い構築された新たな教育・研究の方法について、コロナ禍終息後も引き続き教育・研究のオプションとして活用・充実させていくことを、会員の所属組織に対して提言して頂きたい。特に大学院教育での活用を期待している。例えば地方大学では、社会人の大学院生が多いことや、遠方から通学している院生がいるため、遠隔による授業や研究指導を充実させることで効率化が図れる。また、県外を含む遠方からの大学院生の受入れが可能になることで、大学院を志望する方にとっても、地理的な条件に制約されず自分の関心テーマにあった指導教員・研究室を選択できる(マッチングの向上)。大学院生の新たな確保策は、研究活動の推進に繋がると考える。もちろん一方で一極集中や研究室間格差が生じる可能性もあるが、長い目で見た看護学の深化と発展のためには必要だと考える。
- コロナ関係なくお金やエネルギーがあればやったほうがいいのかもしれませんが、助成などを充実するお金はないと思います。教育などの支援はこの学会がすべきことか？という疑問があります。結局、恩恵を受けるのはもともと研究の力がある一部の人では？と思います。
- オンラインで研究会や学術集会を開催するノウハウを共有して、だれでも気軽にオンラインでつながることができれば、より研究機関間の連携などがスムーズに行われるのではないかと考えております。このコロナ禍の状況を逆にチャンスと考えて、新しい取り組みを進めていけるといいですね。
- 私は ICT 関連の研究が専門ですので、ぜひいろいろな先生方と協働していきたいと考えております。
- 現地調査を必要とする研究(進行中)の計画変更に関する支援
- 特にありません。
- 看護科学学会は公益社団法人なので、特定の困窮している個人を支援することは難しいと思うが、社会に資する研究をサポートすることはできるように思われる。そこで、以下のアイデアを記します。
「学会主導型で、コロナ下でも可能な全国規模の研究テーマを決め、研究代表者を募集し、多施設の会員が研究参加してデータを提供できるような仕組みを作り、その研究に研究費を提供する。」
- 現在、科研費の研究期間を延長中なのですが、コロナ禍により今年度中の終了は難しいと考えております。同様の問題を抱えている研究者は少なくないと思いますので、文科省や厚労省に提言していただけると嬉しいです。
- 遠隔教育に関連する新たなソフトが開発されたときに、そのソフトならびに関連する研修会などの情報提供
- 研究活動に有用なソフトの紹介、事例紹介をしてほしいです。
- 匿名化データの共有やオープン化
- サーベイモンキーといったインターネットアンケート調査ツールが安全かつ容易に利用できるプラットフォームの構築
- 「コロナ禍で研究が滞るなんて研究者として失格」と思って落ち込んでおりましたが、問 2 の Q5 の「研究活動を阻害する要因として考えられる項目」に、16. 28. ~33. の項目を入れて頂き、救われました。具体的な方法を述べることができず申し訳ありませんが、あらためて、共有することも支援になるのではないかと感じています。
- テーマ別分科会形式の情報共有
- 会員は教育機関に属していることが多いと思います。それぞれの教育機関でのコロナ対策の現状の共有

がほしいです。コロナウイルスの感染を完全に 0 にすることは出来ず、それぞれ適度な塩梅を探し求めている現状と考えるためです。

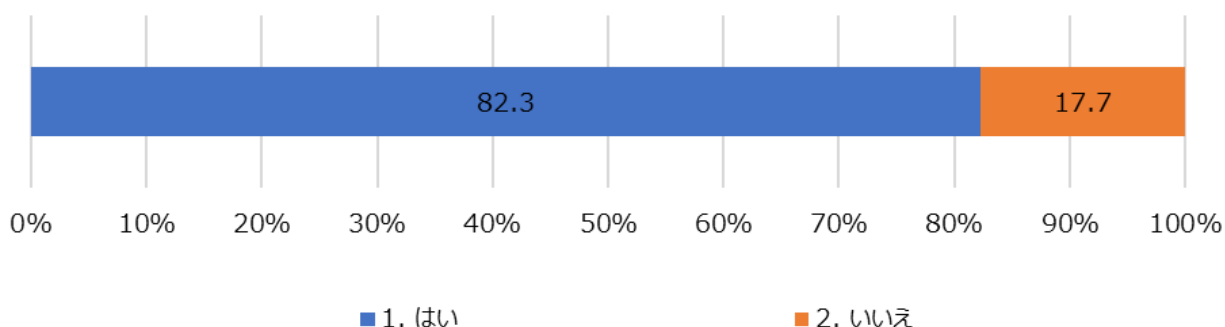
- 環境が変わる時には様々な研究シーズが生まれるが、若手やこれからの研究者が歩を進めるのはゆっくりである。
- JANS 学会は大変大きな学会であるが、上記の支援には、これからの研究シーズの美味しいところを先取りにしてしまうものも含まれていると思う。JANS が活躍して若手の出る幕を総ざらえしてしまうような対策ではなく、若手やこれからの研究者が新たな研究の芽をはぐくめるような後方支援(助成やオープンリソース)に徹して欲しい。上記の 15 番などは、支援といいつつ、新たな研究シーズであると思う。JANS がここに手を出すことによって、他の研究者では何も出来なくなると思うので、こういうことに関して関与すべきでないと思う。このような調査も、学会が行うべきではなく、若手の研究者にゆだねるべきでないのかと思う。
- 特定の所属組織でなく全般に対する提言でもよいので、お願いしたい。このような状況にあって、限られた人員、しかも欠員が生じている状況において、コロナ以前の状況と同様の業務の質を求めることは、職員の疲弊を招き、しかもその疲弊は一時的なものではなく、深刻な状況になりつつあると感じています。それぞれの組織において、優先すべき業務を検討し、今年をあきらめるという業務もあってしかるべきだと思えます。大学であればまずは在校生への教育を保障すべきであり、まだ入学もしていない、授業料も払っていない者へのサービスは入試の体制を整備するなど、最低限のことに限定すべきだと思えます。
- 科研の期限延長を学術振興会へ働き掛けて頂きたいです。
- 在宅勤務が可能となるよう、所属組織にぜひ働きかけてほしいです。
- 以前より労務管理や WEB 講義に対応するような資料作り、ICT に関連した諸手続きや作業など事務作業が増えている。研究や教育のエフォートやプライベートな時間も割いて今年はこちらに対応している。事務職員の雇用に関する提言をしてほしい。(医学系では研究室ごとに秘書雇用が普通だが看護ではまだ一般的でない。)
- 海外研究者との共同研究の橋渡しをして欲しい(学会や研究活動で海外に赴くことが出来ないのも、共同研究者を見つけにくい)
- JANS とは異なる機関になりますが、コロナの影響でデータ収集ができません。そのため、本年度の科研費での研究活動が全くできていない状況になっています。科研費の期間延長の措置など、他機関への働き掛けを行ってほしい。
- 大学院生が病院に入れなかったり対象者に面会できず、研究が遂行できない状況にあります。そのため、今年度修了予定だった学生が修了できない可能性が生まれています。可能な限り論文審査の日程など後ろ倒しにするなど早急に各大学に働きかけていただけるとよいと思えます。
- こちらの学会ではありませんが、論文の査読が遅れたり、学会発表が中止になったりした学会があります。他の学会ですが、全国に向けてこれらの改善を呼びかける活動をしていただけたら助かります。
- ICT の活用と在宅ワークの効果的な取入れに関して、提言してほしい
- 研究者と研究協力施設をつなぐ方策の提言
- 研究依頼をする時に、どういうことに注意したら受け入れてもらえるのか。通常と違うコロナ禍での注意点など。コロナ禍になってから研究を受け入れてもらえて事例を知りたい。
- オープンジャーナルソースの充実
- オンラインでの国際学会との協働研修

- e-learning コンテンツ作成
- コロナ禍における市民への感染予防啓発の提言やシンポジウム
- 学会として直接的な支援を行うよりは、成功例だけでなく、頓挫した例など、さまざまな事例の情報を提供したり、整理すること
- オンデマンド学習 WEB 配信を無料で行っていただきたい。会員特典が欲しい。
- 研究費の助成や会費の免除
- コロナの状況を ZOOM 等で話せる機会があったら嬉しいです。
- 学会でどうにか対応することには限界があるとおもいます。
- 遠隔授業の準備や事務処理をしてくれる十分な人員の確保が必要だと思います。
- 大学によって前提条件となる条件が大きく異なるため、労働環境の格差によって受けとめは様々になるのではないかと。個人に対する研究に関する支援(セミナー)の方が有益のように思われる。
- 研究は、コロナだからその方法の工夫は必要ではあるが、基本的に倫理を踏まえた上で、確立された方法に準拠して実施したいと考える。しかし、その枠がどんどん不明確になっていくことに焦りや葛藤があり、科学的な考え方で対処方法の示唆が欲しい。
- とにかく時間を必要とすることはしてほしくない。
- 臨床現場を研究フィールドとしているので、研究がストップしてしまいました。現地に足を運び、参加観察やインタビューをするような研究の方法をそのまま継続できるような何かガイドラインのようなものがあると、施設側や参加者の協力が得られやすくなりそうです。
- 博士課程の研究計画審査を通過したばかりで漸く調査という段階でしたので、調査もできず休学となれば研究費が出ないなど、厳しい状況です。
- 休学期間が延びると学費がかかりますし、卒業まであと少しのところまで来て諦めるしかないとなれば、本当に絶望的です。
- 大学院生の救済を国に働きかけていただければ幸甚です。必要でしたらぜひご協力いたします。
- 特記なし。
- 教育に関しては、特に臨地実習の ICT を用いた教育方法(代替え方法)の事例、コロナ禍における臨地実習の工夫事例を知りたい。
- 臨床に研究への協力を呼び掛けてほしい。臨床現場が大変なことも十分わかっているが、「看護」の将来のために医療機関には研究を受けてほしい。
- オンラインシステムを用いた質的調査研究について、倫理的側面に関して大変関心があり先行研究を調べようと考えています。

④看護系大学の常勤職の人が、コロナ禍において仕事に費やしている時間の配分状況について伺います。

問 4-Q1

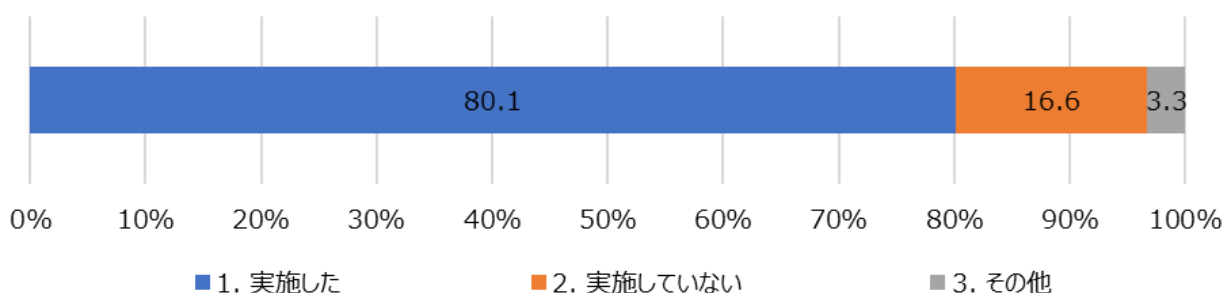
Q1. あなたは現在、看護系大学に常勤職として勤務していますか。(n=1,496)



※「2. いいえ」とお答えした方は、次の設問カテゴリー「問 5. コロナ禍における、科研費による研究遂行状況について伺います」にお進みください。

問 4-Q2

Q2. 直近の3ヶ月間(2020年4~6月)で、あなたの大学では在宅勤務・リモートワークを実施しましたか。(n=1,266)



≫ 「3. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

回答:「感染拡大地域からの通勤者のみ実施」「事務職員のみ実施」「推奨はされたが実施していない」「個人の判断に委ねられた」など。

Q3. 直近の3ヶ月間(2020年4~6月)で、あなたは仕事に費やしている時間を、どのように研究・教育・管理運営・社会貢献活動などに配分していましたか。以下に示す活動ごとに、割合(%)をお答えください(合計が100%となるようにご回答ください)

問 4-Q3-1~問 4-Q3-6

※括弧内に平均値を記載(各数値の平均値のため、合計は100%にならない)

※エフォートの合計が100%になる回答者のデータのみを用いて集計 (n=1171)

1. 研究活動(文献検索・調査／実験・論文執筆・研究指導など)	:(14.9)%
2. 教育活動(講義・実習・演習)	:(56.4)%
3. 管理運営活動(大学における会議・委員会、オープンキャンパスなど)	:(20.1)%
4. 社会貢献活動(学会の委員会活動、市民講座など)	:(4.9)%
5. 実践(臨床)における活動	:(2.4)%
6. その他	:(1.2)%

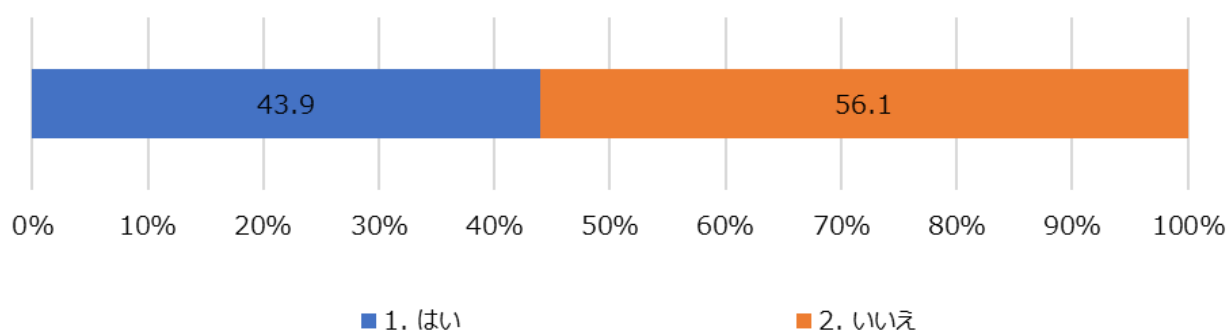
≫ 「6. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

回答:「所属組織内関連部署への支援」「(学生の)キャリア・就職活動の支援」「職員・学生の相談」「国家試験対策」など。

⑤コロナ禍における、科研費による研究遂行状況について伺います。

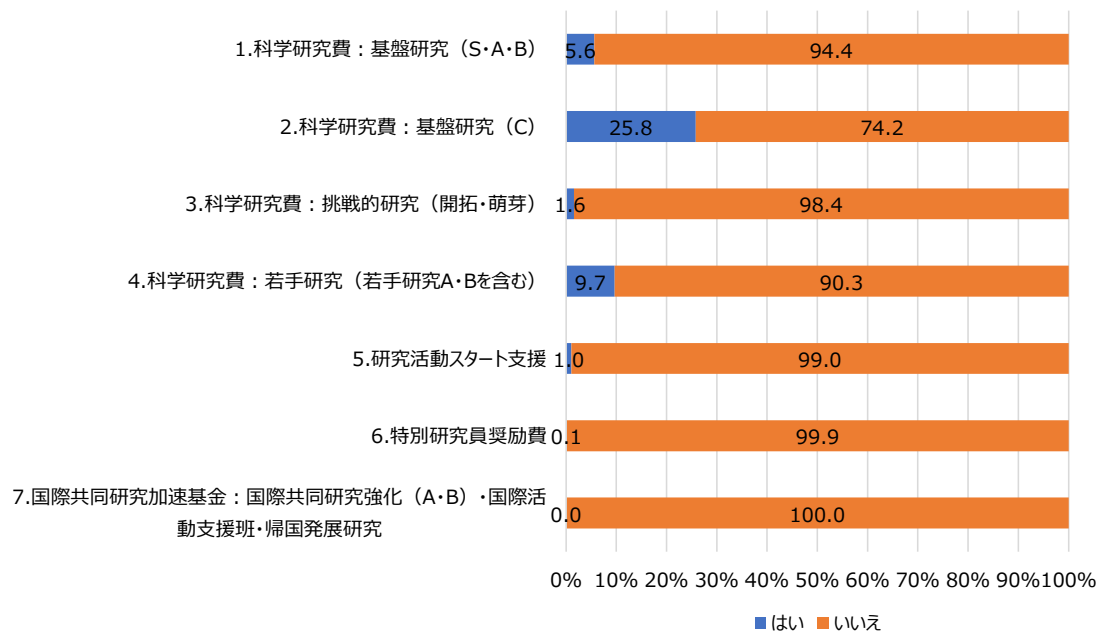
問 5-Q1

Q1. あなたは今年度(令和 2 年度)、研究代表者として科研費(文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金)を獲得していますか(継続分を含みます)。(n=1,428)



≫ 「1. はい」とお答えした人にお尋ねします。研究代表者として、どの研究種目を獲得していますか。(複数選択可)

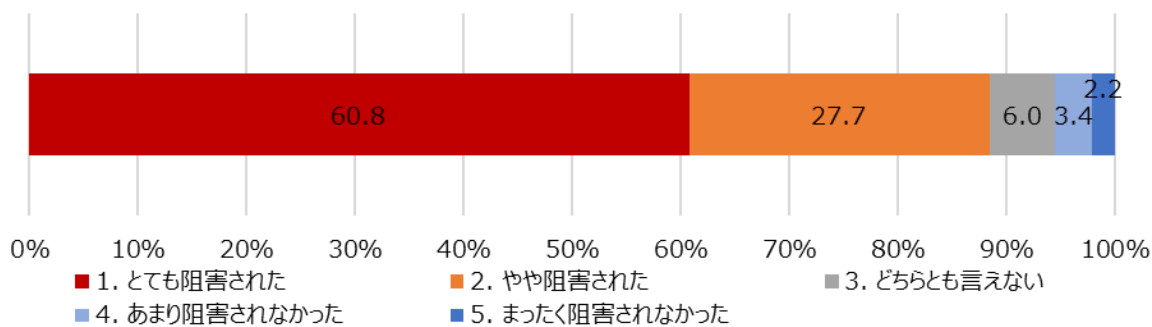
1. 科学研究費:基盤研究(S・A・B)
2. 科学研究費:基盤研究(C)
3. 科学研究費:挑戦的研究(開拓・萌芽)
4. 科学研究費:若手研究(若手研究 A・B を含む)
5. 研究活動スタート支援
6. 特別研究員奨励費
7. 国際共同研究加速基金:国際共同研究強化(A・B)・国際活動支援班・帰国発展研究
8. その他の科研費



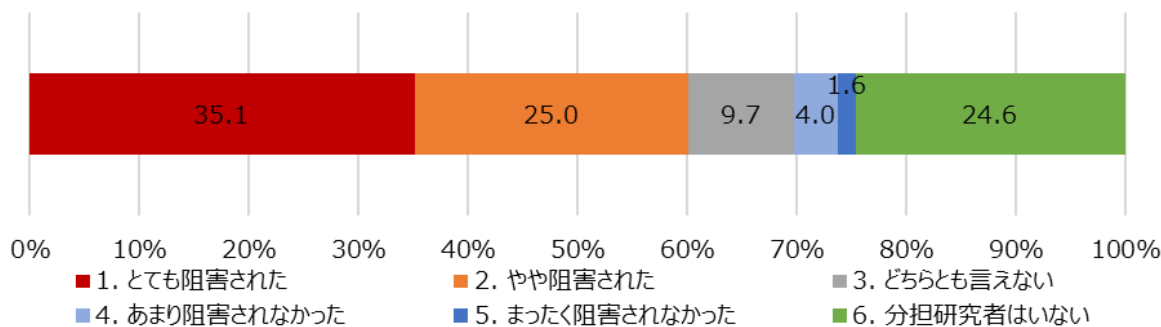
≫ 「8. その他の科研費」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

「8. その他の科研費」としては、「学術形成基盤事業：アジアアフリカ」などがあつた。

≫ 引き続き Q1.で「1. はい」とお答えした人に、当該研究についてお尋ねします(複数の科研費の研究代表者である場合は最も予算額の多い科研費についてお答えください)。当該研究において、あなたが「研究代表者」として行う今年度の研究計画遂行は、コロナ禍によりどの程度阻害されましたか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。(n=650)

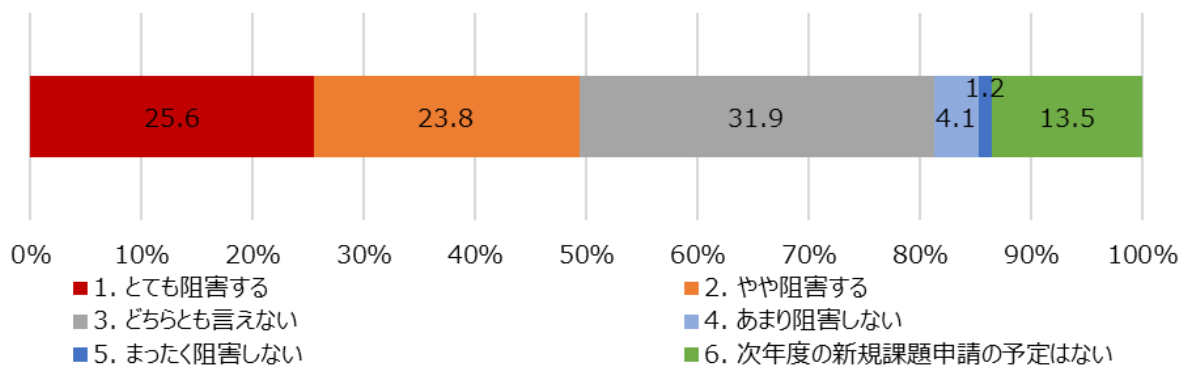


≫ 引き続き Q1.で「1. はい」とお答えした人に尋ねます。当該研究において、「分担研究者」が行う今年度の研究計画遂行は、コロナ禍によりどの程度度阻害されていますか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。(n=629)



問 5-Q2

Q2. コロナ禍における現在の研究状況が、次年度の新規の科研費申請をどの程度阻害すると思いますか。もっとも当てはまる選択肢をお選びください。複数の科研費を想定される場合は、最も予算額の多い科研費についてお答えください。(n=1,236)



≫ 「1. とても阻害する」「2. やや阻害する」とお答えされた方は、その理由についてご記入ください。

- 最終年度予定であるが、調査実施ができなかったため、期限内に完了しない可能性がある。
- 停滞や計画変更によるタイムロスの影響具合で申請時期を検討する必要が生じそう。
- 病院でのデータ収集ができない
- 患者家族にアクセスできない
- 今年度の研究の進捗が大幅に遅れており、来年度申請する申請書の内容にどこまで研究結果を書けるかが分からないため。
- 今年度の研究計画が実施できていないため
- 教育に非常に時間が取られるため、研究に費やす時間が限られている。また書籍などの資料は大学の研究室にあるが、気軽に構内に立ち入ることができないため、見たい時に見ることができない。文献等を気軽に入手できない。
- 科研費申請書に記載する研究計画を具体的に実施できるかわからない状況であるため、研究計画を立案しづらい。
- 医療機関が対象施設なので、気軽に調整・調査ができない。
- コロナの影響で、対象者も研究者も調査をする時間的・心理的余裕がないため、データ収集に関する活動ができず延期している。
- 海外調査を申請することに対して葛藤がある

- 研究調査を臨床で実施する場合、研究倫理審査申請や受入れ施設の選定によっては研究が困難となる可能性が懸念される。
- 共同研究での会議が有効にできないこと。研究の実施において病院や大学等の施設を利用する予定であるため、研究対象者への接見する機会などに影響を及ぼす可能性があること。
- 本結果をもって、新規研究計画を立案し、科研費に応募したいとかがえているため。
- 研究計画を大幅に修正する必要があるため、実行可能な方法を考えられるか不安であるため。
- コロナ禍による研究の進捗の遅れ、つまり成果産出の遅れが、影響すると考えられるため。
- コロナ禍における大学運営および授業形態の変化に伴う調整時間が増加したため、研究指導は実施できるが、自身の研究活動は停止している
- 遠隔授業の準備と評価に時間が取られ、研究計画書を書く時間を捻出できません。
- 研究方法の変更が必要になること
- フィールド調査ができないこと
- 高齢者施設での調査ができないため。
- 地域の人を対象にする研究ができる状況になるのかが心配である。
- 申請書を作成する時間や、協議する機会がとれない。
- 研究参加者の確保につながっていたセミナー等の開催ができなくなった。これにより、継続申請する予定であったが、参加者確保が難しくなり研究計画をどうするとよいか苦戦している。
- 対象者の業務過多の中、研究への協力（インタビューやアンケートへの回答、郵送など）によって費やす身体的・心理的負担を強いることを考えると、研究を実施することに躊躇する。
- 国のコロナ対策で科研費などの事業への予算配分が少なくなることが心配
- 研究期間を延長せざるを得ないため
- 申請書に記載すべき予備データが揃わない。
- 教育実践研究の教育実践が行われず、研究の基盤が構築できなかったため
- フィールドにいけず、データ収集が出来ず、研究が全く止まっているため。
- フィールドの開拓が思うようにいかないかもしれない。ICT 企業が契約金額上げるのではないかと（金銭的不足）
- 今年度の予算執行状況が審査に影響するのではないかと危惧している
- 今年度の成果を基盤とした申請書の提案ができなくなる恐れがある
- 教育や組織運営の変革やその対応に多くの知的生産作業や労力を割いています。
- 新たな研究活動への着想や動機づけが保ちにくく、目の前の大学運営や教育の課題への対応が最優先となっています。
- 医療職を対象とした調査や病院での調査を希望しているが、新型コロナウイルス感染拡大のために調査計画を具体的に考えるのがはばかれる。
- 特に、都道府県境をまたいだ移動がしにくい。オンラインでの調査には限界を感じる（相手に負担をかける、細かい表情や施設の様子などをみることができない）。
- 今年度の結果の学会発表が行えなかったことで、現在の科研の業績が阻害された。現在、英文での投稿準備中だが、アクセプトまでには時間がかかり、科研費申請までには間に合わないことを考えるとやや阻害されていると思う。また新たな調査を行うことが難しい。医療施設への依頼は

ほぼ不可能であり、医療施設以外であっても負担が大きいことを考えると調査を実施するのが難しい。

- 感染予防対応に追われがちのため、落ち着いて研究に取り組みにくい。
- 研究が計画通りに進まないため
- 今年度の研究がすすまないため
- 次の科研費の申請に必要な臨床データの収集開始時期が遅れ、必要十分なデータにもとづく申請ができないと思われるため
- 調査施設に行くことができない
- 今年度、当初の研究計画通りに進行する見込みが低く、期待される成果への影響が考えられるため。また、新規の研究計画を立てづらい状況にあると感じています。
- 調査対象が病院や施設の場合、データ収集に制限が生じたり、データ収集のために必要な感染予防具の購入費用などが生じるため
- 現在の研究の成果を生かした次の計画を検討していたが、目途が立たなくなったため。
- 学会での発表は紙面上の発表が主となっているため。
- 計画書自体が他の仕事に押されて遅れている。授業も再開が遅れたので、その分後ろ倒しとなっている。
- 国の財政基盤の脆弱化
- 研究フィールドの確保が難しくなるのではないか
- 調査対象へのアクセス方法の検討が必要だと考える
- 本年度実施予定とした介入研究が足踏み状態のため。
- 体調不良により1年間延長して2020年度を迎えたが、新型コロナウイルス感染症の影響で調査や介入ができない可能性があり、研究プロセスが停滞してしまう可能性が高い。新規研究計画の申請をするには、現在の研究を進める必要がある。
- 感染関連の研究枠が広がり、そのほかの研究に予算が配分されるか不安
- 学会やセミナーなどが延期・中止をしている状況で科研費の申請となると得られる知見が少なくなっているため。
- コロナ禍でインタビューの研究対象者が減少したため、適切な研究結果が得られない可能性がある。それにより研究内容の質が低下することから、次の申請の採択可能性が減るリスクを感じている。特に看護の分野では、研究フィールドが臨床である場合が多く、その確保が難しいと思われるため。また、コロナによる影響で教育の大改革をせざる得ない現状のため、研究に費やす時間が減っているのではないかと考えられる。
- 研究実施困難なため、成果公表が遅れて次年度申請に間に合わないため
- 現状でいろんなものが夏休みまでに移行され、後期は例年通りのカリキュラムに戻していくとされているため、科研費の準備に大きく影響が出る可能性があります。コロナで心身ともに疲弊している状態で、これ以上時間と気力を捻出することに対して疲弊感の方が先だってしまう。
- 現地視察の予定が全てキャンセル・延期になっており、再開の目処が立っていない。そのため研究進捗にかなりの影響が出ており、次年度までの研究なのだが予定通りに終わりそうにないため、継続して基金をいただくことができるのか、不安である。

- コロナ関連の研究テーマが優先的に採択されそうな気がする。
- 臨床での活動が許可されていない(直接の接触ができない状況)で、新たな研究デザインを想起できない
- 今年データを得ることができないので、次の研究に活かせない。
- 臨床・臨地の調査対象者へのアクセスが制限される前提で、すべての研究計画を見直す必要がある。
- 高齢者を対象としたインタビューが、新しい生活様式に合わせにくい(webが使いづらい)ため、研究計画の変更をせざるを得ない
- 予定が遅れている
- 現在の高齢者に対するインタビュー調査が中心であるため、オンラインで実施するということが難しく全く進められていない。かつ、授業、演習、特に実習の実施・調整に膨大な時間をとられており、代替プラン等、研究について考える余裕がない。
- 計画の大幅変更
- 研究対象は医療機関であるため、コロナ禍において研究依頼をすることが難しい。そのため、データを収集することができず大変阻害されている。今年度は最終年度であるため、やむをえず1年延長することを考えているが、通常とは別に、コロナの影響で研究を進めることができない研究者への研究期間延長の特例などがあると良いと考える。
- 予定していた対象者に対する調査が全くできない状況であったため。また、オンデマンド型配信の講義準備に時間をとられ、研究実施(論文執筆)の時間を全く確保できなかった。
- 研究フィールドの確保困難
- 高齢者の介入研究を予定していたため
- 研究対象者への接触ができなくなったので、基礎的なデータの収集ができなくなったから
- 今年度の研究計画を遂行することが困難であることから、次年度への繰越を想定する必要がある。
- 次年度の申請期限までにデータ分析を終了することが難しいため。
- 看護研究は人を対象としており、人と接触できない状況ではデータどりがすまない。
- 感染予防、拡大防止に努めたデータ収集(臨床での参加観察)の具体的方法の代替手段が検討できていない。
- 現在の取り組んでいる研究結果の課題を次年度の新規科研費申請として、検討している。そのため、現在取り組んでいる研究が、実験・介入研究できないと結果も出ないだけでなく、研究方法を再検討しなければならず、次年度の申請には時間的猶予がない。
- 研究協力を得られにくいと感じている。
- コロナの状況により、インタビュー実施の困難や医療施設への協力は得られにくいまたは、バイアスがかかるようにも思う。
- 次年度の申請書の際、現在の研究の成果を実績として、計画することができない。
- 計画書を書く時間がない
- 研究対象者との接触困難
- 研究計画を立てるに辺り、さまざまな制限が出てくるのではないかと考える。

- 研究活動が停滞したために、研究成果と課題を整理することが困難になり、研究を発展させるための次年度の申請に向けた申請書の執筆が困難になった。
- データ収集が進んでいない
- 申請関連の書類作成に使う時間が確保できない。研究デザインを変更する必要がある。
- 現在進行中の研究が中断している。
- 公衆衛生看護学分野なので、調査フィールドが、保健所・市町村保健センター・公衆衛生看護学担当教員など、どの対象も忙しくて研究協力依頼ができない状況がある。
- 実践が展開できず、延長せざるを得ない
- もともと対面での教育研究を検討していた。オンライン等に変更することは可能だが、その場合の倫理的配慮も考えなければならない。
- 延長申請をするしかないと思っているため
- 度重なる授業や実習に関する方針変更や慣れないオンライン授業の準備に費やす時間が多く、新規の科研費申請に手が付けられない。
- 対象者が小学生であるため、学校での研究活動が難しい
- 対象が NICU や新生児室の看護師、家族であるため、調査が難しくなる
- 実践教育をテーマとしているため、集団教育が難しい現状では、調査が困難となる
- 研究協力を依頼していた臨床の施設への訪問が禁止されているので、研究の依頼が滞っている。外部者の立ち入りの目途が立たない。
- 施設側はリモートにおける依頼の実績がないため、新たな方法への転換は困難な状況である。
- 臨床を対象に調査協力について
- 3密を避ける必要があることから成り立たないかもしれないため
- 講義、実習に配分する時間が多く、新たな申請への時間がとれない、意欲がない。
- 共同研究者として臨床での調査ができないことから結果・分析に進めることができない。研究代表者は、今年度のデータをもとに次年度の新規科研費の申請を行う予定であった。
- 現状だと、来年度以降も病院との共同研究を実施することが難しいため。
- 面接調査の困難が予想される
- 今年に入り、全く進捗がないため。
- コロナほど優先度が高くないため
- データ収集が十分に行えないため、論文等の執筆が遅れ、業績の蓄積に影響すると考えるため。
- 臨床での調査が可能であるかの見通しがたたず、臨床調査を伴う研究を遂行できる確証が持てないため。
- 国際学会中止等による業績の減少や研究遂行の遅延が想定されるため。
- 採択される計画がコロナ関連の研究に偏るのではないかと危惧している。
- 実習準備、授業準備に忙しいため。
- 研究が制限されるから
- コロナウイルス対策のため、科研費申請のアイデアを練る時間が削減されるため
- 集合研修を行うプログラムを企画しているので、集合研修自体が実施できなくなる可能性がある

ため

- 学外の研究者との情報交換や情報収集などに支障が出る
- 本来ならば科研申請のための基礎調査を今年度行う予定であったが、このコロナ禍で実施することができず。どう申請をしようかと考えている。
- プログラムの検証をする際の参加人数の減少が予測され、統計学的な精度が低下する可能性がある。
- 研究費獲得に向けた準備作業の遅れ
- データ収集が確実にできるかわからないので、計画を作成するのが困難
- 通常業務が増加しており、次年度科研費の申請に影響が出ると思う
- 今年度の調査がまだ終了していないので、現在の研究をさらに発展させるため次年度の申請が厳しいと思われる。
- 病院での実習中に行う研究を予定しているため、病院実習自体が厳しい状況にあること。また、感染予防を取りながら、実習を行っている中での研究のお願いも非常に厳しい状況であるため、同様の研究を引き続き行うことは困難であると予測されるため。
- 完了に至る見込みがなく、次年度の申請を憂慮している。
- コロナの状況が収束に向かうとは考えられず研究の計画が立たない
- 医療機関への調査を予定していたが、本日時点でも実施に至っていない為。
- 研究計画を立てる時間が十分に持ていないから。
- 研究協力者への介入研究が実施できず(当該施設への入所不可)、研究を進めることができない。この研究結果により、次年度の研究へと展開する予定であったが、現在の研究を1年間延長し、次年度は申請しない予定である。
- 対面での調査活動が阻害される
- 研究対象を患者としたいと考えているため
- 今年度が最終年度であるが、延長とするか迷っている。
- 対象施設との打ち合わせが困難になる。対象者が患者様の場合、インタビューなどが困難になることが予測される。
- これまで収集したデータを基に仮説を立て申請する予定であるが、コロナ禍によって演習や実習ができない為、教材開発や学生の健康管理に時間がとられ、データ分析が進んでいない。その為、申請書の作成のための時間の確保が難しく、また、精神的にも疲弊し、新たな研究の発想も湧かない。
- 臨床での研究に関して、研究を受け入れてもらえるかどうかかわからないので、臨床における介入研究は避けざるを得ない。
- データ収集や学術会議への参加(発表)ができないため
- インタビュー調査や介入研究等、感染対策を行ったとしても研究対象者を確保することが難しいため。
- 研究の調査ができるのかという点において、阻害されるのではないかと考えております。
- 研究組織構築の難しさ
- 全般的に研究計画が遅れているために、現在の研究を発展させる研究を申請する際には、その

発展の方向性を申請時に明確に示すことが難しい可能性が高い、また新たな研究を申請するエネルギーが低下していることもある。

- データが取れないことにより研究成果が出せておらず、次の段階の研究計画が立てられない。
- この状況が長く続くことが予想され、情勢も日々変化しているので、研究の時間確保がますます難しくなると思います。
- 今年度は在宅療養中の高齢者および家族介護者を対象にプログラムに沿って介入し、その評価を行う予定であったが、コロナ禍であるため研究協力者の募集を中断している。今年度は研究協力者募集の見通しが立たない現状である。
- 調査施設の受け入れ状況や対象者の選定等、具体的に研究計画が立てられない
- 具体的な研究計画が立てられないため予算等の目途が立たない
- 学務(教務委員会)に時間を取られる
- 臨床でのデータ収集が実施できないこと
- 科研費自体が削られる可能性があるため
- 研究の実現可能性(研究先の確保の困難さ)
- 国際学会での発表後に国内投稿を予定していたが、国際学会が変更を重ねたうえで延期となり、投稿が遅れた。色々悩み、国内発表に切り替えることとした。国際学会への旅費などが使用できなくなった。また、研究を進める上で妥当性を高めるために他者に分析の意見を伺いたいが、webでは十分な意見交換ができずにいる。
- 今年度の採択結果の公開(萌芽)が遅れているので、来年度のめどが立たない。
- コロナ影響を受けた教育対応の duty が大きすぎるため。
- 方法として実地調査を行いたいと考えているが、現時点では計画できない。
- データ収集が困難(調査者側だけでなく調査対象者の受入れも困難)、未消化経費の使い道に苦慮、現在取り組んでいる研究の遂行状況が芳しくない場合は新規申請を見送る、など。
- コロナの対応に追われる臨床現場にとって、緊急を要しない研究活動に協力が得られにくいと思うから
- インタビューによる調査に影響する
- コロナ禍において、研究協力施設に研究依頼を行うことさえ、躊躇する。また、遠隔授業の準備や学生のメール対応により、普段より教育に費やすウェイトが増えている。
- ピアサポートグループの効果を研究で明らかにしたいのですが、集まること自体にリスクがあるので、中断したままです。
- 研究が進まなかったので実績報告に反映するから
- 調査データが収集できない
- 第2波、3波が来れば、感染予防のため、病院への出入りや、介入研究が行えなくなることが予想されるため。
- 次年度申請に向け、現在採択されている研究データの分析ができず、結果がまとめられないため
- 全く研究を進められていない。
- 現在研究がストップしているため、次年度に構想中の次のステップの調査に進むことができない。
- 結果がだせないのでは

- 今後臨床との関係がどのように変化していくのかが不透明。
- 研究自体が、臨床での患者や地域での生活者を対象としたものであり、接触・会話などの制限が大きく影響してくる可能性がある。
- スケジュールでは、3月に被験者に介入し、8月に論文執筆ですがいまだに被験者への介入ができていません。
- 密になるため、被験者一同を集めることができません。
- 実行可能性が非常に低い中では、申請を躊躇します。
- 臨床現場のデータ収集が困難
- 2019年2020年にまとめたデータで新規申請をするつもりだったが、データが収集できなかった時期をどのように補填するか難しい
- 現在の研究を終息しきれず、次の研究計画を立案しにくい。
- 教育や学内運営に時間を取られ、研究に費やす時間が取れないため
- 研究活動が中断している
- プレ実験ができないので、申請書に具体的な内容が記載できない
- 研究対象者、方法に関して考慮すべき点があることから、研究計画作成が難しくなるため
- 研究方法の中で、実際の患者さんのご意見や実施への影響を知る必要がある場合への可能な方法が阻害されるのではないかと心配している
- 研究の対象が保健師であるため
- フィールドワークができない。
- コロナの関係で、研究倫理審査会の開催に時間を要し、研究に着手できなかった。
- 次年度の新規申請を差し控える(研究が中断し、予算を使い切れない可能性がある)
- 支援者向けの教育プログラム開発の研究であり、支援者がそもそもコロナ対応で研究協力依頼が現段階では、できない状況にある。また、研修会を開催してデータをとる予定であったが、研修会開催が現段階では困難。
- 臨床研究で、フィールドとしている病院へ立ち入れなくなったため、患者のリクルートおよび調査が1例もできなかった。(4月～6月)
- 縦断研究のため、途中のデータが収集できず、今まで集めていたデータの分析に支障をきたす。欠損値が多すぎて分析できるかわからない。
- 7月からフィールドに立ち入ることはできるが、コロナ禍で、研究対象者の入院や治療が制限されており、対象が集まらない。そのため、結果を示すことができず、今年度で終了予定の研究であったが延長せざるを得ない。新規申請ができない。
- 研究参加者の確保が難しい
- データ収集が全くできていないので、本年度実施する予定の研究ができていない。また、それによって、次年度の研究活動ができずに多大な遅延が想定される。
- 感染予防対策をとりながら研究を計画する必要がある、構想を練り直さなければならないため。
- 予定したフォーカスグループインタビューの実施が延期され、進行が遅れている。今年度が最終年度であり、ある程度の成果を出したかったため。
- 今年度予定していた調査が行えていない状況であり、研究の結果を次年度の計画書に反映する

ことができないため。

- 研究の進捗が阻害され、次の申請までに研究の区切りがつかない。
- 今年度の研究が病院に入れず遂行できないから
- 研究依頼施設が感染を恐れて研究協力を受け入れてもらえない。そのため研究が進まない。
- 現在の研究が予定通りに進んでいないため
- 研究が進まないので結果が出せず次年度の申請に影響をする
- 人を対象とした研究での面接調査は難しくなると考えられる。
- フィールドワークがほとんどできないことが予想され、研究方針の転換が迫られる。
- 臨床のメンバーが多忙、大学院生は講義の遅れ、教員もコロナの状況に合わせた授業対応で多忙という、みなが日常の変化と負担が増えているため。
- 研究を段階的に進めているので、現在の研究進行が遅れることによって、次のステップでの研究も遅延するため
- 研究の年間計画や具体的な研究方法を構築するのに支障がある。
- 研究対象としている施設(病院)がコロナ対応病院のため、研究活動をいつ開始できるか未定で、現在のコロナの状況を見ていると研究活動を開始しようとする動きでさえも不謹慎だと思われかねない。(倫理申請のみをお願いしているが受け入れてもらえない状況が続いている)
- 採択される研究テーマにコロナ関係、感染症関連などがあるのではないかと必要に迫られていると考えるため
- テーマがそれとは違う場合、影響が生じそうな気がする
- 教育方法の頻回な変更に伴い、研究にかける時間の確保が難しい
- 学会誌に研究論文を投稿していますが、査読が遅れています。このまま遅れれば、科研の申請に必要な論文の掲載が決定しないままとなり困ります。科研の採否に影響を及ぼすと考えます。
- 研究対象が外来がん化学療法を受ける患者とその家族、抗がん薬を扱う看護師、医師、薬剤師、看護助手などすべて病院関連であるため、コロナのために調査が中断している。一部協力してくれる病院で、少しずつ調査を進めているが、当初の予定から大幅に遅れている。
- 科研の最終年度であり、既に延長が必要との認識である。そのため、新規課題を出すかどうか迷っているため。
- 研究方法を大きく変更する必要があるから
- コロナの情勢に応じて変化する大学方針に合わせて実習要項や実習内容の変更や、講義演習の設計をやり直すことに時間が費やされて、申請書を作成する時間、研究を遂行する時間が大幅に縮小せざるを得ない状況。時間外に研究のための時間を設ける必要があり、休暇が十分に取れず、心身が疲弊している。
- まず、十分な申請書を作成できる時間が確保できるかという不安がある。
- 対面でのデータ収集が難しい。
- 移動が自由でないことから学会発表ができない。
- 調査ができない
- 調査のためのミーティングができない
- 学内の教育・業務(変更に次ぐ変更)に追われ、成果が出せない現状がある。

- 申請時に、現在までの結果の提示が不十分になり、基盤が薄くなる。
- 対面式調査の場合、質問紙調査は断られる可能性が高いので、Web 調査にしたほうが良いと考えている。Web の方法や質問調査票の作成方法も初めてで、戸惑うことが多い。
- 病院でのデータ収集を基本としているため、コロナの影響でほとんど実施ができていないため。
- 今年度、予定通りに研究がすすめられていないので、来年、どこまで計画をしていってよいのか悩む。
- 今年度の研究が遂行できない場合、予算を来年度に持ち越すため、新たな助成金を申請しようと思わない可能性がある。
- 対面で家庭訪問する実践での研究を予定していたが、コロナで訪問が難しくなり、現時点で実践できていない。今後、訪問の承諾が得られるケースが集まるかどうかかわからず、実践報告が何もできない状況になるように感じる。
- 研究遂行のための計画を考える上で、予測が立たないことがあり、計画策定が困難に感じるため。
- 現行の研究活動を遂行が困難な状況で、科研費申請の時間を捻出することで、健康上の阻害
- 研究の進捗が遅れているため、次年度に向けての準備ができない
- 今年が最終年度なので、終わらないと次の研究の申請ができないと危惧する
- 研究の進捗が予定よりも遅れているので申請準備に影響する。特に、現在の科研費での研究を論文化できないので、その結果を反映できない。
- 大学の講義・実習におけるコロナ対策検討のための時間を要し、申請書作成準備が十分に行えない可能性がある。
- 対面でのデータ収集ができないことによる研究方法の変更や計画遂行の困難、学会が Web 開催になったことによる情報収集の限界が実際として起こっているため、研究方法がいろいろな場合を想定して実施できるかを想定されているかの視点での審査が厳しくなることや旅費の減少に伴う研究費の大幅な削減があると考えている。
- データ収集ができないと成果が示せないため。
- この状況で研究ができるか不安である。
- 教育方法の変更に伴う対応で時間がとられ、かつ対面での調査が行うことができないため、研究の進行が大幅に遅れている。新規申請する意欲だけでなく、時間的にも余裕がない状態である。
- 現在の研究が計画的に遂行できないため、新規のことは考えていない。
- 次年度以降の研究方法をアンケート調査からネット調査へ、インタビューはネットインタビュー方法へ変更が必要となるため
- 研究テーマを限定される
- 着想を計画書にするまでの準備にかかる時間がない。
- 目標達成できない可能性がある
- 研究組織を編成する際に、分担研究者の effort の低減。インタビューや調査研究を計画する際に、強力施設の状況が推定できない。
- 医療崩壊に近い臨床ではアンケートの協力が得られない。
- 医療機関を対象としたリクルートなど大幅に遅延し、計画通り年度内に研究を遂行することが困

難となり、延長を余儀なくされているため。新規の研究計画に伴う各種調整、準備など困難な状況にある。

- フィールドワークや対面によるインタビューを行うことが難しく、研究方法の変更が必要となるため
- これまで取り組んできた研究方法を変更する必要があるため。
- 研究課題に悩む、コロナ禍に関連するニーズが高いと思われるので、今の研究課題を継続することが社会のニーズに合致するのかどうか。
- 研究を実施する時間を確保することが困難
- コロナ禍での教育準備に過剰な時間を費やしているため
- 4月は遠隔授業の準備に追われた。6月下旬から対面式講義となったが、遠隔授業で提示した内容を学生が理解していないことや覚えていないことが明らかになった。現在の対面式授業では、新しい単元を教えるとともに遠隔授業の単元の復習を取り入れる等、学生に理解してもらい覚えてもらうことに必死である。5月～6月の実習は、学内代替実習であった。その計画を立てること、実施に事前の会議も含め、大幅に時間がかかった。前期授業開始が遅れたことで、前期授業の終了が9月中旬である。9月下旬から後期領域実習が開始する。とてもじゃないが、時間が無い。今は、後期領域実習が学内代替演習になった場合と、新型コロナウイルス感染症によって学内立ち入り禁止となった場合の学内代替演習の遠隔バージョンを考える必要性がある。4月から、どうなるかわからない状況下で、授業・実習と、色々なバージョンを考えて準備をしておかなければならない状況に、心も疲弊している。
- 研究が遂行できないことにより、次の研究への着想および計画への発展が必然的に困難になるから。
- コロナによる対面の自粛や郵送受け取り拒否など、データ収集等を阻害する要因があり、先の見通しが立たないため
- 研究計画書通りに研究が進んでいない
- 遠隔教育など、通常とは異なる状況に時間をとられ、新たな研究に向けた活動時間がすくなくなるため。(後回しにするため)
- フィールド確保ができないこと
- テーマの見直しが必要。今に合わせた内容とは何か。アイデアを考える必要がある。
- 調査協力施設の確保が難しいと思う
- データ収集の計画立案が困難
- インタビューが実施できなかったのも、方法を検討しないといけなくなった。また変更点についての倫理審査も追加で必要になった。そのため、データ収集開始の日程が遅れている。
- 予算の削減が考えられるため
- 計画書を作成しても、患者対象の調査の場合、調査ができるかが疑問である。
- 学生を対象とした研究では、オンライン授業と対面授業での差があり、研究結果に差が出る可能性があり、計画書の作成がそもそもできない
- 調査実施の制限や遅れにより、対象者の確保数の減少、研究期間の長期化につながっている。
- 協力者の方々とのセミナー等が開催できない
- 研究活動が進まず、倫理審査会も遅くなっているため。

- 科研申請の基礎となる研究を行っていたが、臨床側の状況で研究をストップせざるを得ない状況となっているため。
- 研究フィールドに入れない。研究協力者との面接がかなわないため、研究を全く進めることができない。
- 今年度が科研の最終年度だったが、予定通り研究が進んでいないため、次年度の申請は難しい状況にある。
- 調査のためや研究交流会の開催、移動が難しい。
- 臨床での研究ができない
- 現在の科研が遅れ気味で、次の研究計画に要する時間が確保できないから。
- 今年度の研究の積み上げを行って行く予定であったが、今年度の進行が遅れてしまっているため
- コロナのことを考えて実践可能なデータの取り方を考慮しなければならないので、計画自体を変更しないと実施できないものがあるため。
- 研究方法の再考が必要なため
- 研究の準備のための文献すら読む時間が捻出できていないほどの業務量がある。
- そのような中では計画も練れず、研究計画書の作成まで、まずたどり着けない。
- また研究実績が出せないことでそのことを上司に責められ、精神的に追い詰められ、いつそのこと研究することをやめてしまおうと思う。
- コロナ禍による、オンライン講義・演習の準備・実施・評価や、臨地実習の中止にともなう学内実習の準備等で疲弊してしまい、研究に向かう気力と体力が捻出できない。
- 教育活動(準備や調整)に時間を費やし、研究活動の時間確保が困難である。
- 上記にエネルギーが必要であり、研究活動を負担に感じる。
- 前提の研究が進んでいないため
- 現在の研究が進展しなければ新たな研究課題を申請できないため。
- 研究方法として実施可能な工夫の記載が必要であると感じている。例えば、教育プログラムの開発をテーマにしたとき、リモート機器の予算の増額によって、研究対象数の縮小が懸念される。そのことで、全体的な研究規模が小さくなり研究目標の修正が必要になってくることが考えられる。
- 進んでいないので。施設の許可も出ないので。
- 臨床現場の方との研究がすすめられない。
- 現在はデータ収集を終えて分析中であったが、今後は分析をもとに新たに第2の調査を進める予定である。臨床での調査が困難であると考える。
- 学内外の感染対策対応で時間を費やしており、研究準備を進める時間の確保が難しい。
- このところ基盤 B を申請しているが 2 年続けて不採択である。予算がさらに削られると競争が激しくなることが予想される。
- 学生への教育のために、実習や、講義による準備で自身の研究を行う時間がほとんどありません。ただでさえ、超過勤務で疲労が蓄積し、体だけでなく、発想も阻害されると考えられます。ただ、そんな中でも遠隔会議システムなど、新たなデバイスや、研究活動のスタイルを模索し、改善していく必要はあると考えています。
- 住民を対象とした介入(健康教育)を予定していたが、保健センターや病院において集合形式の保

健事業はストップしており、実施できる目処がたっていない。

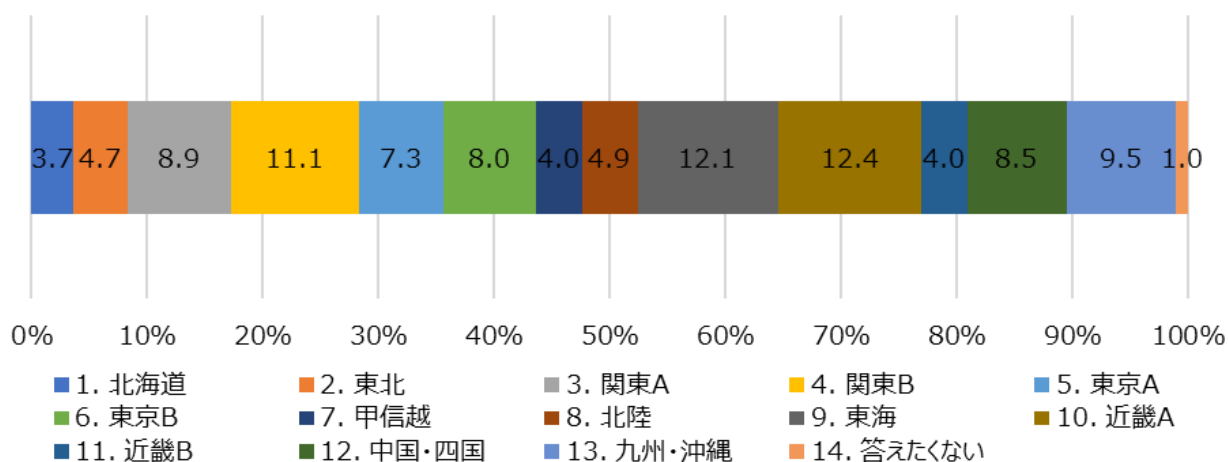
- 研究の遂行に遅れがでているため
- 大学への就職ができなかった
- 研究調査を行う時間が少なくなり、結果を出せる可能性が低くなるため。
- 研究のデータ収集が困難な場合が予測される
- 教育や大学運営、学生対応が大幅に増加したこと。
- 対面式でのデータ収集が困難となり、データ収集が不可能になった。
- 患者を対象とする場合、病院での調査などが制限され難しくなるため。
- 教育に割かれた時間が大きく、準備時間がとれない。
- 研究のフィールドとして、臨床現場に依頼することが困難になること。
- 研究対象者も通常の状態ではないので(今後は何が通常なのかも分からなくなっていますが)、正しいデータが得られない可能性がある。これらを考慮した研究計画を立てることが困難になると思う。
- 新型コロナ感染拡大の影響で、研究参加者が伸びず、研究計画時に予定した研究参加者を得ることができておらず、研究参加者募集期間を半年間延長した。また、縦断的に研究データを収集しているため、最終的な質問紙の回収が回収期間内にされず、ドロップアウトが増えている。本年度中に研究データ収集して結果が出せる予定であったが、困難となり、成果発表が遅れ、次の科研費申請へ影響があると考えます。
- 今年度の計画中止だけでなく、感染拡大の状況によっては次年度に延期する内容の変更を考慮しなくてはならない。しかし、感染拡大の状況や社会情勢の見通しが立たず、今のところ具体的な変更には踏み切れないため。
- 実践者の技術を研究テーマとしており、計測手法の研究方法を再検討する必要があるため。
- 教育の面で、今年度は新しい方法に変更することばかりなので、それに終わられてしまい研究に割く時間が取れないため。
- 計画している研究方法の変更を余儀なくされるから
- 時間が足りない。現状では新しいことを始めるのは不可能に近いです。
- 研究計画の見通しが立たない
- 看護職者や患者を対象にしたミックスメソッドを検討していたが、多忙になっている中で調査協力を得られる可能性は低く、実行可能性が極めて低いため
- インタビューの実施等はとて阻害されるが、既に得ているデータ分析や文献研究等は以前より進めることができている。全体的には研究活動は阻害されていないと考えており、むしろ時間を捻出しやすくなっている。「調査に出かける」以外のことは進めることができる。
- 3密回避のため、講義回数が増えて研究計画書作成にかかる時間が著しく減少する。
- 感染症対策として、当初予定していた介入方法の再検討が必要となったため。
- 病院をフィールドとした調査の実施が難しいため
- 臨床の現場に入ることに制限がある。

⑥あなた自身についておたずねします。

問 6-Q1

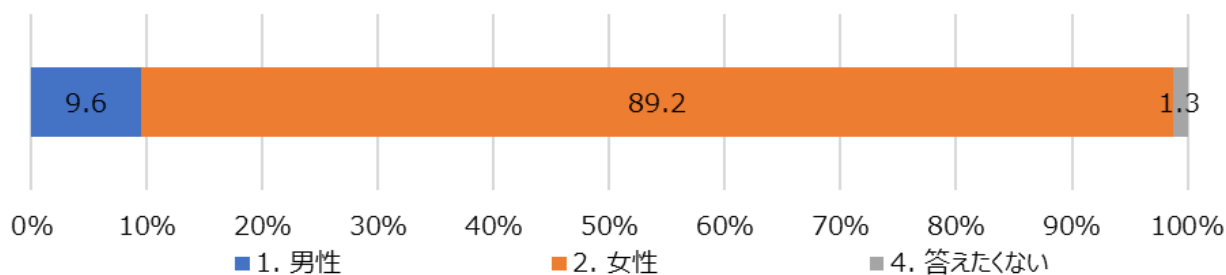
Q1. あなたの会員区分をお答えください(ご登録頂いている請求送付先の住所となります)。(n=1,453)

1. 北海道
2. 東北(青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島)
3. 関東 A(茨城、栃木、群馬、埼玉)
4. 関東 B(千葉、神奈川)
5. 東京 A(千代田区、中央区、港区、台東区、文京区、北区、荒川区、足立区、葛飾区、墨田区、江戸川区、江東区、品川区、大田区、島しょ、海外)
6. 東京 B(渋谷区、目黒区、世田谷区、新宿区、中野区、杉並区、豊島区、板橋区、練馬区、多摩地域)
7. 甲信越(新潟、長野、山梨)
8. 北陸(富山、石川、福井)
9. 東海(静岡、愛知、岐阜、三重)
10. 近畿 A(大阪、兵庫)
11. 近畿 B(滋賀、京都、奈良、和歌山)
12. 中国・四国(鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知)
13. 九州・沖縄(福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄)
14. 答えたくない



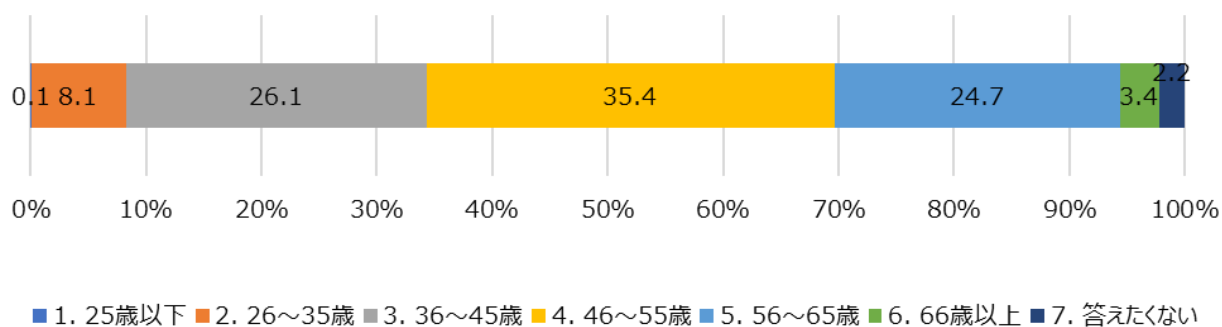
問 6-Q2

Q2. あなたの性別をお答えください。(n=1,445)



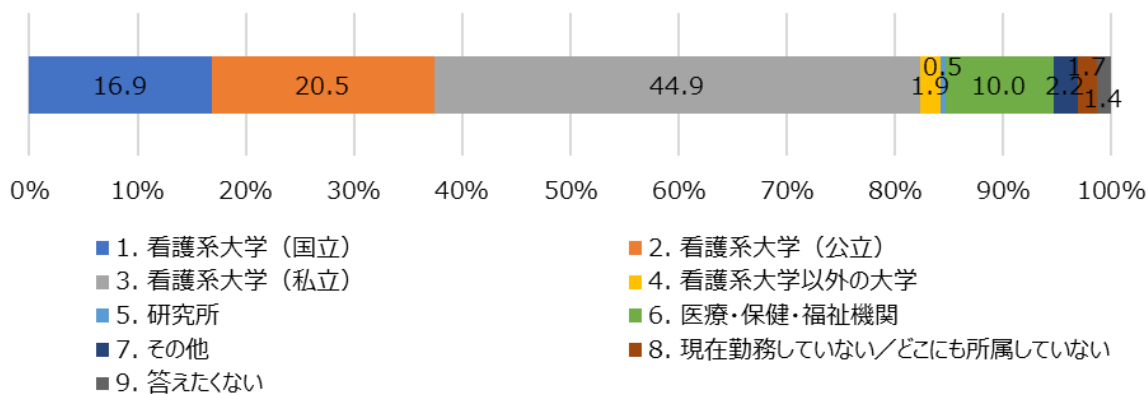
問 6-Q3

Q3. あなたの年齢をお答えください。(n=1,454)



問 6-Q4

Q4. あなたの主たる勤務先の組織をお答えください。(n=1,451)

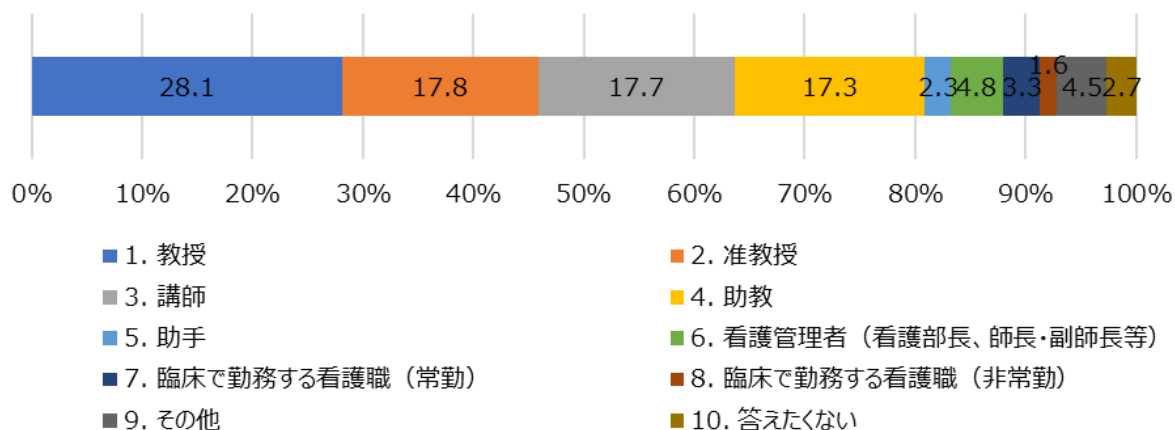


>「7. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

回答:「看護系大学(省庁立)」「看護系短期大学」「大学院生」「専門学校」「行政機関」「非営利団体」「民間企業」など。

問 6-Q5

Q5. あなたの主たる勤務先での現在の立場にもっとも近いものをお答えください。(n=1,438)

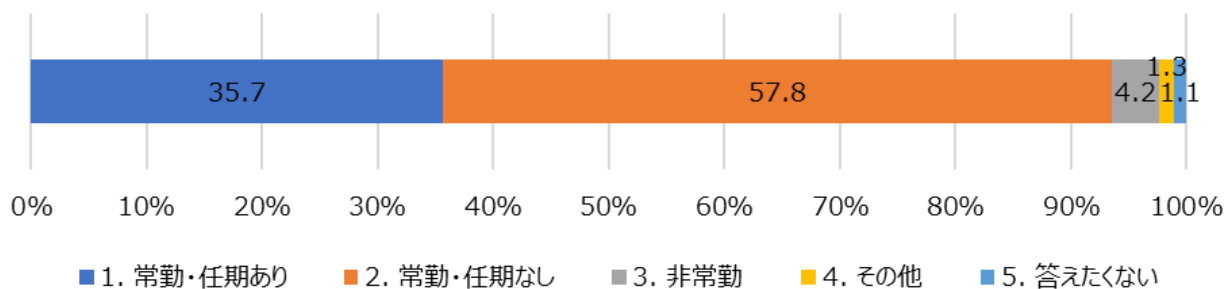


≫ 「9. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

回答:「非常勤講師」「大学院生」「勤務医」「個人事業主」「休職中」「無職」など。

問 6-Q6

Q6. あなたの現在の雇用形態をお答えください。(n=1,435)

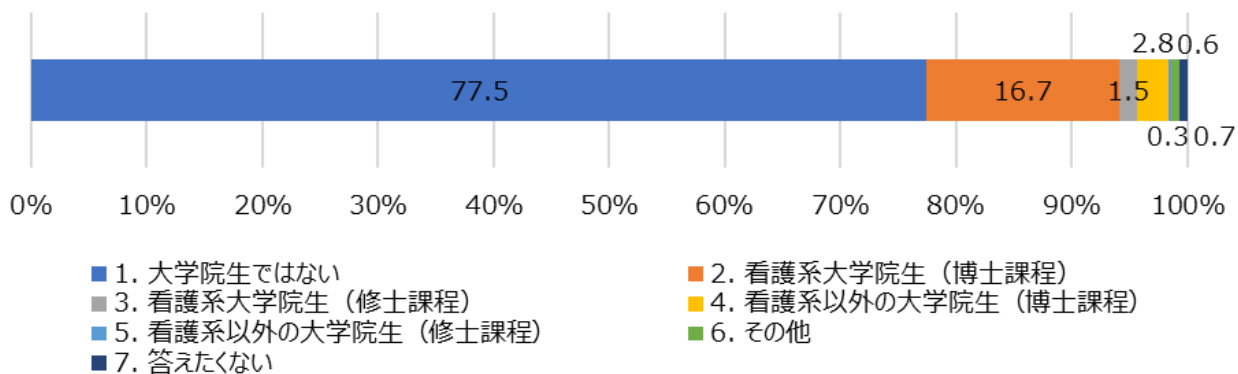


≫ 「4. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

回答:「無職」「開業(自営)」など。

問 6-Q7

Q7. あなたは現在、大学院生ですか。(n=1,435)

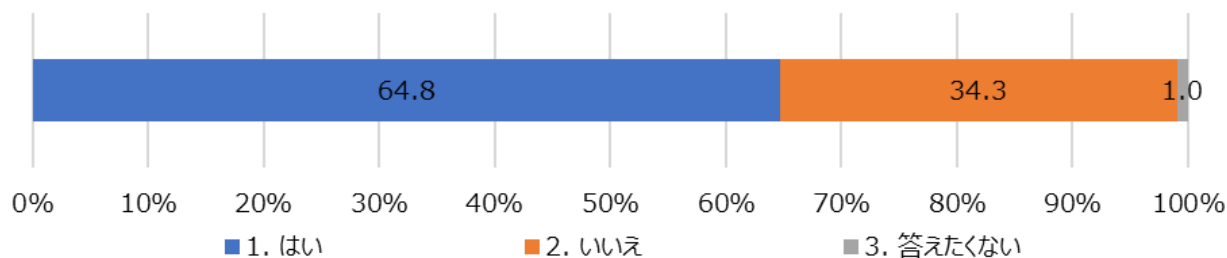


≫ 「6. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい。

回答:「研究生」「勤務医」など。

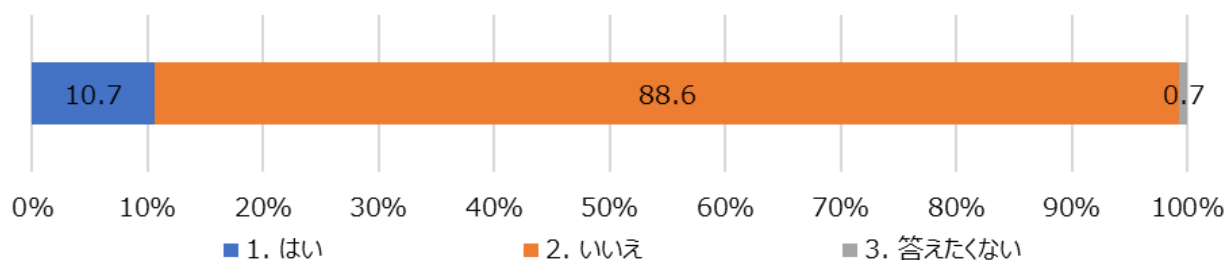
問 6-Q8

Q8. あなたの居住地(自宅)は、特定警戒都道府県(北海道、茨城、東京、神奈川、埼玉、千葉、石川、岐阜、愛知、京都、大阪、兵庫、福岡)に含まれていましたか。(n=1,450)



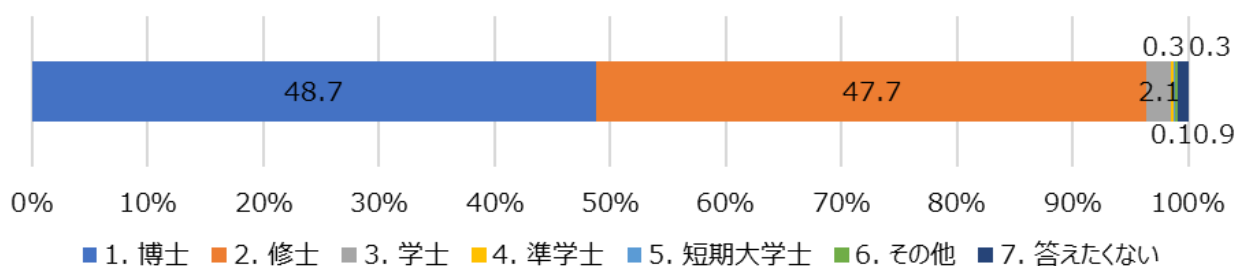
問 6-Q9

Q9. あなたは 2020 年の 3~6 月に就職や転職、退職をしましたか。(n=1,450)



問 6-Q10

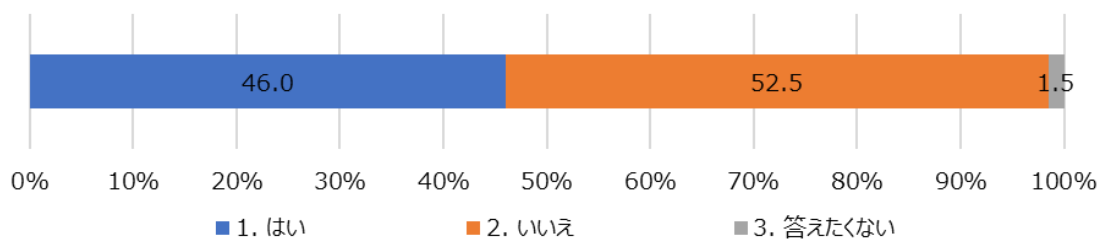
Q10. あなたの最終の(既を取得した)学位をお答えください。(n=1,455)



≫ 「6. その他」を選択の場合は、具体的にご記入下さい

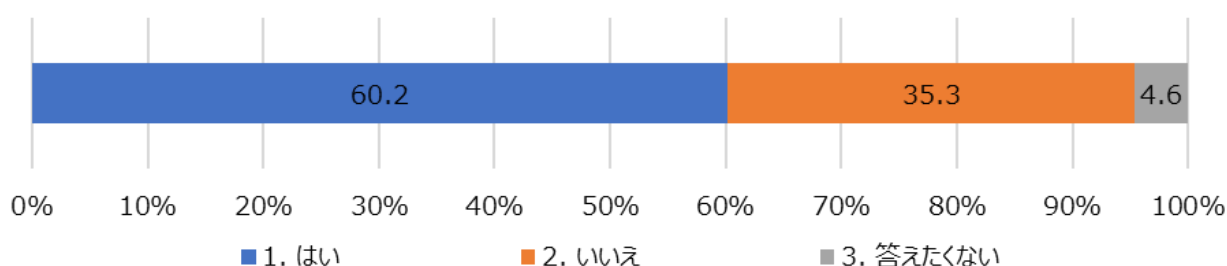
回答:「専門士」

≫ 「1. 博士」とお答えした人にお尋ねします。あなたは博士の学位取得後 8 年未満の研究者ですか。
(n=720)



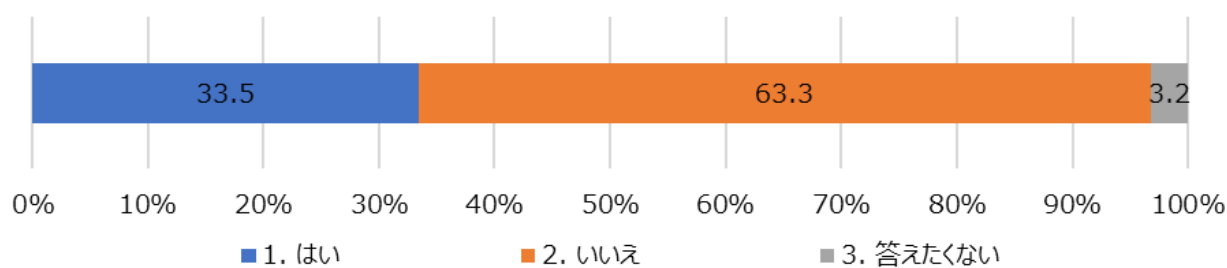
問 6-Q11

Q11. あなたは現在、同居するパートナー・配偶者がいますか。(n=1,421)



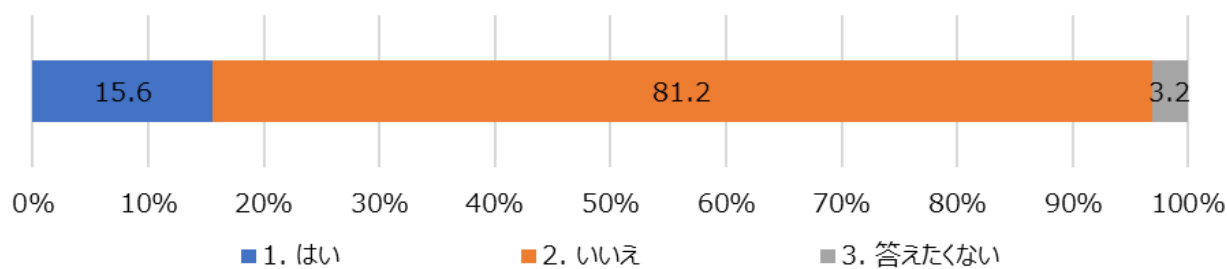
問 6-Q12

Q12. あなたは現在、お子さんの育児・養育をしていますか。(n=1,422)



問 6-Q13

Q13. あなたは現在、介護をしていますか。(n=1,422)



考察

本調査は日本看護科学学会員に対して COVID-19 の影響を調査したものであり、コロナ禍における看護学研究者の研究、教育活動の現状を把握するための貴重な資料といえる。

65.1%の会員が研究活動に費やす時間がやや減った／とても減った、88.9%の会員が自身の研究活動に不安があると回答しているなど、COVID-19 が本邦の看護学研究者の研究活動に与えた影響は極めて大きい。また、コロナ禍の前と比較して 69.8%の会員が「教育」に費やす時間が増えたと回答し、在宅でもできるはずの「文献検索」「論文執筆」に費やす時間も減ったと回答した会員が多かったことは、今回の調査計画立案の参考にした ResearchGate の調査[1]と真逆の結果であり、本邦の看護学研究者における特有の課題が浮き彫りになっている。

研究活動の阻害要因として、国内の移動手段の確保や出張の困難(76.3%)、講義にかける時間の増加(74.6%)、研究対象者との対面接触の困難(72.3%)、調査対象施設への出入りの困難(70.0%)等が挙げられており、臨床を基盤とする研究活動の困難さが認められる。一方で、ICT 化が進む社会情勢において肯定的な変化も認められている。遠隔による学会・講習会のメリットを体験(49.8%)、ICT を活用して国内の研究者間でのコミュニケーションが取りやすくなった(38.9%)、会議・出張の中止・延期による研究時間の創出(35.4%)、新たな生活リズムの構築(30.6%)等は、ニューノーマル構築に向けての行動変容の表れといえる。

このように会員が苦境に立たされる中、JANS としてできることは何であろうか。JANS への要望として、オンラインで参加できるセミナーや研修機会の充実(94.9%)、コロナ禍における効果的な教育方法の研修(91.6%)、コロナ禍を含む深刻な健康課題が発生した状況において研究と教育・実践・政策の連動を促進するネットワークの構築(83.7%)、コロナ禍を含む非常時に活用可能な研究方法についての研修(83.5%)、JANS が行う会員向け調査データのオープンソース化(82.8%)などが挙がっていた。オンラインでのセミナーや研修機会については、近年 JANS としても力を入れており、本調査結果を受けて一層の充実を図っていく。その他、一朝一夕には実現が困難なものも含まれるものの、JANS に求められる会員への支援策を検討する上での貴重な資料となった。

本報告書のデータは大学への所属の有無や年齢層など様々な要因を考慮せず全体の記述統計並びに自由記述について報告したものである。今後コロナ禍が研究活動に与えた影響についてより詳細に分析していきたい。分析を行っていくうえで、先述のように JANS への要望に「JANS が行う会員向け調査データのオープンソース化(82.8%)」が多く挙げられていたことからヒントを得て、独自の視点で解析から論文投稿までを主体的に実施する

研究者を公募し、共同研究とする枠組みを検討している。本データはオープンソース化することを前提として取得したものではなかったため、このデータをオープンソース化することはできないが、今後 JANS が有するデータを会員が有効に活用できる方法を検討していくうえでの第一歩といえよう。

以上、JANS 会員のコロナ禍での状況を把握するための基礎資料を構築できた。今後本調査結果を基に、JANS としての対応策を検討する。

文献

- [1] ResearchGate. Report: COVID-19 impact on global scientific community. 2020. Available:https://www.researchgate.net/institution/ResearchGate/post/5e81f09ad785cf1ab1562183_Report_COVID-19_impact_on_global_scientific_community [accessed 15 June 2020]
- [2] Academist Journal. 【緊急調査】研究・教育活動はどう変化した？ - 新型コロナウイルスがアカデミアに与える影響. 2020. Available: <https://academist-cf.com/journal/?p=13309> [accessed 15 June 2020]
- [3] 日本看護科学学会 研究・学術情報委員会. 若手看護学研究者の研究実施状況に関する調査. 2013. Available: Retrieved from <http://jans.umin.ac.jp/iinkai/kenkyu/pdf/> [accessed 15 June 2020]

謝辞

本調査に実施に当たり、日々の臨床、教育、研究、大学運営業務でご多忙の中ご協力いただきました JANS 会員の皆様に心より御礼申し上げます。

また、以下の理事には調査表作成に際し多大なご支援を賜りました。

真田弘美理事長、総務委員会：永田智子理事、石橋みゆき理事、和文誌編集委員会：宮下光令理事、英文誌編集委員会委員長：堀内成子理事、社会貢献委員会・利益相反委員会委員長：鈴木みずえ理事、国際活動推進委員会：池田真理理事、表彰論文選考委員会：亀井智子理事、広報委員会：田中マキ子理事

さらに、ウェブ調査フォームの構築にあたり有田孝行事務所長、吉川めぐむ様に多大なご支援をいただきました。感謝申し上げます。